潮の如く社前に群集報賽す。而して餘興には競馬あり、相撲あり、煙火、能樂、劍技等あり。此他各種の興行物妍を爭ひ美を競ひて賽者、詣人、肩を摩し轂を擊つ。かゝる盛況年々歲々異なる事なし。而して例大祭に合祀祭を併せ行はるゝや、更に盛大を極む。卽ち明治二十九年五月六日の如きは皇后陛下の行啓さへありて其盛況筆紙に、盡し難し。例大祭に天皇陛下の行幸ありしは明治七年一月二十七日の例大祭なりとす。同日は青赤二卷の倭錦を納め給ひ玉座にて御拜の後暫く御椅子によらせ給ひて陸海兵士の參拜を天覽あらせられ、叡感不斜して御製の御事ありしも此時なりき。凡て例大祭には五色の絹を附せる眞榊を樹て、神寶の鏡劍を獻じ神饌五十膳を供す。前一日淸祓式を修め後一日直會祭を行ふこと、最初よりの定

式なり。例大祭は社格制定までは　勅を奉して武官の執行せしことなれば、祭主には軍務官仁和寺宮殿下の奉仕せられしを始とし て、陸海軍長官又は其代理者之れに當りたりしが（○祭主の項參照）十二年六月社格制定以來宮司之れを掌る事となりて、陸海軍長官は玉串を のみ奉奠することゝなれり。當日遺族の待遇は最も親切叮嚀にして昇殿を許し、神酒神饌を戴かしめ、餘興觀覽の便利を與ふる等、掛官諸員の擧措頗る懇到なり。掛官は陸海軍兩省より出張し淸祓大祭直會等の祭儀に參列し、兩省を代表して神拜し屬僚を率ゐて庶事に執掌することは亦常例なり。（○掛官の條參照）祭式次第は多少の變遷あれども大體に於ては當初以來變更あることなし。

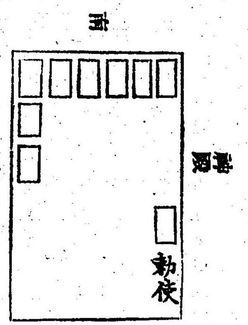
（明治三年正月三日大祭式）

招魂社祭儀　前一日申剋於殿前庭上修淸祓當日申剋兵部大少丞以下悉ク祓ノ場

ニ參集ス兵部丞以下史生省掌ニ到リ悉ク前殿ニ座ス預テ祝部等後取ヲ率キ前殿
ニ於テ各官ノ座席ヲ設ク自余等外ノ人及庶人ハ悉ク庭上ニ羅立スルコト二丈許座
定テ祭主代一人祝部等ヲ率テ祓ノ墟ニ登リ清祓ヲ修ス其目左ノ如シ
一、迎神　一、神酒　一、神饌　一、太刀
一、八方拜　一、行事　一、祓詞
畢テ大少丞以下祭事關係ノ輩ヘ祓ノ麻ヲ頒ッ後取之ヲ掌　一、神酒、神饌ヲ撤ス
一、送神
同三日
當日平旦祝部等後取ヲ率テ前殿ニ登リ諸席ヲ定メ賓薦ヲ敷カシム（但シ賓薦ヲ以テ服位ノ代トス）
先兵部卿前殿ニ登テ南方ノ第一座ニ坐ス（北面）次ニ兵部大輔少輔次ニ大丞少丞序ニ
隨テ列座ス大少錄ハ殿ノ東端ニ座ス（西面）
勅使來ルノ報ヲ得テ樂人樂ヲ起ス大少錄立テ九段坂上ニ奉迎シ前殿ノ北方ノ第
一座ニ引請ス座定テ樂人樂ヲ止ム此時祝部出テ本殿ノ傍ニ著座ス後取等ハ庭上
ニ順立ス（○神饌舍ト神殿トノ間）次ニ節ヲ打ツコト兩段樂人更ニ樂ヲ起ス後取等神酒ヲ役送
シテ祝部に傳フ祝部取テ神前ニ獻ス神饌ヲ傳進スルコト神酒ノ儀ノ如シ畢テ樂
人樂ヲ止ム祝部等退去ス次ニ節ヲ打ツコト兩段大輔一人進テ本殿ノ下座ニ著座

ス此時
勅使前殿ヨリ直ニ本殿ニ入テ神殿ニ向テ立大輔進テ案上ノ　勅幣ヲ取テ　勅使
ニ傳フ（○勅幣ハ預テ本殿ノ傍ニ置ク）勅使奉幣シ畢テ　勅使退去ス大少錄送儀前ノ如シ
ス次ニ大輔少輔大少丞等序ニ隨テ拜此時社前ニ於テ發砲ノ享アリ畢テ樂人樂ヲ
起ス祝部等神饌ヲ撤スル獻儀ノ如シ撤シ畢テ樂人樂ヲ止ム卿以下悉ク退出ス
同四日直會祭
當日平旦兵　丞　錄（○但一人錄一人）參集祭主代一人祝部ヲ率キテ前殿ニ登リ直會ノ儀ヲ
修ス其目左ノ如シ
一、迎神　一、神酒　一、神饌　一、祝詞
讀畢テ祭主代本座ニ復ス祝部等立テ土器ヲ丞以下參集ノ人ニ分配シ神酒ノ下リ
ヲ班給ス（○土器ハ預テ後取等北端ニ備フ）神饌ヲ撤スル事獻儀ノ如シ送神迎神ノ儀ノ如シ畢テ衆皆
退出祭儀凡テ畢ル
祝詞
天皇我大御詔乎奉氏兵部卿嘉彰諸乃靈乃前爾白左久明治元年正月三日伏見乃役
爾事始氐西乃京乎清米奉呂波奴臣等乎討氐東乃京乎治米馬爪乃伊都久須極越陸

奥乎言向和之船乃舳乃玉留流限函館乃敵乎拂比射向布者奈久賊者奈久速氣久治
米給布事波專汝魂等乃功爾奈母有氣留故八十日日波雖有事始志此月乃今日乎生
日乃足日止齋比定氏仕奉禮止詔大御詔以旦官位姓名乎齋主止志旦祝部等我爾爾
爾太襷取懸旦持忌廻波里造仕奉禮留幣帛乎捧奉良久止白須奉幣帛波御衣波明妙
照妙御酒波乾上高知乾腹滿並氏和稻荒稻爾山野乃物波甘菜辛菜青海原乃物波鰭
乃廣物鰭乃狹物奥津藻菜邊津藻菜爾至麻泥横山乃如置高成氏稱辭意奉幣帛乎安
幣帛乃足幣帛止受給比底　天皇我御代乎常磐爾堅磐爾守幸閇奉百乃官人府藩縣
乃宰爾至麻氏已我乎々不令有忠爾貞伎心乎以氏國乎護朝廷乎助氣伊曾志美仕奉
良志米給閇止白



掛卷母恐伎直日能神乃大前爾恐美恐美母白左久汝命乃守給比惠賜布爾依氏年爾
一度仕奉神事母奈久事無久速氣久事竟奴留乎宇禮志美悦備氏奈母奉禮止勅布
天皇我大命乎以旦事依志給大幣帛乎受給比氏今母以往母事不過仕奉良志米給
閇止姓名事執持氏仕奉良久止恐美恐美母白

〔編者云社格制定以前ノ祝詞祭式大凡上ノ如シ一端ヲ示サンガ爲ニ摘記ス〕

（明治六年六月八日布達）明九日招魂社大祭ニツキ休暇ノ事

（明治七年十一月六日例祭御祭文）

天皇乃大命爾座世此廣前爾式部寮七等出仕兼大掌典正三位四辻公賀乎使止爲旦白給波久止白左久例乃隨爾今日乃祭爾式官乃人等爾命世旦種々乃物乎奉旦齋奉良世給布此狀乎聞食旦　天皇大御代乎動久事無久佐夜具事無久常石爾堅石爾守幸波倍給倍止白給布

天皇乃大命乎甘良爾聞食世止白須

〔編者云明治七年ヨリ同十一年ニ至ルマデ五回ノ例祭御祭文ハ凡ヲコノ御文例ナリ〕

（明治九年十月三十日第一局伺）招魂社例大祭時限之儀昨年來時々之伺定ニヲ區々ニ相成居候處右ハ不都合ニ付自今左之通御治定相成度此段相伺候也

一月廿七日　午前第九時
七月　四日　午前第六時
十一月六日　午前第九時

追ヲ本文御決定ノ上ハ來月六日ヨリ御改定時限可相用候ニ付左之通海軍省ヘ御掛合相成度此段申添候也

指令十月廿一日伺之通

（明治十四年五月三日東京陸軍一般ヘ達）來ル六日靖國神社例大祭ニ付諸官廨休暇兵隊諸生徒休業候條此旨相達候事

（同十二年改正大祭々式次第）

早旦神官神殿ヲ裝飾ス午前九時神官幄舍ニ著ク次ニ神官ノ長官殿ニ昇ル次官以下之ニ從フ次ニ開扉（神官奉仕）此間軍樂（明治八年十一月六日例大祭ヨリ陸海軍々樂隊奏樂ノコト始マル）ヲ奏ス次ニ供饌（神官奉仕）此間軍樂ヲ奏ス次ニ陸海軍卿以下殿上ニ候ス次ニ祝詞神官ノ長官告ス次ニ勅使參向柵門外ニ於テ下車參進ス次ニ勅使昇殿掌典補二員之レニ從フ迎ノ儀アリ次ニ掌典補幣物ヲ神官ノ長官ニ付ス神官ノ長官之レヲ神前ノ案上ニ供ス次ニ掌典補御祭文ヲ　勅使ニ付ス次ニ　勅使神前ニ進ミ御祭文ヲ告ス次ニ　勅使神前ヲ退キ御祭文ヲ神官ニ付ス次ニ　勅使下殿退出（途儀アリ）次ニ陸海軍卿以下幷

禮次ニ神官拜禮次ニ陸海軍卿以下殿ヲ下ル次ニ撤幣（供此間軍樂ヲ奏ス次ニ閉扉此間軍樂ヲ奏ス次ニ神官輻合ニ復ス次テ各退出

（明治六年六月八日布達）明九日招魂社大祭ニ付休暇ノ事

（明治十二年十一月一日東京部内達）來ル十一月六日靖國神社例大祭ニ付諸官廨休暇兵隊諸生徒休業候條此旨相達候事

（明治十三年十一月六日例祭御祭文）

天皇乃大命（爾）坐（世）掛（畏）（世）恐（伎）

靖國神社乃廣前（爾）四等掌典正七位小西有動乎使止爲豆白給波久止白左久新代乃初（與利）處々乃役（爾）大勳功乎立給比之事乎恒（爾）米具久宇牟賀志久思保之食須賀故（爾）年毎乃今日乃祭（爾）御幣帛奉（利）齋祭（其世）給布此狀乎聞食豆

天皇乃大御代乎動久事無久彌益々（爾）常石（爾）堅石（爾）守幸倍給倍止白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美（毛）白須

（編者云明治十三年ヨリ廿四年ノ例大祭マヲノ御祭文御文例ハ凡テコノ例ナリ廿五年ヨリ〔大勳功乎立給比〕ノ下ノ〔之事〕ノ二字ヲ除キテ〔又夙久與利大御代乃爲米國乃爲米身乎效志力乎竭須止爲豆身亡（世）給比志人々乃事等〕ノ卅七字

ヲ加ヘザテ卅一年例祭ヨリ〔廣前〕ヲ〔大前〕ニ改メラセ、爾來現今ニ至ルマデ同樣ノ御文例ナリ、又云、六年以前ノ例祭宣命ハ起源祭日等ノ項ニ、十二年例祭ノ御祭文ハ名稱ノ項ニ揭ゲオキツ〕

〔例大祭次第陸軍省達明治卅三年四月改正〕

一五月十一月六日午前九時在京武官及ヒ文官（大禮服着用）本社ヘ參集スヘシ

一同日時戸山學校教導大隊騎兵實施學校教導中隊ハ競馬場內通路ノ南側ニ近衞師團諸隊ハ同路北側及ヒ富士見町二丁目ヨリ田安門外ニ沿ヒ堀端ニ第一師團諸隊ハ近衞師團ノ左翼ヨリ堀端ニ沿ヒ半藏門ニ亘リテ整列シ戸山學校教導大隊騎兵實施學校教導中隊近衞師團第一師團ノ諸隊兵種隊順ニ參拜スヘシ

一憲兵卒及ヒ其他ノ諸卒竝ニ諸生徒ハ諸隊參拜後ニ於テ各自參拜スヘシ

一十一月六日ニ在テハ勅使參向ノ後參拜スヘシ

一大祭當日東京陸軍一般休暇兵隊諸生徒休業スヘシ

〔陸軍服裝規則拔萃、明治三十九年二月陸軍省達〕

第十二條正裝ヲ爲ス場合概ネ左ノ如シ

五靖國神社大祭日（單獨參拜スルトキ）

第十四條軍裝ヲ爲ス場合概ネ左ノ如シ

九靖國神社大祭日（隊伍ヲナシテ參拜スルトキ）

恒例諸祭

本神社年中行事の定むる所に據るに、元始祭、紀元節祝祭、祈年祭、天長節の諸祭を中祭の例とし、新年祭、月並祭、一日祭、煤拂式、除夜祭を小祭の例とせり。○祭儀の項參照すべし。二十七年五月內務省訓令によりて祈年祭、當の二祭は大祭たるべきなれども本社にては舊例に據りて執行あるべき（せり近く改正なり）元始祭は明治五年一月三日此稱を立てられ、本神社に在りては同年一月廿四日始めて之れを行ひ○布告の後翌六年一月三日以來絕ねたることなし。紀元節祝祭は明治十四年二月十一日始めて之を行ひ、祈年祭は明治十三年二月十七日始めて之を行ふ、

○この祭は明治二年二月二十八日の御再興に係りて、毎年二月四日、班幣の儀を行はらるゝ重大なる祭典なり、然るに、十三年まで行はれざりし故は思ふに、本社は社格制定以前に在りては、一般神社と、聊か其趣を異にせしが爲なるべし、社格の定まりしは十二年六月四日にして、即ち其翌十三年より行はれたるなり、天長節祝祭は五年九月廿二日を以て擧行し、六年十一月三日は、改暦後始めての祭儀なりき、新嘗祭は明治六年十一月廿三日より執行す、同七年より孝明天皇遙拜式は明治六年一月廿三日より執行せり、

日を一月卅日と改定せられしかば隨つて改まれり、神武天皇遙拜式は明治六年一月四日太政官布告により同年一月廿九日始めて之を行ひ、爾後年々二月十一日之を行ふ、神武天皇御陵遙拜式は明治五年三月十一日より執行し、同六年改暦に因り四月三日に定められる、神嘗祭遙拜式は明治五年九月十七日より執行し同十二年より十月十七日擧行の事となりぬ、これらの遙拜式には社格制定ま

では神籬を樹てゝ廿五膳宛の神饌を献りて祭典を行ひ來たりしが十二年以後は神社祭式に據りて改められたり、

新年祭は明治三年正月元日之を行ひ以來年々變ることなし、月並祭は明治二年七月に始まり大祭の日を以て之を行ふ、初は月に二回或は三回又は四回行はれしこともありしが、同十二年六月より毎月六日一回となれり、一日祭は明治十二年十一月一日より執行し始めたり、蓋し宮中の御旬祭に準據して其中の主なる日を選びて斯くは定めしものなるべし、煤拂神事は毎年末に行はる、明治五年十二月一日○改暦によりて本日より本年の最終日なり始まれり、當日早旦本殿内外神饌所奏樂所等の大掃除を行ひ午後四時祭典を執行す、除夜神事は明治十二年十二月廿一日より執行す、○記錄に徴するに是より以前は大祓のみにて此神事は無かりしが如し

大祓式六月祓は明治五年六月廿九日に、十二月祓は同十二月二日に執行し始めしが明治六年より六月は卅日十二月は卅一日に擧行することゝなれり。○社格制定以前は神饌十五膳を供せしが以後其事なし

日供は明治十二年七月廿四日を以て伺を經、同八月一日より各官國幣社に準じ神饌三膳を供し現今に至れり。

清祓に二あり。例大祭、臨時大祭執行の前一日、及中小祭前に修するものと、神器祭具等、獻備の時若しくは穢忌ありたるとき臨時に修するものと是なり。後者をば又臨時祓とも云ふ。抑、清祓は明治二年六月廿八日始めて執行せし以來祭典前必之れを行ひき。臨時祓はまた二つに別つを得、一は惡祓にして明治十一年一月廿九日汚穢ありしに起り、一は吉祓にして同年十月廿六日神前の御鏡出來の際行ひしに始る。其旨皆清淨を欲するのみ。○大祭前清祓式は例祭の條に記載せり

直會祭は例大祭及臨時大祭等の最終日に執行し明治三年一月四日の例祭より始まる。○按ずるに、明治五年五月七日正遷宮ありたる時、八日饗宴も直會祭を云へるなり、其式例大祭の項に載す仍て略す。これ勅祭を無事に終了せしことを奉賽して解齋するなり。

（明治六年太政官布告）今般改暦ニ付キ人日、上巳、端午、七夕、重陽ノ五節ヲ廢シ神武天皇即位日天長節ノ兩日ヲ以テ自今祝日ト被定候事

（明治十二年二月二十八日式部頭通牒）春秋皇靈祭ニ付神社祭式中遥拜式增加之儀客年七月中及御通知置候處右ハ本年ヨリ被廢候條此旨爲御心得申入候也

〔編者云、本社ニテハ十一年六月式部寮ノ達ニヨリ同年九月二十三日一同之ヲ行ヒシノミナリ〕

合祀祭 附招魂式

仁德海の如き叡慮にませば本社の祭祀は伏見、鳥羽、函館役に於ける戰死者のみに止めさせ給ふべくもあらず、豫て仰せ出されし如く、將來國家の爲めに殞命するもの、及維新前の殉難者をもつぎつぎに合祀し給はむとす、これ漸次合祀祭の行はるゝ所以なり、明治七年佐賀騷亂に際し、節に死せしものを合祀せしを其第二回とし て、爾來臺灣、熊本、山口、福岡、鹿兒島の諸役、京城事變、維新前後諸藩殉難者、廿七八年戰役、廿三年清國事變、廿七八年戰役、韓國暴徒鎭壓事件等に於ける戰病死者傷歿者を合祀し、四十三年五月五日の合祀祭に至る迄總べて廿六回に到れり。〇祭神の項に詳かにす就中最多數の合祀は實に廿八年五月二日にして、百〇八祭神の數三萬八百八十三柱なり最も少數なりしは八年七月三日及び九年一月廿六日の各一柱とす。維新前殉難死者は明

治元年京都招魂社に合祀せられしも、當時未だ悉く志士を網羅して祭祀せられしにも非らず、されば同八年一月同社神靈をも本神社に合祀仰出されし時、各府縣の招魂社に祭祀せしもの、其他未だ祭祀の列に漏れし者等をも調査すべく府縣へ布達ありしなり、然れども調査のことたる容易に擧らずして、漸く第十三回合祀六〇十年五月の時に於て舊高知藩人を祭られ、爾後十回回、十六回、十七回、十八回、十九回、二十回、廿一回、廿五回、廿八回〇二十八回は三十三年五月なりの十度の合祀祭に於て悉く合祀せられき。百十一柱なり此合數三千六而してこの合祀の祭典を擧ぐるに方りては特に掛官を置きてその祭事に參與せしめ、諸般の事項を處理せしむ、近來の例によれば、合祀神靈多數なる時は之を臨時大祭と稱し、小數なる時は之を臨時祭と云ひ、臨時大祭には

祭典委員長及委員を設けられ（○臨時大祭委員長の項參照）臨時祭には掛官若干名を陸海軍兩省より差置かる。其愼重なること想見の外なり。合祀祭の前一日清祓式あり。其夜招魂式あり。後一日直會祭あり。招魂式とは先づ招魂場に祭壇を設け、左右に幄舍を構へ、正面に鳥居を建て其兩側に五色絹を附せる眞榊を樹ゑ、庭燎を燒き、陸海軍將校及各省總代軍隊警固の裡に宮司、禰宜以下を率ゐて神靈を招祭し、幣帛及神饌を供し、（○多くは午後十一時又は午前一時を以て行ひたりしが近年は午後八時之を行ふ。招魂場の項參照）訖りて行伍を作り、其の招祭せる神靈を本殿に遷し鎭祭するを云ふ。而して其翌日臨時の祭典を行ふ。これを合祀祭と稱す。此の合祀祭執行の日には必ず勅使參向ありて祭文を告せらる。（○其參向なかりしは明治十六年、十八年、二十一年、二十二年、二十九年、三十七年の五月六日の六回のみなり。二十九年五月六日には皇后陛下の行啓さへ有らせられしを其事なかりしは、或は禁中の御都合等によれるにもあらむ。然れどもかく

合祀祭に勅使の御差遣なき時は、同年の秋の例祭日に於て特に勅使祭文ありて更に祭神に對して禮の厚滯あることなきなり。）殊に明治八年七月三日と同九年一月廿六日との如きは、各一名の合祀者の爲めに莊重なる祭典を擧げ、陸海軍の大官之れが祭主を奉仕し勅使として祭文を納められしが如き、誠に祭神に對する叡慮の厚きを推知し奉るべきなり。

初めは陸海軍兩省の將佐官に於て招魂式を行ひ、翌日の合祀祭には長官（○祭主の項參照）之れが祭主を奉仕ずる例なりしかど、明治十二年以來兩省の官員は參列するのみにして總て宮司齋主を奉仕す。（○掛官の項參照）合祀大祭中特に盛大なりしは明治三十九年及四十年五月執行せられたる祭典にして、該祭典委員長には三十九年には野津陸軍大將、四十年には東鄕海軍大將之に當り、兩年共に祭資として國庫

より數萬の金額を充てられ、五月二日より五日に至り、延いて例大祭に亘れる前古未曾有の大祭儀なりき。況して畏くも兩陛下皇太子殿下の行幸行啓をはじめ内親王殿下、皇族各宮殿下内閣總理大臣以下、官公吏の社參あり、尚兩陛下の御下賜金、東宮殿下の御供物をはじめ各皇族殿下よりの御奉納、文武百官の寄獻擧げて數ふべからず。餘興には烟火、能樂、氣球揚、劍舞、太神樂、擊劍、柔術等あり。國旗の翩々として飜へれる、綠門の巍々として峙てる、夜は數知れぬ燈火の輝き渡れる晝夜を分たず、老幼男女左挈右提旁午絡繹殆んど名狀すべからざる狀況なりき。嗚呼本社祭神の遺德餘烈は高く天眷に達し、深く人心に入る斯の如し、尚ぶべき哉仰ぐべき哉。

合祀祭に際しては、忝くも前後七回の行幸四回の行啓有らせられ別に兩陛下の御代拜各一回あり、皇太子殿下三回、同妃殿下一回の行啓あり。各親王内親王殿下の數回の御參拜あり、洵に皇室の御崇祟、稱へあぐるも畏き事にこそ。

合祀祭は、例大祭に併せて同日に行はるゝ事あり、又臨時に行はれし事ありと雖も、多くは五月の例大祭を以て行ふを近年の例とす。合祀祭には在京の諸官員及び地方陸海軍々人に休暇を仰出されしことあり。官員兵士生徒に至るまで御酒料を賜ひしことあり。又其合祀を受くる祭神の遺族を特に、優遇する事最初より變る事なし。例へば昇殿拜禮、神酒神饌授與、紀念品分配、能樂、相撲、遊就館縱覽、及皇室より特に濱離宮、赤坂離宮、新宿植物御苑、帝室博物館、同動物

園の拜見を許され、忝くも濱離宮にては茶菓をさへ賜はるが如き
これなり。○就中其一例を掲ぐれば、明治三十九年五月合祀祭の時には汽車汽船賃旅
宿料等の割引を爲さしめ東京地圖案内圖案内書等を與へて之れを指導し、
參拜の際は特に紀念品を頒ち、旅團兵營、小石川後樂園等を參觀せしめ尚、大隈伯爵酒井
伯爵兩家の庭園帝國大學植物園豐多摩郡淀橋淨水場を觀覽せしめ、其他水族館珍世界、
花屋敷、本郷座外五個所の演藝場、縱覽割引券寄贈等の
如き茲に悉く掲げ難し、今は只その一班を示すのみ、

（明治八年一月十二日太政官達）嘉永六年癸丑以來殉難死節之靈東京招魂社へ合祀之儀ニ付別紙之通內務省へ相達候條此旨可相心得事

別紙

嘉永六年癸丑以來憂國慷慨之士皇運之挽回ヲ期シ未タ其志ヲ不遂致死候者ノ靈魂戊辰年中京都東山ニ祠宇ヲ設ケ祭祀被仰出候處今般更ニ厚キ思召ヲ以テ東京招魂社へ合祀仰出候條右東山配祀ノ者及是迄各府縣招魂場ニ於テ祭祀ヲ執行來リ候者共ヲ始メ其餘戊辰以前ノ藩々ニ於テ殉難死節之者其名湮滅シ未タ祭祀等ノ列ニ漏レ候者モ有之候間篤ト穿鑿ヲ遂ケ無遺漏姓名取調可申出此旨相達候事

但シ東山靈祠及ヒ各地招魂場等ハ從前之通被据置候此旨可相心得事

（明治八年一月廿五日內務省達乙）嘉永六年癸丑以來憂國慷慨ノ士皇運ノ挽回ヲ期シ未タ其志ヲ不遂冤死致候者ノ靈魂今般厚キ思召ヲ以テ東京招魂社へ合祀可相成ニ付京都東山配祀ノ者及ヒ是迄各府縣招魂場ニ於テ祭祀執行來候者共ハ勿論其餘戊辰以前舊藩々ニ於テ殉難死節之者其名湮滅シ未タ祭祀等ノ列ニ漏レ候者迄モ精密穿鑿ヲ遂ケ各人ノ履歷及ヒ殉難死節ノ顚末凡小傳ニモ可充程ニ詳細取調可差出此旨相達候事

（明治十一年六月二十七日太政官ヘノ伺）陸軍々人軍屬戰死ノ者ハ招魂社ヘ合祀相成候處昨年鹿兒島賊徒征討ノ際戰死ニ非サルモ別紙個條ノ如キハ何レモ戰鬪ノ事故ニ因テ死亡ノ者ニ付キ是等ハ總テ戰死同樣ノ取扱ヲ以テ招魂社ヘ合祀相成候樣致度此段相伺候也

別紙

一、敵ノ俘虜トナリ殺害ヲ受ケテ死シ或ハ敵ノ俘虜トナリ又ハ敵ノ線圍ニ入リ其死地ヲ審ニセスト雖モ死亡ニ決シタル者

一、敵ノ際碍物ニ觸レテ死シ戰鬪中山川ヲ踈跡シ之レカ爲メニ溺死轉地シタル者

一、戰鬪中他人誤發ノ銃丸ニ觸レ或ハ彈藥破裂ノ爲メ死亡スル者

一、戰鬪ニ因リ傷痍ヲ受ケ恩給ヲ賜ハラサル前之レニ原因シテ死亡ノ者或ハ戰鬪

中疲勞危難ヨリシテ終ニ一ケ年内ニ死亡シタル者
一戰鬪中ノ事故ニ因リ死亡シ前各款ニ等シキ者
指令　七月一日伺之通

（明治七年八月十九日各鎭臺各經營部へ達）本年二月佐賀征討之節戰死之者本月二十八日招魂祭被爲行候條本日諸官員休暇其他諸事例大祭之通可相心得且同日諸官員並ニ兵隊一同へ神酒料金八錢ツヽ被下候間其所管ニ於テ渡方可取計此旨相達候事

（明治七年八月二十日達）當二月佐賀征討之節戰死之者本月二十八日招魂祭被爲行候ニ付各局寮司等勤奏任官各一員判任官各一員爲總代來ル二十九日午後第十一時禮服着用九段坂上招魂場へ參集可致此旨相達候事

（明治七年八月二十日達）當二月佐賀征討之役戰死之者來ル二十八日招魂祭被爲行候ニ付諸官員午前第六時禮服着用同社へ參集可致且同日諸員並ニ兵隊一同へ神酒料金八錢ツヽ被下候條各所管ニ於テ渡方取計可申此旨相達候事　但本日休暇其他例大祭之通可相心得事

（明治七年八月二十七日兵學寮へ達）明二十八日佐賀征討戰死之者招魂大祭被爲行候ニ付諸生徒之儀モ諸官員同樣神酒料金八錢ツヽ下賜候條此旨相達候事

（明治八年二月十七日五鎭臺五工兵方面砲兵支廠へ達）東京鎭台工兵第一方面砲兵本廠ヲ除ク　臺灣蕃地ニ於テ戰死ノ者本月二十二日招魂祭被爲行候條同日諸官員休暇其他諸事例大祭ノ通可相心得且同日諸官員並兵隊一同へ神酒料金八錢宛被下候間於各所管渡方可取計此旨相達候事

（明治八年二月十八日達）臺灣蕃地ニ於テ戰死之者本月二十二日招魂祭被爲行候ニ付諸員同日午前第八時禮服着用招魂社へ參集可致且同日諸官員並兵隊一同へ神酒料金八錢宛被下候條於各所管渡方可取計此旨相達候事　但本日休暇其他例大祭之通可相心得候尤所勞等ニテ不參ノ向ハ第一局へ可屆出等外以下參拜可爲勝手候事

（明治四十年四月十五日內閣告示第一號）靖國神社臨時大祭ニ付在京官員及ヒ地方陸海軍官員ハ五月一日ヨリ五日間ノ內一日各軍隊竝陸海軍諸生徒ハ五月二日休暇ヲ賜フ旨被仰出　右告示ス　內閣總理大臣侯爵西園寺公望

（會計簿及奉納帳簿竝祭典關係要書抜萃）

明治三十八年五月臨時大祭　實費支出金高　三萬一千五百八十圓十八錢
同　奉納收入金高　七千八百〇二圓五十二錢

コノ內譯　金五百圓　日本郵船株式會社　金五百圓　三井八郎右衛門　金五百

圓　岩崎久彌　金三百圓　日本鐵道株式會社長子爵曾我祐準(以下數百名略ス)

コノ祭典ニ附キヲ獻備品奉納者ハ德大寺內大臣、寺內、齋藤、田中、芳川、清浦、曾禰、小村、波多野、大浦、久保田ノ各大臣大山滿洲軍總司令官、東鄕聯合艦隊司令長官以下數百名アリ、又相撲協會ハ角觝ヲ玉塚榮次郎ハ神社圓二萬枚ヲ奉納セシガ如キ枚擧ニ遑アラズ

明治三十九年五年臨時大祭　實費支出金高　四萬七千三百四十六圓四十五錢

同　奉納收入金高　一萬〇五百二十六圓七十錢

コノ內譯　金千圓　日本郵船會社長近藤廉平　金五百圓　日本鐵道株式會社長子爵曾我祐準　金五百圓　男爵三井八郎右衛門　金三百圓　毛利公爵　金三百圓　島津公爵　金三百圓　古川鑛業會社　金三百圓　內國通運會社長吉村甚兵衛(以下數百名略ス)

コノ祭典ニ付獻備品奉納者ハ山縣、大山、野津、伊東ノ各元帥、西園寺總理大臣、田中齋藤、松岡、阪谷、山縣、松田、原、牧野ノ各大臣、黑木、奧、桂、乃木、川村、兒玉、西、大島、佐久間、長谷川、寺內ノ各陸軍大將、東鄕、井上、山本ノ各海軍大將、近衛及十六師團長、各地鎭守府司令長官、各府縣知事以下官民數百名アリ、又遞信省ハ戰役記念繪葉書四萬枚ヲ愛國婦人會ハ三千圓ニ對スル物品ヲ、相撲協會ハ大相撲三日間興行率納セル

ガ如キ枚擧ニ遑アラズ

明治四十年五月臨時大祭　實費支出金高　三萬一千三百二十九圓二十八錢

同　奉納收入金高　二萬一千三百八十圓〇四十錢

コノ內譯　金一千五百圓　日本郵船株式會社　金一千圓　赤十字社長侯爵松方正義　金一千圓　東京鐵道株式會社　金一千圓　橫濱合資東洋商會業務擔當社員成毛金次郎　金五百圓　大倉喜八郎　金五百圓　男爵三井八郎右衛門　金五百圓　三菱合資會社庶務部長莊清次郎　金五百圓　日本船主同盟會　金三百圓　東京製絨株式會社長宮部久　金三百圓　日本皮革會社長大倉喜八郎　金三百圓　後藤毛織株式會社後藤恕作　金三百圓　東洋メリヤス會社長杉原榮三郎　金三百圓　日本橋區堀川長兵衛　金三百圓　同區高見澤作三郎　金三百圓　內國通運株式會社(以下數百名略ス)

コノ祭典ニッキ獻納品奉納者ハ大凡昨年ノ臨時祭典奉納者ニ同シ

〔編者云以上三ケ年ノ收支ヲ揭ケタルハ、大祭ノ狀況一班ヲ知ラシメムカ爲メノミ、コノ收入金ニハ賽錢等ハ含マス、祭典委員長ノ手ヲ經テ收支セシ金額ナレバナリ、コノ一端ヲ見テ官民ノ如何ニ崇敬スルカヲ知ルベシ〕

（第一回合祀明治二年六月二十四日軍務官達）來ル二十九日ヨリ五日之間於九段坂上招魂場昨年來戰死候者右祭典被爲行候此段申達候事

但招魂祠ヘ奉納供物等致度者御許容相成候間來二十七日迄ニ當官ヘ可申出候事

（第二回合祀明治七年八月十八日府縣ヘ達）先般佐賀縣賊徒追討之節戰死之者本月二十八日東京九段坂上ニ於テ招魂祭被爲行自今ハ同所招魂社ヘ合祀毎年一月二十七日祭典擧行候條夫々可取計此旨相達候事

但戰死有之府縣ハ本文之趣其親戚ヘ厚ク可申聞候事

（第三回合祀明治七年十一月二日三條太政大臣ヨリノ達）佐賀縣下暴動之際兵事ニ斃候縣官等別紙名前之者共招魂社ヘ合祭被仰付候條夫々可取計此旨相達候事

〔編者云別紙略ス〕

（第四回合祀明治八年二月八日三條太政大臣ヨリ達）臺灣墓地ニ於テ戰死之兵員別紙名前之者招魂社ヘ合祭被仰付候條夫々可取計此旨相達候事

〔編者云別紙略ス〕

（第五回合祀明治八年六月廿七日達）來ル七月四日招魂社例大祭ノ節昨年佐賀征討ノ際戰死者福岡縣士族矢柄到同社ヘ致合祀候就テハ同三日午後第十一時招魂式執行候條諸官廨勅奏任官各一員判任官各一員ツヽ、總代右同斷禮服著用九段坂上招魂場ヘ參集可致此旨相達候事

但其他官員參拜可爲勝手事

〔編者云太政官達見當ラズ暫ク本達ヲ掲ク〕

（第六回合祀明治八年十二月十二日三條太政大臣ヨリ陸軍省ヘ達）

別紙海軍省伺一等水夫故松村千代松招魂社ヘ合祀ノ儀朱書ノ通及指令候條此旨爲心得相達候事

（明治九年一月二十四日達記三套第十號）先般於朝鮮國逐戰死候雲揚艦水夫松村千代松儀今般招魂社ヘ合祀被仰付候間來ル二十六日午後六時三十分同社幄舍ヘ參集同七時合祭式執行候條禮服著用參拜可有之候此旨相達候事

但海軍少將伊東祐麿祭主被仰付候條此段副達候事

（第七回合祀明治九年十二月十八日正院ヘ伺上第千九百四十四號）

先般熊本縣下熊本賊徒暴動之節國事ニ斃候陸軍少將故種田政明以下並山口縣下萩福岡縣下秋月嘯集之賊徒鎭壓之節戰死致シ候者招魂之祭典被爲行永ク當府下招魂社ヘ合祀候樣致度此段相伺候也

御指令十二月二十七日伺之通

〔編者云例ニヨレバ太政大臣ノ達書アルベキナリ〕

〔第八回合祀明治十年十一月七日陸軍省達乙第二百四號〕先般鹿兒島縣賊徒征討之際戰死之者本月十四日招魂祭被爲行別紙達甲第三十六號之通各府縣へ相達候條此旨可相心得且同日諸官員休暇各隊諸生徒休業其他諸事例大祭日之通可心得相達候事

別紙達甲第三十六號

先般鹿兒島縣賊徒征討之際戰死ノ者來ル十三日ヨリ十五日マテ三日間東京九段坂上ニ於テ招魂祭被爲行自今ハ同所招魂社へ合祀毎年九月二十四日祭典擧行候條爲心得此旨相達候事

但戰死有之府縣ハ本文之趣其親戚へ厚ク可申聞候事十一月五日

〔編者云太政官達見當ラズ又此時海軍々人二十三名合祀サレタリ同省ノ達モアルベクレドモ今略ス此時合祀人員五千六百二十五名ナリ但次項ノ屯田兵及警視局官員トヲ含ム〕

〔明治十年十一月十日三條太政大臣ヨリ陸軍省へ達〕今般西南ノ役ニ戰死セル北海道屯田兵東京招魂社へ合祀被仰付候條來ル十三日幷毎年定日ニ祭祀執行可致此旨相達候事

〔編者云合祀人員八百四十五名ナリ〕

〔第九回合祀明治十一年一月二十九日太政大臣ヨリ陸軍省へ達〕明治九年以來九州地方暴動ノ際地方官員並巡査等賊及ニ殞リ非命ノ死ヲ遂ケ候者共東京招魂社へ合祀被仰付候條軍人軍屬同樣夫々可取計此旨相達候事

〔編者云此合祀人員百六十名ナリ〕

〔明治十一年六月二十一日太政官へ上申土第千三十九號〕本年一月中御達ニ相成居候明治九年以來九州地方賊徒暴動之際賊及ニ斃候地方官員並ニ昨十年鹿兒島へ賊徒征討中負傷療養中同年十一月臨時招魂祭之後死亡致候者來ル七月三日招魂式執行同四日招魂社例大祭之節併セテ祭典被爲行以後毎年九月二十四日大祭ニ合祭致度此段及上申候也

〔第十回合祀明治十一年九月二十九日達〕本年八月二十三日近衛砲兵暴動鎭壓之爲殞命ノ將校以下ノ者來ル六日東京九段坂上ニ於テ招魂祭被爲行後同所招魂社

へ合祀毎年九月二十四日祭典擧行相成候條爲心得此旨相達候事

但本文ノ趣厚ク其親戚へ可申聞事

〔編者云、此合祀人員四名ナリ〕

（第十一回合祀明治十二年一月十五日三條太政大臣達）警視局二等巡査故山上助三郎東京招魂社合祀之儀別紙内務省上申之儀聞屆候條成規之通夫々可取計此旨相達候事（別紙略ス）

（同上明治十二年一月二十日岩倉右大臣ヨリ陸軍省へ達）奮米澤藩士故堀尾啓助松本誠藏去ル戊辰ノ役該藩士伏罪之後白川口參謀ノ許可ヲ得ヲ各地奔走中非命ノ死ヲ遂ケ候者ニ付今般特別ノ儀ヲ以ヲ東京招魂社へ合祀被仰付候條夫々可取計此旨相達候事

（同上明治十二年六月二十四日達）西南之役負傷之爲メ病死致候警部補多門信治始メ別紙名前之者今般靖國神社へ合祀被仰付候條先例之通可取計此旨相達候事（別紙略ス）

〔編者云、コノ合祀人員二百六十六名〕

（第十二回合祀明治十五年十一月五日大山陸軍卿ヨリ達）本年七月二十三日朝鮮國京城事變之節暴徒ノ爲メ殺害セラレ候陸軍工兵中尉堀本禮造以下十二名靖國神社へ合祀被仰付候條例之通可取計此旨相達候事

（第十四回合祀明治十七年九月九日三條太政大臣ヨリ達）別紙内務省伺出明治三年山口藩常備兵編成ノ際暴徒ノ爲メ戰歿候生雲六郎以下二十九名靖國神社へ配祭ノ件聞屆候條先規ノ通可取計此旨相達候事

（同上明治十七年十月二十七日西郷陸軍卿ヨリ達）明治十年賊徒征討中負傷療養ノ末同十二年七月臨時招魂祭後死亡候陸軍伍長伊藤久光外十七名並ニ明治三年山口藩常備兵編成ノ際暴徒ノ爲メ戰歿候同藩士生雲六郎以下二十九名來ル十一月五日靖國神社ニ於ヲ招魂式型六日祭典執行關後同社へ合祀相成候條爲心得此旨相達候事

〔編者云、伊藤久光以下十八名合祀ノ旨、太政官ノ指令アリシ筈ナレドモ見當ラ

神社へ合祀祭典擧行候條爲心得此旨相達候事

（同上明治十五年十一月三條太政大臣ヨリ陸軍省へ達）

別紙外務省上申朝鮮國ニ於ヲ戰死セシ巡査及公使館雇ノ者等靖國神社へ合祀ノ儀聞屆候條例規ニヨリ合祀方可取計此旨相達候事

（第十三回合祀明治十四年五月二十七日三條太政大臣ヨリ陸海軍兩者へ達）奮高知藩士故武市半平太以下別紙姓名ノ者都合八十名今般靖國神社へ合祀被仰付候條例之通可取計此旨相達候事

ズ、仍テ本達ヲ掲ク〕

〔第十五回合祀明治十八年四月二十二日三條太政大臣ヨリ達〕別紙陸軍省上申故磯林歩兵大尉外五名靖國神社ヘ合祀ノ件聞屆候條條先規ノ通可取計此旨相達候事

〔第十六回合祀ノ一明治二十一年四月二十六日陸軍大臣達〕明治十年四月五日西南ノ役ニ於テ戰死シタル左記ノ人名來ル五月五日靖國神社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭ノ際併テ祭典施行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔編者云、左記一名ノ姓名略ス、今回合祀人員六百七名ナリ〕

〔第十六回合祀ノ二明治二十一年四月二十七日陸軍大臣達〕嘉永六年癸丑以來殉難死節シタル舊山口藩故石田三千井以下左記ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來ル五月五日同社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔編者云、六百一名ノ人名略ス〕

〔第十六回合祀ノ三明治二十一年五月二日陸軍大臣達〕維新前殉難死節シタル舊高知藩士故田所騰次郎以下左記之人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來ル五日同社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔編者云、五名ノ人名略ス〕

〔第十七回合祀明治二十一年十月二十三日陸軍大臣達〕維新前殉難死節ノ舊久留米藩士眞木和泉守以下左記ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來ル十一月五日同社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔編者云、十八名ノ人名略ス〕

〔第十八回合祀明治二十二年五月二日大山陸軍大臣達〕維新前殉難者舊水戸藩士安島帶刀以下千三百九十名舊宍戸藩松平大炊頭以下六十三名舊松川藩士中村修之助以下七名左記之人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付本月五日同社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭之際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔編者云、左記千四百六十名ノ人名略ス〕

〔第十九回合祀明治二十二年十月二十六日大山陸軍大臣達〕維新前後殉難者舊宇都宮藩士廣田精一以下四十二名左記ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來十一月五日同社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔編者云、左記四十二名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治二十二年十月二十九日大山陸軍大臣達〕維新前殉難者舊大村藩松林廉之助今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來十一月五日同社ニ於テ招魂式竝ニ例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラルヘキ旨御沙汰候事

〔同上合祀明治二十二年十一月二日大山陸軍大臣達〕維新前殉難者薩藩鹿兒島藩有馬新七外十五名薩藩福井藩橋本左内外一名左記ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付本月五日同社ニ於テ招魂式竝六日例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラル

〔第二十回合祀明治二十四年九月十七日高島陸軍大臣達〕維新前殉難者薩宇都宮藩小山剛介以下左記ノ千二百七十七名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來十一月五日同社ニ於テ招魂式竝六日例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラル

〔第二十一回合祀明治二十六年十一月二日大山陸軍大臣達〕維新前殉難者薩鹿兒島藩士松脇後左衛門以下八十名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付本月五日同社ニ於テ招魂式竝六日例大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラル

〔第二十二回合祀明治二十八年十二月二日大山陸軍大臣告示〕明治二十八年戰役ニ於ケル戰死者今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付本月十五日招魂式執行竝十六日ヨリ十八日ニ至ル三日間臨時大祭ヲ執行ス

〔編者云、此時西郷海軍大臣ヨリモ同文ノ告示出タリ、合祀數ハ陸軍千三百四十五名ニテ海軍百五十一名ナリ〕

〔第二十三回合祀明治二十九年四月二十七日大山陸軍大臣告示〕明治二十七八年

ノ役竝臺灣朝鮮國ニ於ケル戰死者左ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來五月五日午後第九時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典執行ス

〔編者云、左記人名百四十二名略ス〕

〔同上明治二十九年四月二十七日大山陸軍大臣告示〕殉難者千葉縣竹内哲次郎今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來五月五日午後第九時招魂祭施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典執行ス

〔第二十四回合祀明治二十九年十一月二日大山陸軍大臣告示〕明治二十七八年ノ役竝臺灣及朝鮮國ニ於ケル戰死者左ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來ル五日午後第七時招魂式執行翌六日例大祭ニ併セテ祭典執行ス

〔編者云、左記人名九十七名略ス〕

〔第二十五回合祀明治三十一年九月三十日桂陸軍大臣告示〕明治二十七八年戰役竝ニ臺灣及朝鮮國ニ於ケル戰死者左記甲號ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出右同時ニ明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病若クハ災害ニ罹リ又ハ出征事務ニ關シ死歿シタル左記乙號ノ人名特旨ヲ以テ戰死者同樣合祀被仰出候條來ル十一月四日午前零時三十分招魂式執行同日及翌五日ノ二日間臨時大祭ヲ執行ス

〔編者云、甲號三百六十二名乙號一萬九百十七名ノ人名略ス〕

（同上合祀明治三十一年十月二十七日桂陸軍大臣告示）殉難者舊對州藩士平田大江及平田主米今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來十一月四日午前零時三十分招魂式執行同日臨時大祭ノ際併セテ祭典執行同社ヘ合祀セラル

（同上合祀明治三十一年十月六日西郷海軍大臣告示）明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病若クハ災害ニ罹リ又ハ出征事務ニ關シ死歿シタル左記ノ人名今般特旨ヲ以テ靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來ル十一月四日午前零時三十分招魂式施行同日及翌五日ノ二日間臨時大祭ヲ執行ス

〔編者云百二名ノ人名略ス〕

（第二十六回合祀明治三十二年四月二十二日桂陸軍大臣告示）明治二十七八年戰役並ニ臺灣及ヒ朝鮮國ニ於ケル戰死傷死者左記甲號ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出右同時ニ明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病若クハ災害ニ罹リ又ハ出征事務ニ關シ死歿シタル左記乙號ノ人名特旨ヲ以テ戰死者同樣合祀被仰出候條來ル五月五日午後八時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典施行ス

〔編者云甲號五十三名乙號二百七十四名ノ人名略ス〕

（同上合祀明治三十二年四月二十八日山本海軍大臣告示）明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病若ハ災害ニ罹リ又ハ出征事務ニ關シ死歿シタル左記ノ人名今般特旨ヲ以テ靖國神社ヘ合祀被仰出候條來ル五月五日午後八時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典施行ス

〔編者云左記五名ノ人名略ス〕

（第二十七回合祀明治三十二年十月二十一日桂陸軍大臣告示）明治二十七八年戰役並臺灣及朝鮮國ニ於ケル戰死傷死者左記甲號ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出右同時ニ明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病若クハ災害ニ罹リ又ハ出征事務ニ關シ死歿シタル左記乙號ノ人名特旨ヲ以テ戰死者同樣合祀被仰出候條來ル十一月五日午後七時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典施行ス

〔編者云甲號二十名乙號七十一名ノ人名略ス〕

（第二十八回合祀明治三十三年四月二十一日桂陸軍大臣告示）本年一月臺灣守備隊ニ於ケル戰死者左記甲號ノ人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出右同時ニ明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病若クハ災害ニ罹リ又ハ出征事務ニ關シ死歿シタル左記乙號ノ人名特旨ヲ以テ戰死者同樣合祀被仰出候條來ル五月五日午後八時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典施行ス

〔編者云甲號一名乙號三十名ノ人名略ス〕

（同上合祀明治三十三年四月二十一日桂陸軍大臣告示）殉難者舊鹿兒島藩士相良

賴元同相良新八郎今般靖國神社へ合祀被仰出候ニ付來ル五月五日午後八時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典施行ス

（同上合祀明治三十三年五月三日山本海軍大臣告示）明治二十七八年戰役中戰地ニ於テ疾病ニ罹リ死歿シタル左記人名特旨ヲ以テ戰死者同樣靖國神社へ合祀被仰出候條五月五日午後八時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典施行ス

〔編者云、二名ノ人名略ス〕

（第二十九回合祀明治三十四年十月十六日兒玉陸軍大臣告示）明治三十三年清國事變ニ關スル戰死者左記甲號ノ人名及臺灣守備隊土匪討伐中ニ於ケル戰死者左記乙號ノ人名今般靖國神社へ合祀被仰出來ル十月三十一日午後八時招魂式施行十一月一日、二日、四日、五日ノ四日間臨時大祭ヲ執行ス

〔編者云、甲號三百五十三名、乙號十名ノ人名略ス〕

（同上合祀明治三十四年十月十六日兒玉陸軍大臣告示）明治三十三年清國事變ニ從事シ疾病若ハ災害ニ罹リ死歿シタル左記甲號ノ人名及明治二十七八年戰役ニ關シ疾病ニ罹リ死歿シタル左記乙號ノ人名今般特旨ヲ以テ戰死者同樣靖國神社へ合祀被仰出來ル十月三十一日午後八時招魂式施行十一月一日、二日、四日、五日ノ四日間臨時大祭ヲ執行ス

〔編者云、甲號八百四十九名、乙號二十五名ノ人名略ス〕

（同上合祀明治三十四年十月十六日山本海軍大臣兒玉陸軍大臣告示）明治三十三年清國事變ニ從事シ疾病ニ罹リ死歿シタル左記甲號ノ人名及明治二十七八年戰役ニ關シ疾病ニ罹リ死歿シタル左記乙號ノ人名今般特旨ヲ以テ戰死者同樣靖國神社へ合祀被仰出來ル十月三十一日午後八時招魂式施行十一月一日二日四日五日ノ四日間臨時大祭ヲ執行ス

〔編者云、五名ノ人名略ス〕

（同上合祀明治三十四年十月十六日山本海軍大臣告示）明治三十三年清國事變ニ關シ死歿シタル左記人名今般靖國神社へ合祀被仰出候ニ付來ル三十一日午後八時招魂式施行十一月一日二日四日五日ノ四日間臨時大祭ヲ施行ス

〔編者云、四十名ノ人名略ス〕

（第三十回合祀明治三十七年四月二十一日寺內陸軍大臣告示）明治二十七八年役戰死者左記甲號ノ人名臺灣守備土匪討伐中ニ於ケル戰死者左記乙號ノ人名今般靖國神社へ合祀被仰出同時ニ明治三十三年清國事變ニ從事シ疾病ニ罹リ死亡シタル左記丙號ノ人名特旨ヲ以テ戰死者同樣靖國神社へ合祀被仰出候條來ル五月五日午後七時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典ヲ施行ス

〔編者云、甲號一名、乙號八十名、丙號六名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治三十七年四月二十一日山本海軍大臣告示〕明治三十三年清國事變ニ關シ死歿シタル左記人名今般靖國神社ヘ合祀被仰出候ニ付來五月五日午後七時招魂式施行翌六日例大祭ノ際併セテ祭典ヲ施行ス

〔編者云、二名ノ人名略ス〕

〔第三十一回合祀明治三十八年四月二十四日寺內陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ從事シ本年一月迄ニ戰死若ハ負傷後死歿シタル左記人名ノ者今般靖國神社ヘ合祀被仰出候條來ル五月二日午後七時招魂式施行翌三日ヨリ五日迄三日間臨時大祭ヲ擧行ス

〔編者云、二萬八千九百九十六名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治三十八年四月二十四日山本海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ從事シ本年一月迄ニ戰死若クハ負傷後死歿シタル左記人名ノ者今般靖國神社ヘ合祀被仰出候條來ル五月二日午後七時招魂式施行翌三日ヨリ五日迄臨時大祭ヲ擧行ス

〔編者云、千八百八十七名ノ人名略ス〕

〔第三十二回合祀明治三十九年三月二十七日寺內陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ從事シ戰死若クハ戰傷後死歿シタル軍人軍屬ニシテ昨年五月靖國神社ヘ合祀仰出サル

〔編者云、二萬九千六百十四名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治三十九年四月十九日寺內陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ從事シ戰死若クハ戰傷後死歿シタル軍人ニシテ昨年五月靖國神社ヘ合祀洩ノ者及其後戰死若クハ戰傷後死歿シタル左記人名ノ者來ル五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、二百三十八名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治三十九年三月二十七日齋藤海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ從事シ戰死若クハ戰傷後死歿シタル軍人軍屬ニシテ昨年五月靖國神社ヘ合祀洩ノ者及其後戰死若クハ戰傷後死歿シタル左記人名ノ者來ル五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、百二十二名ノ人名略ス〕

〔第三十三回合祀明治四十年四月六日寺內陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ於テ戰死若クハ戰傷後死歿シタル軍人軍屬ニシテ前年靖國神社ヘ合祀洩ノ者竝同戰役業務ニ從事シ傷痍疾病等ニ因リ死歿シタル左記人名ノ者ヲ特旨ヲ以テ來ル

五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、二萬一千三十四名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治四十年四月十五日寺内陸軍大臣告示〕本年當省告示第七號ノ外明治三十七八年戰役ニ於テ戰死若クハ戰傷後死歿シタル軍人軍屬等ニシテ前年靖國神社ヘ合祀未濟ノ者竝同戰役業務ニ從事シ傷痍疾病等ニ因リ死歿シタル左記人名ノ者ヲ特旨ヲ以テ來ル五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、二千八百六十六名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治四十年四月六日齋藤海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ノ業務ニ從事シ傷痍疾病等ニ因リ死歿シタル左記人名ノ者來五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、七百七十五名ノ人名略ス〕

〔第三十四回合祀明治四十一年四月十三日寺内陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ於テ死歿シタル陸軍々人軍屬ニシテ第一期乃至第三期靖國神社ヘ合祀未濟ノ者及韓國暴徒鎭壓事件ノ爲死歿シタル陸軍々人ノ左記人名ノ者ヲ特旨ヲ以テ來ル五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云千三百十四名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治四十一年四月二十二日寺内陸軍大臣告示〕本年陸軍省告示第十二號ノ外左記明治三十七八年戰役ニ於テ死歿シタル陸軍々人軍屬ニシテ第一期乃至第三期靖國神社ヘ合祀未濟ノ者及韓國暴徒鎭壓事件ノ爲死歿シタル陸軍々人軍屬ヲ特旨ヲ以テ來ル五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、五百五十一名ノ人名略ス〕

〔同上合祀明治四十一年四月十三日齋藤海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ノ業務ニ從事シ傷痍疾病等ニ因リ死歿シタル左記人名ノ者來ル五月靖國神社ヘ合祀仰出サル

〔編者云、八十五名ノ人名略ス〕

〔第三十五回合祀明治四十二年四月二十日寺内陸軍大臣齋藤海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役及韓國暴徒鎭壓事件ノ爲死歿シタル軍人軍屬ニシテ明治三十八年乃至同四十一年靖國神社ヘ合祀未濟ノ者ヲ今般特旨ヲ以テ合祀仰出候條來ル五月四日招魂式執行同五日六日臨時祭ヲ擧行ス

〔同上合祀明治四十二年四月二十日寺内陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ニ於テ死歿シタル陸軍々人軍屬等ニシテ第一期乃至第四期靖國神社ヘ合祀未濟ノ者及韓國暴徒鎭壓事件ニ於テ死歿シタル陸軍々人ヲ左記ノ通特旨ヲ以テ來ル五月靖國神社ヘ合祀仰出サル

〔編者云、七百六十一名ノ人名略ス、内韓國事件五十名〕

〔同上合祀明治四十二年四月二十日齋藤海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役ノ業務ニ從事シ傷痍疾病等ニ因リ死歿シタル左記人名ノ者來ル五月靖國神社ヘ臨時合祀仰出サル

〔編者云、五十六名ノ人名略ス〕

〔第三十六回合祀明治四十三年四月二十日寺內陸軍大臣齋藤海軍大臣告示〕明治三十七八年戰役又ハ韓國暴徒鎭壓事件ニ從事シ死歿シタル軍人軍屬等ニシテ靖國神社ニ合祀未濟ノ者ヲ今般特旨ヲ以テ同社ニ合祀被仰出候條來ル五月五日招魂式執行六日臨時祭ヲ擧行ス

〔第三十六回合祀明治四十三年四月二十日寺內陸軍大臣告示〕明治三十七八年戰役又ハ韓國暴徒鎭壓事件ニ從事シ死歿シタル左記人名ノ者ヲ特旨ヲ以テ來ル五月靖國神社ニ合祀仰出サル

〔編者云、百四十一名ノ人名略ス、内韓國事件ハ百九名〕

臨時諸祭

臨時諸祭とは臨時擧行せられたる奉告祭又は記念祭等を云ふ。本神社、叛建以來臨時に執行せられたる祭典の中に就きて、明治五年の正遷宮式は最も盛大嚴肅を極めたる祭儀なりき。時の兵部太輔山縣有朋卿祭主として參勤し、深夜、人の靜まれる時、御輿を奉して新殿に遷座するに際し兵隊は前後を警しめ、官員は供奉に列し、威儀洵に整ひたりき。而して勅使の參向ありて幣帛料を供進せられし臨時祭は、改號進格奉告祭、近衞記念祭、警視局臨時祭、憲法發布竝皇室典範御治定奉告祭、平和克復奉告祭（但、この中にて近衞記念祭、警視局臨時祭には勅使ありて御祭文はなかりき。）等にして神饌料のみ供進ありしは御成婚滿廿五年奉告祭なり。これらの祭典に際し皇族の參拜せられし事一再ならず。凡そ臨時祭に勅使御差遣ある時は、祈年新嘗の祭式に准して

行ふを例とす。明治三年より現時に至るまで行はれし祭典の重なるものを擧ぐれば、實に左の如し。○此外二十七年九月より日清戰役中新勝祭を行ひしが如き、小祭典執行の例は多かれども煩はしければ凡て之を略せり。

鎭座祭	明治二年	六月廿九日
本殿地鎭祭	同　三年	六月一日
柱立祭	同　四年	十一月七日
大嘗會祭典	同　四年	十一月十七日
上棟式	同　五年	二月五日
新殿祭	同　五年	五月六日
正遷宮	同　年同月	七日
饗宴祭	同　年同月	八日

新嘗祭祝祭	同　年	十一月十七日
華表竣功奉告祭	同　六年	一月廿八日
祭日推歩改正奉告祭	同　七年	九月六日
改號進格奉告祭	同　十二年	六月廿五日
近衞記念祭	同　十三年	五月十四日
警視局臨時祭	同　年	五月十七日
第四旅團戰死者弔慰祭	同　十四年	一月三十日
近衞記念十年祭	同　十九年	一月九日
大鳥居竣功奉告祭	同　廿年	十二月卅一日
憲法發布皇室典範御治定奉告祭	同　廿二年	二月十一日
御成婚滿二十五年奉告祭	同　廿七年	三月九日

拜殿神饌所地鎭祭　同　廿二年八月廿日

拜殿上棟式　同　廿三年十月十七日

拜殿竣功奉告祭　同　廿四年十月五日

能樂堂改修竣功奉告祭　同　廿六年十月十五日

宣戰奉告祭　同　廿七年二月十五日

平和克復奉告祭　同　廿八年十二月十一日

（明治五年五月三日達）來七日招魂社遷宮ニ付諸局寮司屯勅奏任官各一人判任官各一人爲總代夜第一時禮服著用參集可致事但其他ノ官員參拜勝手タルベキ事

（明治五年二月五日本殿上棟祭々式次第）第六字新殿ノ屋上ニ手置帆負命竝狹知命二柱ノ神座ヲ設ク　同字大工屋上ニ弓矢ヲ裝束ス　同時於庭上清祓ヲ脩ス　第十一字神殿ニ上リ上棟執行ノ祝詞ヲ申ス　同字神殿ノ神事竟ヲ直ニ新殿ノ屋上ニ上リ上棟式ヲ行フ大工行事　同字上棟ノ式竟ヲ神供ノ餅錢幣等ヲ投ズ　第一字於拜殿直會式ヲ行フ竟テ官員退出　同字直會竟ヲ神殿ニ神供ヲ獻ジ上棟祭竟ル事ヲ復命ス　上棟式

先ヅ官員祝部大小工等新殿ノ屋上ニ上リ列座再拜拍手兩段、次ニ獻供祝部次ニ奉幣祝部次ニ官員拜禮、次ニ撤供、次ニ投餅錢、次ニ退出

（明治五年五月七日正遷宮祭式）六日早旦新殿ノ內外悉ク洒掃シ海潮ヲ以テ清ム、午後四時解除ノ神事ヲ新殿內ニ於テ行フ、次第、先ヅ官員及祝部等各着座、次ニ迎神、次ニ獻供、次ニ玉串、次ニ祝詞、次ニ大麻ヲ取リ新殿ヲ始メ神實調度及神事關係ノ人等悉祓清ム、次ニ官員神拜、次ニ祝部等神拜、次ニ撤供、次ニ送神、次ニ退下、畢七日早旦殿ノ內外ヲ裝飾ス、第十二時新殿祭執行、先ヅ官員及祝部等著座、次ニ祝部玉ヲ取テ殿ノ四角ニ掛ケ、又米酒切木綿等ヲ散ス、祭主巽ノ方ニ向テ祝詞ヲ微音ニ申ス畢テ退下、正遷宮　當日夜六時、正殿假殿ノ前ニ庭燎シ兩殿階上下ニ燈ヲ點ス兩殿ノ間渡御ノ道ニ薦ヲ敷ク、官員ハ假ノ拜殿ニ參集ス、夜第十二時遷幸、先ヅ警蹕及散米鹽湯大麻其外神寶奉仕ノ者庭ノ左右ニ伺候ス、次ニ御蓋之者階下ニ伺候ス、次ニ兵隊渡御ノ路次ヲ警衞ス、次ニ祭主及試補等假殿ノ正面ニ向テ再拜拍手シテ、祭主祝詞ヲ微音ニ申ス、試補以下拜ス畢テ又再拜拍手ス、次ニ召立ノモノ鈴ヲ振ル、其音ヲ聞テ階上下ノ燈竝庭燎ヲ一時ニ滅ス、次ニ祭主竝試補覆面ヲ著テ昇殿ス、輿丁之ニ從ヒ御輿ヲ殿內ニ入レ退テ便所ニ跪居ス、既ニ御遷座竟ノ報ヲ得テ更ニ殿內ニ入リ、

御輿ヲ出シ奉ル、祭主立ㇾ試補自餘ノ官員供奉、次ニ召立ノ者出御ト呼ベバ階上下ノ者一同粛然タリ、次ニ御衣笠ノ者左方ニ付ヲ高ク擎ゲ、次ニ警蹕ノ者聲ヲ揚ゲ前駈スレバ自餘ノ者列ヲ正シテ供奉ス、行列　先ヅ警蹕、一人榊ヲ執ツテ左行ニ列ス、但出御ト途中ト入御ト三度ニ三聲ツヽナリ、次ニ散米一人左行ニ列ス、歩ミナガラ米ヲ散ス、次ニ鹽湯一人左行ニ列ス榊葉ニテ灌ギナガラ行ク次ニ大麻一人右行ニ列ス、左右ニ獻ヒナガラ行ク次ニ御劔一人右行ニ列ス、次ニ御輿四人左行ニ蓋、次ニ祭主試補次官員供奉、御輿神殿ニ到ラバ警蹕及御蓋者階下ノ左右ニ平伏ス、散米鹽湯大麻ノ者殿ノ内外ヲ祓清メテ後便所ニ跪居ス、次ニ御太刀御劔奉仕ノ者御輿ト輿ニ殿内ニ入リ左右ニ跪居ス、次ニ入御トナレバ警蹕聲ヲ揚ク、次ニ御輿入御、祭主幷試補心ヲ鎮メテ内陣ニ安シ奉リ、幌ヲ垂レテ一拝シ階ヲ下リ、座ニ就テ覆面ヲ脱ギ又一拝ス、次ニ召立ノ者鈴ヲ振ル、其音ヲ聞ヲ階上下ノ燈及庭燎等ヲ點ス、次ニ神實ハ殿内ノ高案ニ安ス、次ニ散米鹽湯大麻等ハ清所ニ納ムベシ、既ニ御遷座竟テ更ニ御神前ニ酒饌ヲ供シ祭主祝詞ヲ白ス、次第先ヅ官員及祝部等各著座、次ニ官員神拝、次ニ祝部神拝、次ニ撤供奏樂次ニ次獻供十膳奏樂、次ニ玉串、次ニ祝詞、次ニ官員及祝部等各著座、次ニ御贄ヲ供ス、次ニ退下、畢、八日第十時饗宴祭執行、先ヅ官員及祝部等神拝、次ニ撤供奏樂五十膳、次ニ玉串、次ニ祝詞、次ニ官員神拝、次ニ撤供奏樂次ニ退下、畢、

（明治五年五月七日遷宮祝詞）

恐支諸乃神靈等乃宇豆乃前爾陸軍大輔源有朋申左久今　大御殿爾奉遷坐世奉留狀乎平爾安爾聞食比氐此　御殿乎安殿乃足殿止天地共常止波爾鎮坐天掛奉支　天皇我大御代乎手長乃大御代止堅石巳我乖々不令在勤美奉仕利　天皇我朝廷爾五十槻八桑枝乃如久立榮志米給倍止獻留物波御酒御食山海乃種々乃味物机代爾置高成旦奉捧宇豆能大幣帛乎安幣帛乃足幣帛止平久安久聞食止申給波久止申須

〔編者云、此際行ハレシ新殿祭祝詞、假殿祝詞、饗宴祭祝詞等ハ略ス〕

（明治五年五月七日新殿祭遷宮ニ關係ノ人名）　祭典掛　青山一介　權少錄藤林廷作　社司　桑原眞清　幡鎌幸雄　辻誠一郎　宮田重男　穗積楯雄　御用掛筆生植野晉　玄關詰　石井造酒之助　東流鯉十郎　雇員　岡部讓　桑原虎治　幡鎌武雄　樂人舊社司名略ス

（明治六年一月二十七日大鳥居落成奉告祭々式）　先ヅ神座ヲ設ク、次ニ官員及祝部著座、次ニ獻供十膳、次ニ玉串、次ニ祝詞、次ニ官員拝禮、次ニ撤供投併錢、次ニ退出、

（明治二十二年二月十一日皇室典範竝憲法制定發布ニ付奉告祭文）

天皇乃大命爾坐世靖國神社乃廣前爾掌典從六位勳六等小西有勳乎使止爲旦白給

波久止白左久

今度　大朝廷乃掟止志豆皇室典範乎定米又惟神奈留大伎　政乃隨爾受繼治米給倍留食國乎平穩爾安寧久天下公民庶爾福祉乎得世志米給布止爲豆　皇御國乃憲法乎制定米發布良世給布故此狀乎告奉留止爲豆御幣帛奉利齋祭良世給布事乎聞食豆　天皇乃大御代乎勤久事無久左夜具事無久彌益々爾常石爾堅石爾守幸倍給倍止白給布

天皇乃大命乎聞食世志恐美恐美母白須

（明治三十七年二月十五日宣戰奉告祭々文）

天皇乃大命爾坐世挂畏母恐支靖國神社乃大前爾掌典正七位勳六等荻原嚴雄乎使止爲豆白給波久止白左久　天津日嗣知食志與利以來萬機乃　御政乎執行比給布止志豆外國乃交際波殊爾平和乎宗止志豆　大座志爾今年計良須母露國爾對比豆戰乎開久事止奈利志波已倍久母阿良抓事止奈母思食須故此由乎告奉留止志豆禮代乃御幣帛奉出給布事乎平良氣久安良氣久聞食豆海路陸路爾射向布寇等乎遠爾伐平良計食國乃　大御稜威乎天下爾照輝加志平和乎彌遠長爾克復左志米常石爾堅石爾守幸倍給倍止白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美母白須

（明治三十八年十二月十一日平和克復ニ付奉告祭々文）

天皇乃大命爾坐世挂畏母恐支靖國神社乃大前爾掌典正七位佐伯有義乎使止爲豆白給波久止白左久曩爾露國止戰乎開伎志與利軍人諸波身母多奈志良受勇美戰比勤美勉米豆海陸爾射向布敵等乎悉爾事向服從波志米又仕奉留官人乎始米公民諸爾至留萬豆國內擧利豆戮力一心爾志米豆事平良加爾定萬利弘斯久速氣久事平良加爾定萬禮留波專廣久高伎恩賴止奈母最恐美尊美思保志食須故此由乎告奉留止志豆禮代乃御幣帛奉出志給布事乎平良氣久安良氣久聞食豆　大朝廷乃內乎始豆仕奉留百官人等天下四方國乃公民爾至留萬豆爾彌榮爾榮志米給倍止白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美母白須

祭儀　附神饌幣帛神實奏樂

明治五年本殿の落成を告ぐるや、諸般のこと略、備り、常例の儀式、神饌幣帛の品目、祝詞の文案等一定し、翌六年五月十八日大祭式改定

せられ同年招魂社年中祭式祝詞一冊成り、十二年社號を賜はり社格を附せらるゝや陸軍省にて更に修正し、式部寮の承認を經て之を靖國神社年中行事と名け、以來現今に至るまでこれに準據す。凡そ官國幣社祭式は明治八年式部寮編纂の神社祭式に準據すべきが故に、十二年の修正に際しては大に取捨する所ありしが、多年の慣例と特別の御殊遇とは、全然該祭式に據ることを得ざらしむ。例祭には官幣社に於ては地方長官祝詞を奏し、宮司は玉串を獻るのみの制なれども、本神社の秋の例祭には宮司祝詞を奏し、後に勅使の御參向ありて御幣物を供へて御祭文あり、春の例祭には勅使の御事なく又御幣物の供進も有らせられず。而して陸海軍兩省長官は春秋ともに玉串を獻りて拜禮し、掛官は拜禮をのみ行ふ。祈年新嘗の二祭は中祭の式を以てせられ、近來（十九年三月以降）兩省官員の參列もなく、全く宮司に一任し、宮司は社務所正廳にて御幣物を點檢し、憲兵之を護衛し、宮司以下正門より拜殿の正階を進みて之を供進するなり。紀元節、天長節の如きも遙拜式の後に中祭として祝祭を行ひ祭神に酒饌を享す。これ死生の慶を同じうする主旨なるべし。而して例大祭合祀祭の後一日に直會祭を行ふが如き、恐らくは其盛儀他に比なからむ。かくの如く特別の儀典尠からず。各神社とも古來慣例の儀式の改め難きが如く、本神社に於ても、宮司祝詞奏上の前に於て玉串を獻るが如き、陸海軍兩省大臣の春秋隔番に先後して玉串を奉奠せらるゝが如き、容易く變改すべからざるものあり、今

この二典儀の原因を釋ぬるに、明治二年六月二十九日鎭座祭に際し先づ勅使幣を奉り、次に知官事宮祝詞を讀み給ふ。爾來必らず先づ玉串を奠して祝詞を申す例となりしな

五年までは上巳、七夕、重陽等の五節にも供饌したりしが、同六年一月四日太政官布告以來、紀元節、及天長節を以て之に代へ、又教導職を置かれし當時には說教會祭典にも供饌し、〇本神社に於ては十三年五月二十五日に始て之を行ひ、十五年一月二十五日之を止む。而して除夜神事の典なく、兩度の大祓に十五膳を供したりき。

日供神饌は十二年八月一日より三膳を供する事となりて現今に及べり。又臨時に執行せらるゝ起工又は竣工奉告祭の如き概ね十五膳の定なり。之を要するに、凡て年中行事に於ける祭典に獻備する神饌は、十二年七月廿七日伺の結果定例となり、以後今日まで變改なし。其合祀祭に卅五膳〇招魂場十膳、奉遷後、二十五膳兩度清祓に十八膳〇祓所三膳、本殿十五膳直會祭廿膳〇直會神に五膳、を供進すること は定格前後の別あり、而して兩省大臣玉串奉奠のことは初め招魂社當時は兩省長官交番に祭主たりしが後祭典は宮司之に預ることゝなりしにより舊例を存して玉串をのみ獻らるゝことゝなりし

凡て本神社のことは例祭の御祭文に武官の人等に命せて種々の物を備奉り齋祭らせ給ふ云々と宣らせ給ひしが如く、祭儀幣物に至るまで悉く叡慮に出づ。他の官國幣社と趣を異にする所以なり。

祭時神前に供進する饌物は、其祭事の大中小に從ひて差異あり。卽ち、例大祭臨時大祭に在りては五十膳、元始祭、紀元節、祈年祭、天長節新嘗祭には廿膳。〇定格前には天長節に五十膳、一日其他の祭典には各二十五膳を供す。一日祭、月次祭、除夜祭等には十五膳を供するが如し。大祭の五十膳は當初より變ることなし。其色目に至りても、明治四年九月廿三日〇例大祭獻供色目に準據して調理す。社格制定以前は遙拜式に神籬を樹て神饌を供し、明治

ことなし。○明治十一年九月二十三日の秋季皇靈祭には神饌二十五膳を供せり、而して唯其一回のみにして以後之を行はず、式部寮十二年二月二十八日の達に據りてなり、

幣帛は例大祭及招魂式執行に際して招魂祭壇と合祀祭とに、荒妙和妙を獻ずることなし、またこれらの祭典には最初より變ることなし、最初より中門及招魂場に五色の大玉串を掲ぐるを例とす、社格制定までは天長節にも荒妙和妙を獻りたりき。

神寶は例大祭及合祀祭に神劍神鏡を獻る、社格制定以前には祓所に神劍を獻じ天長節にも神寶を獻りき。

祭儀に奏樂すること最初鎭座祭の時には宮中の伶人を以てせしが、社司を置かるゝに至り其の中より樂員を定めて之を奏せしめ、後には再宮內省の伶人を聘したりき、然るに明治八年十月より大祭に軍樂を用ゐることに定りて、○軍樂隊は明治四年其端緒を開き、七年に至りて漸く完成せしを以てなり、○初めは三員にて陸海軍々樂隊參列吹奏し、十二年六月社格制定以後は兩隊に於て、春秋交番に參列することゝなりぬ、陸海軍兩大臣の玉串奉奠の例に於けるが如くなりぬ、

の雅樂は暫く中絕せしを、同三十二年十一月より中祭に奏樂することゝなし、三十六年一月より大祭前後の淸祓、直會式、小祭にも亦之を奏することゝして、宮內省の樂師を聘することゝなりしを、同三十八年十一月並祭より五員となれり、里神樂は同廿六年四月より兩度の大祭に興行し、同卅六年十一月以後中祭にも及ぼし、同年十二月より一日祭月並祭にも行はる○但、一日祭に行ふことは後に絕えたり

（明治六年一月二十日伺）是迄御大祭ノ節太玉串ハ假ニ木綿相用來リ候處御本社出來ノ上ハ五色絹一匹宛御用相成候樣仕度此段奉伺候也　指令伺之通　同月二十五日

（明治六年定神饌並數年中行事抜萃）新年祭○廿五膳　元始祭○上同　孝明天皇遙拜式

紀元節遙拜式○廿五勝　神武天皇御陵遙拜式○廿五勝　兩度大祓○十五勝　神嘗祭遙拜式○廿五勝　天長節○五十勝　新嘗祭○廿五勝　煤拂祭○十五勝　三度例大祭○五十勝　清祓○十五勝政所三勝　直會祭○十五勝神五勝　一

（明治六年五月十八日招魂社へ達）　三十三度月並祭○各十五勝究　招魂社大祭式自今別冊之通改定候條此旨相達候事

別冊　清祓次第　午後第四時陸軍省海軍省官員祓ノ場ニ參向○次ニ祝部等神饌ヲ供ス○次ニ祭主代神前ニ向ヒ拍手兩段祭事掛玉串ヲ奉ズ祭主代神前ニ供ス○次ニ祝詞ヲ奉ス祭主代祝詞ヲ讀ム此間官員以下立禮ス讀竟テ拍手兩段本席ニ復ス○次ニ祝部祓串及潮水ヲ持シ祭主代以下ノ官員ヲ祓清ム○次ニ祝部等ヲ祓ヒ竟テ神殿內外ヲ祓フ○次ニ官員神拜○次ニ神饌ヲ撤ス○次ニ退下　清祓執行之儀ヲ本殿ニ告ク　祭主代以下ノ官員神殿ニ參向○次ニ祝部等神饌ヲ供ス○次ニ祭主代神前ニ向ヒ拍手兩段祭事掛玉串ヲ奉ス祭主代神前ニ供ス○次ニ祝詞ヲ奉ス祭主代祝詞ヲ讀ム此間官員以下立禮ス讀竟テ拍手兩段本席ニ復ス○次ニ祝部神拜○次ニ神饌ヲ撤ス○次ニ退去　大祭次第　午前第二時庭燎○第六時前陸軍省海軍省官員輕舍ニ集合ス○第六時兩省ノ官員本殿ニ參向殿中上段ノ左右倚子第一座ヨリ三十六座ニ至奏任以上著座（圖ノ如シ）下段ノ左右判任（圖ノ如シ）○次ニ獻供五十膳祝部等傳供ス此間樂ヲ奏ス獻竟テ樂ヲ止ム○次ニ祭主神前ニ向ヒ拍手兩段祭事掛玉串ヲ祭主ニ奉ス祭主神前ニ掛ニ授ク祭事掛神前ニ供ス○次ニ祭事掛祝詞ヲ祭主ニ奉ス祭主祝詞ヲ讀拜ス此間官員倚子ヲ離レ立禮ス祭主讀竟テ各倚子ニ復ス○次ニ大小錄大鳥居ノ前ニ勅使ヲ迎フ　勅使來ノ報ヲ得テ祭主殿外ノ緣ニ勅使ヲ迎フ以下ノ官員此ニ從フ（圖ノ如シ）祭主　勅使ヲ神前ニ誘フ　勅使　御祭文ヲ讀ム此間祭主以下席ニ復シ立禮如前宣竟レハ祭主　勅使ヲ殿外ノ緣ニ送ル以下ノ官員此ニ從フ大小錄送儀如前（勅使參拜席圖ノ如シ）○次ニ官員神拜○次ニ祝部神拜竟テ祝部等撤供ス此間樂ヲ奏ス撤シ竟テ樂ヲ止ム○次ニ官員退去　直會次第（殿內北方ノ座ニ神座ヲ設ク）午前第十時陸軍省海軍省官員參向○次ニ祭主代神前ニ向ヒ拍手兩段祭事掛玉串ヲ祭主代神前ニ供ス○次ニ祭主代神前ニ向ヒ拍手兩段祭事掛玉串ヲ奉ズ祭主代神前ニ供ス○次ニ祝詞ヲ奉ズ祭主代祝詞ヲ讀ム此間官員以下立禮ス讀竟テ拍手兩段本席ニ復ス○次ニ官員神拜○次ニ祝部等神饌ヲ供ス○次ニ祭主代神前ニ向ヒ拍手兩段祭事掛玉串ヲ奉ズ祭主代神前ニ供ス○次ニ祝詞ヲ奉ズ祭主代祝詞ヲ讀ム此間官員立禮ス讀竟テ拍手兩段本席ニ復ス○次ニ官員神拜○次ニ祝部等神拜○次ニ神饌ヲ撤ス○次

ニ退去

（明治十二年七月伺十月二十八日認可現行神饌臺數）

兩度大祭 五月六日各五十膳　新嘗祭 十一月廿三日各二十五膳　元始祭 一月三日　紀元節 二月十一日　天長節 十一月三日各二十膳　月並祭 一月六日　除夜神事 十二月廿一日各十五膳

（記錄拔萃）明治二年七月十日左ノ豐ヘ招魂社祭事ノ節奏樂候ニ付目錄ノ通被下置　一金三百疋宛　長門守事東儀從四位　伊豫守東儀從五位　下野介事辻正六位　大兵衛事多正六位　長門守忰東儀正六位　伊豫守忰東儀正六位

（明治七月十一月八日達）大祭ニ付式部寮伶人九人御雇相成候ニ付酒饌料トシテ金一圓宛被下候事

（明治八年十月二十四日教導團ヘ達）招魂社大祭之節自今其團樂隊ヲ以テ奏樂可爲致此旨相達候事

〔備考十月二十七日第一局伺指令ニ海陸軍兩軍樂隊奏樂相勤候者ヘハ神酒料一名金八錢宛下賜　但シ招魂社額金ノ內ヨリ仕拂ノ事〕

（明治八年十月二十五日教導團ヘ達）來ル十一月六日招魂社大祭ニ付其團樂隊正服著用左之通同社ヘ差出奏樂可爲致此旨相達候事

但委細ノ儀ハ第一局出張官員ヘ可打合候事

一、五日午後第四時

一、六日午前第七時

報賽

遺族を始め人民より願出でゝ祭典を擧行するものを、公式祭及其他の祭典に別ちて暫く報賽と稱す。その祭る所みな懷舊追慕報慰等の意を表し、至誠愚欵恰も神人際會するの想あらしむ。甲子殉難者、朝鮮殉難者、報慰會の祭典等の如き之なり。其追慕弔慰の爲めに擧ぐるものを故桂中尉の靈祭の如きものとし、懷古紀念の爲めに行ふものを熊本籠城祭の如きものとす。これらの祭典は期日を定

め、其多くは祭資基本金を指定寄附し、其利子を以て祭費に充つ。ま
た臨時に行ふものあり。彼の明治三十八年十一月廿五日池田侯爵
（旗政）の岡山縣出身軍人にして、合祀せられたる一千七百餘柱の爲め
に報賽したる、四十二年十二月九日林伯爵（博太郎）等の奉納圖書館竣
工を奉告したる、四十三年四月十二日、やまと新聞社主催の下に櫻
田烈士を弔慰したる類の如し。この櫻田烈士の祭典には久邇宮北
白川宮、朝香宮、竹田宮の四殿下御參拜あり、角力、能樂其他の餘興等
ありて市民の詣で來るもの、殆ど例大祭に於けるが如くなりき。ま
たこれらの祭典の外、四時遠近より遺族若しくは特志者の報賽し
て御饌を獻り、神慮を慰めんとして祭典を乞ふもの續々あり。
甲子殉難者祭は明治廿六年六月十九日に其三十年祭を行ひしに
始まり、朝鮮公使館殉難者祭は明治十六年七月廿三日に、報慰會祭
典は明治卅九年八月卅一日に、故陸軍歩兵中尉桂譽輝の靈祭は同
年五月十七日に、熊本籠城記念祭は同廿三年二月廿二日に始まれ
り。而して明治三年十一月五日本神社祭神に非らざる故大村兵部
大輔の祭典を拜殿に於て擧行したり。同日は有栖川兵部卿宮を始
め山田大丞（顯義）以下の參拜ありき。大村氏は本神社創建に際し功勞
ありし故を以て、爾來年々有志會合して該祭典を擧ぐ。

（指定寄附者及金額）

金五百圓（明治三十八年六月十九日甲子殉難者祭典基金トシテ伯爵土方久元外五名ヨリ寄附）
金一百二十圓（同三十九年五月三十一日桂譽輝祭典基金トシテ遺族ヨリ寄附）
金一千百圓（同年六月五日故川上陸軍大將銅像維持資金トシテ銅像建設委員長井口省吾ヨリ引繼ヲ受ク）
金一百五十圓（同四十年八月二十二日明治十五年朝鮮公使館事變殉難者祭典基金トシテ男爵花房義質外六名ヨリ寄附）

（賽錢收入一覽表）（自明治二十四年度 至同四十三年度）

年度／月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	計
二十四年度	一八、六四三	三七、八四四	七、一〇九	七、四九五	七、一七六	七、四三九	一五、八三三	一六、八四〇	一五、八〇四	六、四三八	六、四〇四	七、九五四	一三六、七五三
二十五年度	二六、九五四	二八、三七五	四、五九三	四、八〇九	七、七五七	五、一六八	七、二〇五	二一、一三三	一四、九六八	八、六四三	八、〇九九	一五、五三〇	一四五、四九九
二十六年度	三五、四八二	八七、七一七	七、四六二	六、五三二	六、〇〇三	九、四九七	八、五三二	二六、五四五	五、五六八	八、五二五	七、三二五	二五、二九八	二二一、九八二
二十七年度	二八、五五〇	三五、三一二	七、五〇〇	五、七七〇	六、〇二九	五七、七七三	三〇、七六六	四六、九九四	一六、八五六	二〇、六八八	三五、九四八	四二、三六〇	三四二、〇八五
二十八年度	七六、三五九	七〇、〇一〇	二三、九七三	一六、二六一	一八、六六三	一六、一八七	二四、六六九	二六、三三八	一三五、四六五	三三、五五四	二五、一三四	四五、〇六五	五三六、六二三
二十九年度	八九、一〇一	一〇〇、三三〇	二五、六四〇	一九、八五四	二二、四二四	二五、七四四	二五、五四六	七六、九八二	一五、四四四	三〇、三七三	二〇、六八五	五五、六八一	四七四、五九三
三十年度	八四、六五〇	七一、九〇〇	一九、〇二五	一八、五九三	一八、三五九	一九、一四六	二五、一六五	二六、二四六	一五、七六八	一九、四八四	二六、四五四	一三三、七二八	五七七、五二六
三十一年度	九一、一六三	七五、五六三	一四、一八二	一一、九七三	一三、〇七八	一四、八五三	二四、三四〇	八四、七七六	一五、八六六	一三、〇五二	一三、五七二	三五、二七三	四三三、五九七
三十二年度	七六、四三五	六五、一六一	一二、〇〇〇	一五、〇〇八	一〇、三三四	七、三三三	七、八八〇	三五、四〇五	五、五七五	一三、七六六	一一、九一九	一八、一三三	二七五、七六四
三十三年度	四三、二九八	六〇、四〇五	八、六四七	八、二三五	六、五七六	九、五五九	一五、四九四	五五、〇六六	八、一六二	一四、九二五	九、七六九	二〇、八八七	二九七、九六四
三十四年度	四〇、〇〇二	五六、六八九	八、五六八	九、七四九	七、八二三	一〇、八二三	三一、七三九	三六、七六七	二五、〇三三	四一、三五三	三一、二六六	六四、六五二	六四三、七四二
三十五年度	一三六、三五六	一四六、六三三	二六、三一一	二七、〇〇六	二六、八三七	三一、三〇五	九六、〇五五	一二七、七三三	一七、三五一	四四、四七一	二七、九九三	四三、五七七	七五四、八一九
三十六年度	二一〇、七六三	一五九、七九三	二四、七五二	二五、六〇八	二〇、八九九	三三、三三八	二九、九四二	一三〇、八八〇	二四、五一六	二九、五五三	四八、六六〇	五九、四二〇	八〇三、八九六
三十七年度	九九、二二〇	三三六、八六六	五一、七四四	五三、二九七	四一、七〇〇	六五、八七三	七五、九八六	二三三、一四六	四五、八二二	九四、二九七	七〇、七七二	九六、七五八	一、二四〇、五五七
三十八年度	二二五、六六八	九一六、四九五	三九、〇七四	八三、九七八	七五、五七九	七四、六五八	一二六、四五二	二三八、六六六	三〇、九四〇	八二、四九二	五〇、八八二	一〇六、二四六	二、一九九、二二六
三十九年度	四三二、三九七	一、四八五、七八七	六五、一二七	三八、六二五	六一、二三〇	六六、〇三〇	七九、六四五	二三六、六九〇	三九、一三〇	六六、〇七五	二五、二三五	九二、六〇二	二、七〇六、五四四
四十年度	三三七、五五三	九三〇、六七四	八八、五四五	一〇三、〇五五	三九、一三三	五三、二二五	五三、七七七	一八四、一九三	五三、五五四	六一、四五〇	五〇、一九九	八四、四九〇	二、〇三四、一六九
四十一年度	一七、五五二	六〇八、一〇八	四六、六七五	五五、八二〇	四五、〇〇八	七二、五〇七	七七、六二〇	二六六、五八五	二四、四〇〇	四九、四四四	五〇、五四五	一〇九、三九一	一、五七九、二三〇
四十二年度	二〇四、八二〇	四一四、四〇〇	五〇、四五九	四二、八〇五	四九、六二六	七二、〇四〇	六九、三九一	三〇一、〇八八	三三、五二〇	五三、七五三	三九、三二〇	九五、六八四	一、四三一、九六四
四十三年度	一六六、二三〇	四八二、〇四〇	五〇、六四〇	四四、三三〇	三九、〇四〇	四七、八五〇	五一、三五〇	四八、六四〇	五一、八八〇	五〇、八七〇	五七、九二〇	一四、八八七	一、七九、七二〇

〔編者云、三十七年ヨリ俄然增加セシハ同年及三十八年、三十九年、四十年、四十一年ハ一周間ニ亘ル臨時大祭アリシヲ以テナリ、概シテ三十七八年以來著シク增加セリ、本表ハ國民忠愛ノ精神ヲ知ルニ足レバ特ニ揭クルコト、セリ〕

餘興　相撲、競馬、能樂、煙火、其他

相撲は明治二年の鎭座祭に際し、七月一日より三日間之を行ひ、爾來恒例の餘興となりて例大祭（○概ね五月興行す）及臨時大祭に必行ふ（○素人相撲は明治十三年十一月七八の兩日行ひしを始とし、更に三十九年十一月五日興行し以後十一月の例大祭に行ふの例となれり、）初め歐化主義の盛に

行はれし當時は、相撲の如く赤裸々たる體軀を露はして公衆に示すは、蠻風なりとて指彈擯斥せられ、喜々の議を極めたりしかど、傳來の久しきと勇武鼓舞の名目の下に、本社にては之を行ふことを得しめ、實に相撲道の命運を挽回して角觝界今日の盛大を致せるものは、本神社に負ふ所大なりと云ふべし。故に大祭に當りては、其輩縱令遠地にありと雖も、必ず參集して競技に努むるなり。而して彼等の（大砲、西の海、小錦、常陸山、梅ヶ谷等）橫綱となるや、先づ當社に詣でゝ其式を擧ぐ。本神社とこの技との關係此の如く深し。其の廣大なる相撲場を有するむべなりと云ふべし。明治十二年までは本社の事悉く陸軍省經營の下に在りて、相撲場は第一經營部に於て經營し、其事務は第五局に於て取扱ひしなり。十年十一月の合祀祭に方り大坂相撲百八十名を招き競技せしめし時の如きはその費用、實に二千八百餘圓を要したりき。其盛大思ふべし。爾後大坂相撲の擧行なく、常に東京角觝界の催す所に係れり。卅六年相撲場の修築せらるゝや年々盛況を加へ、觀客四方より來集して呼號歡聲轟き渡る。就中皇族の御觀覽ありしこと實に數十回に及べり。そも〳〵、此技の台覽に供せられ、大に斯道に面目を施したるもの、全く祭神の恩德に外ならざるなり。

競馬は明治四年五月十五日の例大祭に始めて擧行し、爾來臨時祭例大祭には必擧行したりしが、同卅一年十一月五日の例大祭以後廢して復た興らず。そもそも競馬は其初陸軍省軍馬局の所管に屬し、軍馬を出して廣く有志者を募集し、先驅者には賞を與へて餘興

をそへ、乘て其技を進め馬匹の改良を奬勵せり。記錄の存する所に據れば、廿四年五月より廿一年五月まで八年間競馬用馬匹の出場、多きは廿九年十一月大祭の二百六十八頭、少なきも廿四年十一月例大祭の百五十頭とす。其熾なる時に當りてや、競場の宏壯なる、驅の勇健なる、眞に餘興中の一偉觀として觀衆は星を戴きて集まり、忽ちにして堵を築くに至れりと云ふ。廿年五月と十一月との例大祭には畏くも明宮殿下の台覽あり。又祭典にあらずして臨時に行ひしは、五年十月廿日露國某親王の爲めに外務省の此場に於て催しゝこと是なり。爾後此技大に進歩し場所の狹隘を感ずると共に卅一年以後中止せしが、終に卅四年九月八日競馬場をも廢止せられたり。

能樂は、明治十年十一月十三日○臨時大祭以來行はれ○此時、梅若實寄附演能せしを以て爾來、梅若の演ずる例となりて現今に及べり、爾後例大祭、臨時大祭に行はる、故英照皇太后、竝皇后兩陛下痛く能樂を賞美し給ひて、同十四年岩倉右大臣發起して芝公園內に能樂堂を興すや、屢々行啓あり、同十七年能樂會の設立あるに際しても、能樂保存の御思召を以て青山御所より同會へ年々補助金の御下附ありき。後に該堂を本神社に寄附し境內に移すや、皇后陛下之を嘉みし給ひて金千圓を賜ひぬ。今の能樂堂は卽ち是なり。○能樂堂の項參照而して催能の際は、觀客先を爭ひて群集し滿場立錐の地なきに至る。今や此技大に起り時々人民の願ひて斯の場に演ずるあり。また四十年より年一回皇族の御催有りて、皇后陛下皇太子同妃兩殿下各皇族の台臨し給へること數回に及びぬ、盛なりと

云ふべし。

煙火は、明治二年の鎭座祭に際し七月三日を以て晝夜打揚げしに始まりて、大祭毎に必ず行ひ來りしを、同六年七月四日の例大祭より仕掛花火をのみ行ふことゝなり、同十四年四月七日達によりて殆ど廢絶に歸せんとせしが、同五月九日の祭典より打揚花火を再興し、爾來斷續して現今に至れり。當初本社餘興煙火は、二州橋の煙火と並び稱せられて參河、信濃、埼玉等よりその奉納を出願するものさへありき。廿七年五月七日の如きは砲兵工廠及工科學校生徒より奉納し、殊に卅八年十一月六日の例大祭に當りては、山階宮殿下より百五十發の御奉納さへありき。

其他餘興として行ひしもの太々神樂、倭舞、射撃、手踊、野試合、騎戰調練、母衣引、劍術、馬術、挿花、劍舞、柔術、等列記するに遑あらず、就中明治九年十一月六日の大祭に大和舞の演舞者に酒饌料を下されし如きは特筆すべきことならむ。而して皇族の餘興を台覽ありしことは記錄に存するもの左の如し。

明宮殿下	明治二十年五月六日	競馬台覽
東宮殿下	明治二十年五月八日	相撲台覽
同　年十一月六日		競馬台覽
久邇宮二王子殿下	同　卅四年五月八日	相撲台覽
久邇宮北白川宮若宮	同　卅五年五月七日	相撲台覽
伏見宮殿下北白川宮久邇宮若宮	同　卅六年五月七日	相撲台覽
山階宮北白川宮	同　卅七年五月七日	相撲台覽
山階宮梨本若宮	同　四十二年五月七日	相撲台覽

山階宮兩殿下　同　四十三年五月六日　相撲台覽
東伏見若宮殿下　同　同　四十三年五月六日　相撲台覽
閑院若宮殿下　同　同　七　日　相撲台覽

〔編者云、二十年ヨリ三十三年ニ至ル皇族ノ台臨ナキガ如シト雖モ、コハ日記ノ粗漏ナルベシ、偶之ヲ錄スルモ御名ヲ書セズ、久邇宮二王子ト申スハ邦彥王守正王兩殿下ノ御事ヲ指シ奉レルカ、コレラハ記錄ノマヽヲ揭ゲテ推究セズ、コノ外皇后陛下ノ能樂堂ヘ行啓四回（皇太子殿下モ同シク四回アリ）ノ如キハ、神社餘興能ニ非ラサレバ本項ニハ記サズ〕

（明治四年五月九日諸官省彈正臺並部內ヘ廻達）來ル十五日招魂社大祭ニ付テハ本日第十二時ヨリ競馬執行有之候ニ付先驅ノ者ヘ左ノ品物褒賞差出候間有志ノ面々ハ來ル十三日迄ニ姓名御廻シ有之度此段申進候也　一、袂時計五ツ　一、羅紗戎服地五著　一、フランケツト五枚　但一勝一品宛ニ候事

（明治五年五月例大祭祝詞）天皇我大御詔乎奉里氏兵部卿熾仁親王諸乃靈乃前爾白（中略）辭別氏白久慰物止奉仕留練兵相撲競馬花火種々乃事乎奏花火乃高萬加爾

競比乘留駒乃耳振立氏兵隊我打出流火玉乃止岐我如召合須角力乃速氣久見備出賜登申事乃由乎平介久安介久聞食止申

（明治六年一月二十七日會計局ヘ達）來三十一日招魂社大祭ニツキ例之通競馬修行可致候馬掛ヘ可相達候也追テ雨天巡延ノ事

（明治六年六月四日軍醫部ヘ達）來九日招魂社大祭ノ節競馬施行候條醫官一名同日同所ヘ出張可致此旨相達候也

（明治六年六月祭典掛青山清ヨリ第一局ヘ伺）諸縣大小神社敷地ヲ以テ恐考仕候處招魂社競馬場只今ノ通ニテハ體裁ヲ得ズ候依テ一ノ鳥居ヨリ東面競馬中央墊墓切通シ左右土壘築立二ノ鳥居造立相成候樣奉願候左候得者大祭ノ節勅使官員中兵隊參拜ノ道筋其體制宜敷既ニ鎌倉鶴岡等社前ノ目途モ有之尤競馬執行ノ時ハ東西緒切往來不相成樣可仕候依テ圖繪差出候ニ付直樣御詮議被下度此段奉伺候也

（明治九年十一月十三日達）去ル六日大祭ノ節興行相成候大和舞之者十八名ニ酒饌料金二圓ツヽ被下候事

（明治十年一月十九日第五局ヘ達）來二十五日臨時招魂祭同二十七日例大祭之節同社境內ニ於テ室內射的執行之儀砲兵本廠ヘ相達候條此旨可相心得

（同十一年九月二十一日軍馬局ノ伺）二十四日ヨリ二十六日マデ此度ニ限リ競馬執行ノ際特別ヲ以テ賞與金トシテ百圓別途御下渡ノ件聞屆ラル

（明治十二年十月九日第五局工兵第一方面本署本病院軍馬局へ達）靖國神社大祭ノ節競馬相撲等執行之儀自今左ノ通相定候條總テ先列ノ通リ可心得此旨相達候事　五月六日競馬、花火　七日競馬、相撲　八日相撲　十一月六日競馬　七日競馬、能樂　八日能樂

（明治十四年四月七日砲兵第一方面ヘノ達）靖國神社例大祭之節競馬其他興行之儀自今ノ次第有之自今廢止候條此旨相達候事

（明治十四年四月十九日總務局長達）靖國神社大祭ノ節執行煙花ノ儀余議左ノ通御改定相成候條爲心得相達候事　五月六日競馬　七日相撲　十一月六日競馬　七日能樂

行幸、行啓、天皇　皇后　御代拜　皇太子　皇太子妃

本神社のことは一に宸慮に出づるを以て、行幸啓亦一再ならず、明治七年一月廿七日の例大祭に當りて、行幸あらせ給ひしを其の初度として、同八年二月廿二日、同十年十一月十四日、同廿八年十二月十七日、同卅一年十一月五日、同卅九年五月三日、同四十年五月三日の行幸に至るまで、前後七回の多きに及ばせ給へり。其の間、御名代の御差遣ありしは、同三十八年五月四日にして、伏見宮貞愛親王殿下之れに當らせらる。又皇后陛下の行啓あらせられしは、明治二十九年五月六日の例大祭を其初度とし、同三十一年十一月五日、同三十九年五月三日、及同四十年五月三日等四回の行啓あらせられ、御名代としては三十八年五月四日に、閑院宮載仁親王妃殿下臨ませらる、（これより前皇后陛下には、十年十一月十四日及廿八年十二月十八日にも、行啓あらせらるべく仰出されしも御恙の爲め御沙汰止となりしことあり。）而して東宮殿下の行啓は、同三十八年五月五日、同三十九年五月四日、

同四十年五月四日の三回にして四十年五月四日には東宮妃殿下亦行啓あらせられき、（この外、能樂堂へ皇后陛下竝皇太子同妃殿下の行啓相撲台覽の爲め、及び遊就館へ行啓等は御參拜に有らざれば本項に加へざること勿論なり、）大凡行幸の御時は南行幸門より入らせ給ひ、本殿石階の下に於て下乘あらせられ、皇族、親任官公爵、從一位、勳一等及各省勅任官總代、錦鷄間祗候總代、有爵者總代、各省奏任官總代、有位華族總代、貴衆兩院議員總代等先着して迎へ奉り、陸海軍兩省大臣、大祭委員長、神殿階上に御先導を奉仕し、それより宮司更に殿上中陣なる御拜座に御先導し奉り、恐くも玉座に登り給ひて御立拜あらせ給ふなり。御還幸は北行幸門より出てさせ給ふを例とす。明治七年一月、八年二月及十年十一月の行幸の御時には、御拜の後、暫時、殿上の御倚子に倚らせ給ひて、親しく兵士の參拜を

天覽あらせられ、三十九年、及四十年五月に行幸あらせられたる御時には、玉垣内庭松樹の側に設けられたる御休憩所にて、陸海軍兩大臣臨時大祭委員長及び宮司に拜謁仰付られき。斯く至尊の御身を以て頻りに御參拜あらせ給へる大御心のほどこそ、畏しとも尊き極なりけれ。

天皇陛下行幸	第一回	明治七年一月廿七日	午前十時
同	第二回	同 八年二月廿二日	同
同	第三回	同 十年十一月十四日	同
同	第四回	同 廿八年十二月十七日	午前十時三十分
同	第五回	同 廿一年十一月五日	同
同	第六回	同 廿九年五月三日	午前十時

同	第七回	同	四十年五月三日
皇后陛下行啓	第一回	同	廿九年五月六日
同	第二回	同	三十一年十一月五日午前十一時
同	第三回	同	三十九年五月三日
同	第四回	同	四十年五月三日
天皇陛下御名代伏見宮	同	三	三十八年五月四日
皇后陛下御名代閑院宮妃	同	三	三十八年五月五日
東宮殿下行啓	第一回	同	三十九年五月四日
同	第二回	同	四十年五月四日
同	第三回	同	四十年五月四日
東宮妃殿下行啓		同	四十年五月四日

（明治七年一月廿五日布達）來廿七日招魂社大祭ニツキ午前七時御出門同社へ臨幸被仰出候條爲心得此旨相達候事

但同日同社へ參集候官員御送迎ノ位置別紙圖面ノ通可心得候事

（明治七年日記抜萃）一月廿七日晴、行幸ニ付獻供時間ヨリ早目ニ致候事、祭主山縣陸軍卿中將行幸ヲ待チ奉ル、先勅任官ハ石垣ノ下、陸海軍左右ニ列ス、奏任官其次列判任官御門外左右ニ侍候、社司社掌等陸軍側判任侍候ノ先ニ列ス、大鳥居ニ至ラセラ玉フ頃樂人樂ヲ奏ス、御社門內ニテ御馬車ヲ下ラセラレ殿內ニ入御、勅任官ノ者御案內申上ゲ、玉座ニテ御拜畢テ御倚子ニ懸ケサセラレ、近衞兵並海兵ノ拜式ヲ天覽アラセラレ、畢テ還御、御送儀迎儀ニ同ジ、（中略）赤地錦一卷、青地錦一卷御備ヘ相成、

（下略）

（明治七年一月大祭祭式）廿七日大祭午前二時庭燎（中略）祭主玉串獻備祝辭奉讀、

天皇臨幸、天覽兵隊參拜式（下略）

（明治八年二月十八日達）來廿二日招魂社大祭ニツキ臨幸被仰出候條爲心得相達候事

但同日同社へ參集候官員送迎位置別紙圖面ノ通可相心得候事

（明治八年日記抜萃）二月二十二日晴、午前第二時庭燎午前第八時大祭祭主陸軍中將參向、官員陸軍方東伏見宮稚田陸軍少將外數

人略之海軍方官員卒田口海軍少將(中略)第十時御出門　天皇臨幸御拜アラセラレ後近衞兵天覽アラセラレ竟テ還御、御幣物料トシテ金百圓御寄附アラセラル、御迎ノ儀ハ判任官ハ御門外ニ奏任官ハ社前ニ(海軍ハ北方陸軍ハ南方)勅任官御案內トシテ昇殿以下略之)

(明治十年日記抜萃)十一月十四日晴大祭、祭主陸軍大將有栖川宮(中略)午前十時行幸供奉ハ皇族大臣參議諸省ノ長官　天皇幣帛金一千圓ヲ供ヘ給フ、

(明治十年十一月臨時大祭々式)十四日午前第二時庭燎(中略)午前十時行幸時間ニ先テ式部頭御幣物金千圓神前ニ捧グ、陸海軍兩省官員圖ノ如ク社前ニ出(圖略ス)次ニ鳳輦大鳥居ニ至ル時樂隊樂ヲ起ス、次ニ祭主以下兩軍官員奉迎シ、次ニ御拜竟テ玉座ニ着セ給フ、次樂隊樂ヲ止ム、次兵隊參拜　天覽竟テ還幸、兩軍ノ官員奉送迎儀ノ如シ、

(明治十年十一月十三日達)今般招魂社臨時祭ニ付明十四日午前第九時三十分御出門　聖上　皇后宮同社ヘ行幸行啓被仰出候爲心得此旨相達候事

(明治十年十一月十三日德大寺宮內卿ヨリ西鄉陸軍卿代理達)明十四日招魂社ヘ　聖上　皇后宮　行幸行啓被爲在候旨及御達置候處　皇后宮ニハ御風氣ニ付行啓不被爲在候旨被仰出候間此段及御達候也

(明治二十八年日記)十二月十七日曇(前略午前十時皇族親任官公爵從一位勳一等各省勅任官總代麝香間祗候錦雞間祗候總代(外ハ祭式ニヨリ茲ニハ略ス午前十時三十分陸軍々樂隊樂ヲ奏ス、

行幸此時先着ノ方々奉迎宮司神前御拜座ニ御先導申上奉ル、還幸ノ時ノ奉送奉迎ノ時ノ如シ、御還幸後皇族ヲ始メ以下一同拜禮

(明治二十八年十二月臨時招魂祭及大祭々式次第書抜萃)先早旦神職神殿ヲ裝飾ス、午前第四時庭燎ヲ燒ク、午前第八時陸海軍兩省掛官(陸軍武官ハ正裝、海軍武官ハ正服)及宮司昇殿禰宜以下神職之ニ從フ、(中略)次陸海軍兩大臣臨時大祭委員長陸海軍兩省各局各官衙勅奏任官總代御先着、(陸軍武官ハ正服、文官ハ大禮服)午前十時、皇族親任官公爵從一位勳一等及各省(陸海軍兩省ハ除ク)勅任官總代麝香間祗候總代錦雞間祗候總代有爵者總代各省(陸海軍兩省ハ除ク)奏任官總代有位華族總代貴族院議員總代衆議院議員代、御先着、午前第十時三十分　行幸(此時陸海軍兩大臣臨時大祭委員長御先着諸員中門外ニ於テ奉迎此間軍樂ヲ奏ス)著御陸海軍兩大臣臨時大祭委員長御先導階上樣側左右ニ伺候ス、宮司神前　御拜座ニ御先導上段ノ下ニ伺候ス、還幸ノ時陸海軍兩大臣臨時大祭委員長宮司御先導階下ニ伺候ス(此時諸員奉送奉迎ノ時ノ如シ此間軍樂ヲ奏ス、次陸海軍兩大臣臨時大祭委員長拜禮、次　皇族其他御先着ノ諸員昇殿拜禮、

次勅任官一等二等、麝香間祇候有爵者奏任官有位華族貴衆兩院議員判任官拜禮(文官奏任官以上及有位ノ輩ハ大禮服)次掛官拜禮次神拜(以下略ス)

(明治二十八年十二月十七日香川皇后宮太夫ヨリ山縣陸軍卿ヘノ通牒)拜啓陳者明十八日　皇后陛下靖國神社ヘ行啓被仰出候處一昨日ヨリ御風氣ニヲ今朝池田侍醫岩佐侍醫兩人拜診ノ處明日之行啓御見合相成候間可然御承知被下度尚又招魂祭係ノ人々ヘモ宜敷申入候樣ニトノ御沙汰被爲在候就テハ御全快之上他日被爲成度トニ被爲思召候ヘトモ致方無之御見合相成候間可然御承知被下度尚又招魂祭係ノ人々ヘモ宜敷申入候樣ニトノ御沙汰被爲在候就テハ御全快之上他日被爲成度トノ思召モ被爲在候條此儀モ御含置被下度先ハ右得貴意度如此御座候　敬具

再申　皇后陛下昨年氣管支カタルノ御症ニテ御轉地御養生等被爲在候後モ御風ヲ召シ候節ハ折々右ノ御症ヲ引起シ勝ニテ侍醫ニ於テモ深ク其邊ヲ御察シ申上居候折柄ニ付不得止此度ノ行啓モ御止メ願出候次第ニ御座候　皇后陛下ニ於テハ本文得貴意候通此度ノ儀ハ非常ノ儀ニ付是非行啓被遊度思召候處萬々御遺憾ノ旨懇々御沙汰被爲在候ヘ共誠ニ不得止御止メ申上候次第ニ御座候此段モ委敷小官ヨリ可申入旨御沙汰被爲在候間追啓如此候也

(明治二十八年日記抜萃)十二月十八日晴天、本日午前十時三十分　皇后陛下行啓有ラセラルヽ筈ノ處、御風氣ニヲ御見合ノ趣御沙汰有之云々、

(明治二十九年日記抜萃)五月六日午前十時　皇后陛下行啓、此時陸海軍兩大臣ハ中門內、陸海軍勅奏任官ハ中門外ニ於テ奉迎ス、此間軍樂ヲ奏ス、宮司神前、御拜坐ニ御先導申上奉ル、(下略)

(明治二十九年五月臨時招魂祭並ニ例大祭々式次第書抜萃)(前略)次　皇后陛下迎ノ爲諸員殿ヲ下ル午前十時　皇后陛下行啓、此時、皇族武官、陸海軍兩大臣ハ中門內、陸海軍兩省勅奏任官ハ中門外ニ於テ奉迎ス、此間軍樂ヲ奏ス、着御、陸海軍兩大臣御先導階上樣側左右ニ伺候ス、宮司神前御拜座ニ御先導上段ノ下ニ伺候、還啓ノ時陸海軍大臣宮司御先導階下ニ伺候ス、(此時諸員奉送奉迎ノ時ノ如シ)此間軍樂ヲ奏ス)次　皇族武官、將官以下順次拜禮(下略)

(明治三十一年日記抜萃)十一月五日晴天、先早旦神職神殿ヲ裝飾ス、前四時庭燎ヲ燒ク、(中略)陸海軍兩大臣臨時大祭委員長、陸海軍兩省各局各官衙勅奏任官總代、御先着午前十時　皇族親任官公爵從一位勳一等及各省(陸海軍兩省ヲ除ク)勅任官總代、爵香間祇候總代、錦鷄間祇候總代有爵者總代、各省(陸海軍兩省ヲ除ク)奏任官總代、有位華族總代貴衆兩院議員總代御先着、午前十時三十分　行幸此時陸海軍兩大臣臨時大祭委員長御先着諸員中門外ニ於テ奉迎ス、(此間軍樂ヲ奏ス)着御　陸海軍兩大臣臨時大祭委員長御先導階上樣側左右ニ伺候、宮司神前ノ御拜坐ニ御先導上段ノ下ニ

伺候ス　還幸　此時陸海軍兩大臣臨時大祭委員長宮司御先導階下ニ伺候ス（此間軍樂ヲ奏ス）午前十一時　行啓（還啓モ同シ）前　行幸ニ同シ茲ニ略ス、陸海軍兩大臣臨時大祭委員長拜禮　皇族其他御先着諸員昇殿拜禮、勅任官一二等以下麝香間祗候、錦鷄祗候有爵者奏任官、有位華族貴衆兩院議員判任官拜禮、次掛官拜禮、神職拜禮（明治三十一年十一月臨時大祭例並大祭々式次第書抜萃）十一月五日（前略）次陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長陸海軍兩省各局官衙勅奏任官總代御先着（陸軍武官ハ正服、文官ハ大禮服）午前第十時皇族親任官、公爵從一位勳一等及各省（陸海兩省ヲ除ク）勅任官總代、麝香間祗候總代錦鷄間祗候總代有爵者總代、各省（陸海兩省ヲ除ク）奏任官總代有位華族總代、貴衆兩院議員總代御先着（大禮服）午前十時三十分　行幸（此時陸海軍兩大臣、大祭委員長御先着諸員中門外ニテ奉迎ス此間軍樂ヲ奏ス）御先着陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側ノ左右ニ伺候ス、宮司神前　御拜座ニ御先導上段ノ下ニ伺候ス、還幸ノ時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長宮司御先導階下ニ伺候ス（此時諸員奉送奉迎ノ時ノ如シ）（下略）

拜座ニ御先導上段ノ下ニ伺候ス、還啓ノ時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長宮司御先導階下ニ伺候ス（此時諸員奉送奉迎ノ時ノ如シ）（下略）

（明治三十八年五月二日東宮大夫中山侯爵ヨリ賀茂宮司ヘ達）皇太子殿下來ル五日午前十一時靖國神社ヘ行啓可被爲在旨被　仰出候條此段及通牒候也

追テ　皇太子妃殿下ニハ御支障有之行啓不被爲在候條此段申添候

（明治三十八年日記抜萃）五月四日前晴（上略）天皇陛下御代參ニハ伏見宮殿下、皇后陛下御代參ニハ閑院宮妃殿下臨マセラル、皇族ニハ閑院宮殿下ヲ始メ四殿下及妃殿下御兩方御參拜アラセラル、參列參拜ノ重ナルモノハ寺內陸軍大臣、山本海軍大臣、伊東臨時大祭委員長、山縣參謀總長、內閣各大臣、樞密院顧問官、其他公侯爵以下華族總代元老諸公有位者（下略）

五月五日　曇（上略）東宮殿下御兼定ノ如ク、午前十一時御參拜アラセラル、御陪乘ハ村木武官長ニシテ、南行幸御門ヨリ入ラセラレ、石段ノ下ニテ御下乘、夫ヨリ御道敷ノ上ヲ通御、御拜座ニテ參拜アラセラレ、御還啓ハ北行幸御門ヨリ出ヅサセラル、

（明治三十八年五月臨時招魂祭及大祭式次第抜萃）四日（上略）午前第十時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省各局、各官衙勅奏任官總代先着（服裝前ニ同シ）午前第十一

時　御着、（皇太子殿下同妃殿下）行啓、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省勅奏任官總代、中門外ニ於テ奉迎、此間軍樂ヲ奏ス（下略）

（明治三十九年日記）　五月三日雨（上略）本日御豫定ノ如ク兩陛下　行幸啓アラセラル、行幸ノ節ハ本社前松樹ノ傍ニ設ケタル御休憩所ニテ暫時御休憩セラアラレ、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、及ビ宮司ニ拜謁仰付ラル、奉送奉迎等祭式次第ニアリ略ス、御拜畢テ皇族始メ各大臣、委員長以下御先着ノ勅奏任官諸員拜禮ス、今日雨天ナリシハ遺憾ナリト雖モ、細雨ニシテ困難ヲ感ズル迄ニハ至ラサリキ、四日好天氣（上略）東宮殿下臨時大祭御參拜ノ爲メ午前九時四十分御出門ニテ行啓アラセラレ御拜アリ

（明治三十九年五月臨時招魂祭及大祭々式次第書拔萃）三日（前略）午前十時皇族、親任官、公爵、從一位勳一等及ヒ各省（陸海軍ノ除ク）勅任官總代、麝香間祗候總代、錦鷄間祗候總代、貴衆兩院各議長及ヒ議員各省（陸海軍ノ除ク）奏任官總代、有位華族總代先着、（文官奏任官以上及ヒ有位ノ輩ハ大禮服、其他通常禮服）午前第十時御出門　行幸此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先着、諸員中門外ニ於テ奉迎、此間軍樂ヲ奏ス、着御、陸海軍兩大臣臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ侍立、次ニ皇族拜禮、次陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省勅奏任官總代先着（服裝前ニ同シ）午前十時　皇太子殿下行啓、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省各局各官衙勅奏任官ニ於テ奉迎、此間軍樂ヲ奏ス、着御、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ侍立、次ニ皇族拜禮、次陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省勅奏任官總代、中門外ニ於テ奉迎、此間軍樂ヲ奏ス、着御、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ侍立、次ニ皇族拜禮、次陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省勅奏任官總代先着（服裝前ニ同シ）午前十時　皇太子殿下行啓、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省各局各官衙勅奏任官

如シ此間軍樂ヲ奏ス）

午前第十一時御出門　行啓此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先着諸員中門外ニ於テ奉迎、此間軍樂ヲ奏ス、着御、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ侍候ス、宮司神前　御拜座ニ御先導上段ノ下ニ侍候ス、還啓ノ時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、宮司御先導階下ニ侍候ス、此時諸員奉送奉迎ノ時ニ同シ、（此間軍樂ヲ奏ス）次　皇族拜禮、次陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省勅奏任官總代先着（服裝前ニ同シ）午前十時　皇太子殿下行啓、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、陸海軍兩省勅奏任官總代、中門外ニ於テ奉迎、此時軍樂ヲ奏ス　御着、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長　御先導階上椽側左右ニ侍候ス、宮司神前　御拜座ニ御先導上段ノ下ニ侍候ス、還啓ノ時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、宮司御先導階下ニ侍候ス、此時諸員ノ奉送奉迎ノ時ノ如シ、（下略）

（明治四十年日記）　五月三日晴天（上略）行幸ハ午前十時御出門　御着後、天皇陛下ニハ御休憩所ニ御休ミ遊ハサレ、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、及賀茂宮司ニ拜謁仰付ラル、奉迎奉送等祭式次第書ニアリ略ス（下略午前十一時御出門　皇后陛下行啓　總テ　皇族ヲ始メ、各大臣、委員長御先著ノ勅奏任官諸員悉皆　天皇陛下ノ

時ニ同ジケレバ茲ニハ略ス、(下略)

五月四日　晴天(上略)　午前十時　御著　皇太子殿下　同妃殿下行啓、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長先着、諸員中門外ニ於テ奉迎ス、宮司神前　御拜座ニ御先導申上ゲ段下ニ伺候ス、還啓ノ時前日ノ通リ、(下略)

(四十年五月臨時招魂祭及大祭々式次第書抜萃)　三日式次(前略)午前十時　皇族親任官、公爵、從一位勳一等、及各省(内閣、樞密院、會計檢査院、行政裁判所ヲ含ミ、陸海軍兩省ヲ除ク)勅任官總代、警視總監、東京府知事、靜香間祇候總代、貴衆兩院議長及職員、各省奏任官總代、有位華族總代先着、(文官奏任官以上及有位ノ軍人ハ大禮服、位ハ通常禮服)　午前十時御出門　行幸、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長先着諸員中門內外ニ於テ奉迎ス、此時軍樂ヲ奏ス、　着御、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ伺候ス、宮司神前　御拜座ニ御先導階下ニ伺候ス、(此間軍樂ヲ奏ス)午前第十一時御出門、皇后陛下行啓、此時陸海軍兩大臣臨時大祭委員長先着諸員中門ノ內外ニ於テ奉迎ス、(此間軍樂ヲ奏ス)　着御、陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ伺候ス、宮司神前　御拜座ニ御先導上段ノ下ニ伺候ス、還啓ノ時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長、宮司先導階下ニ伺候ス、此時諸員ノ奉送奉迎ノ時ノ如シ、(此間軍樂ヲ奏ス)次　皇族拜禮、次陸海軍兩大臣、大祭委員長拜禮、(以下略ス)

四日　式次(前略午前第九時陸海軍兩大臣臨時大祭委員長陸海軍兩省各局各官衙近衛第一師團勅奏任官總代先着(服裝前ニ同シ)　午前第十時御着　皇太子殿下　同妃殿下行啓、此時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長先着諸員中門內外ニ於テ奉迎ス、(此間軍樂ヲ奏ス)御着　陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長先着諸員中門內外ニ於テ奉迎ス、(此間軍樂ヲ奏ス)御座ニ御先導上段ノ下ニ伺候ス、還啓ノ時陸海軍兩大臣、臨時大祭委員長御先導階上椽側左右ニ伺候ス宮司神前　御拜導階下ニ伺候ス、此時諸員奉送ノ奉迎ノ時ノ如シ(此間軍樂ヲ略ス)(以下略ス)

勅使

勅使を立てさせらるゝは最も重き事なり。本神社へは草創以來例大祭(但年中例大祭中一同の御差遣にして明治六年より、十一月六日の例祭と定まれり。祭日の項に逸べたり參照すべし)并に臨時祭等には必ず勅使を差遣せらる。最初より茲に七十一回、祭文を納めらるること六十五卷なり。(按ずるに二年六月二十九日、三年一月三日、四年一月三日、五年一月三日、十三年五月十四日、同年同月十七日の五

同の勅使御差遣の時には御祭文なくして玉串奉奠の事のみなりしなり。其初度の參向は明治二年六月二十九日。○當社創祀の日にして、彈正大弼五辻安仲勅使たり。爾來勅使は侍從を以て充てられしが、同五年九月十五日の達により更に式部寮の官員を以てせらるゝことゝなれり。然れども其間特に祭主たる陸海軍の中少將を以て勅使を兼ねて祭文を奉讀せしめられしこと三回あり。明治十一年十一月六日の大祭日以後は大祭日及臨時祭奉告祭に至るまで總て掌典を遣はさるゝことゝなれり。凡勅使の參向あるや、招魂社當時は專ら武官之を送迎せしが社格制定以來祭典掛官と俱に宮司は拜殿の階下に、陸海軍兩大臣は緣側に迎へ、宮司先導して神殿に昇る、奉送亦奉迎の時の如し。又例祭合祀祭にあらずして臨時の祭典に勅使の參向ありしは、明治十三年五月以

後四回なりき。

明治二年六月廿九日	鎭祭	彈正大弼	五辻安仲
同　年九月廿一日	例祭	從三位	高辻脩長
同　三年一月三日	例祭	從四位	平松時厚
同　四年同　日	例祭	宮內大丞	小河一敏
同　五年同　日	同祭		伏原宣足
同　五年九月廿三日	例祭	式部寮六等出仕	戶田忠至
同　六年一月廿一日	同祭	式部寮七等出仕兼大掌典正三位	慈光寺有仲
同　年十一月六日	同祀	式部權助兼大掌典從三位	橘本實梁
同　七年八月廿八日	合祭	同	同
同　年十一月六日	例祭	式部寮七等出仕兼大掌典正三位	四辻公賀

同年同日　合祀記
同八年二月廿二日　同祭
同年七月四日　同
同年十一月六日　例祭
同九年一月廿六日　合祀記
同九年十一月六日　例祭
同十年一月廿五日　合祀記
同十年十一月六日　例祭
同年同十三日　合祀記
同十一年七月四日　同祭
同年十一月六日　例祭

同　同
同　從六位　松尾相永
同　陸軍中將兼參議陸軍卿正四位　山縣有朋
同　式部權助兼大掌典從三位　橋本實梁
同　海軍少將正五位　伊東祐麿
同　式部寮七等出仕　多田好問
同　式部權助兼大掌典從三位　橋本實梁
同　式部權助兼大掌典正六位　丸岡莞爾
同　海軍中將兼參議々官海軍卿從四位勳一等　川村純義
同　四等掌典從七位　飯田年平

同年同日　合祀記
同十二年六月廿五日　合祀記
同年同日　改奉告號
同年十一月六日　例祭
同十三年五月十四日　近衛砲兵隊記念祭
同年同十七日　警視局臨時祭
同年十一月六日　例祭
同十四年十一月六日　同
同十五年十一月六日　例合祀祭
同十六年同日　例祭
同十七年同日　例合祀祭

同　同
同　式部助兼一等掌典正六位　丸岡莞爾
同　同
同　式部寮六等出仕兼大掌典從六位　國司仙吉
同　正四位　西四辻公業
同　四等掌典正七位　廣幡忠朝
同　小西有勳
同　式部權助兼二等掌典從三位　橋本實梁
同　四等掌典正七位　小西有勳
同　式部寮六等出仕兼三等掌典從六位　林直庸
同　同

同　十八年同　日　例祭　掌典従四位子爵　竹屋光昭
同　十九年同　日　同祭　同　同
同　廿年同　日　同祭　同　同
同　廿一年十一月六日　例合記祭　掌典正四位　石山基正
同　廿二年二月十一日　憲法發布奉告祭　掌典従六位勲六等　小西有勲
同　廿二年十一月六日　例合記祭　掌典　宮地嚴夫
同　廿三年同　日　例祭　掌典従三位子爵　千種有任
同　廿四年同　日　例合記祭　掌典　宮地嚴夫
同　廿五年同　日　例祭　同　正八位　北郷久政
同　廿六年同　日　例合記祭　同　従三位子爵　前田利嶷
同　廿七年同　日　例祭　同正七位勲六等　手塚光榮

同　廿八年同　日　同祭　同　従七位　北郷久政
同　年十二月十六日　合記祭　同　従三位子爵　前田利嶷
明治廿九年十一月六日　例合記祭　掌典正七位勲六等　手塚光榮
同　廿年同　日　例祭　同　従三位子爵　前田利嶷
同　廿一年同月四日　合記祭　掌　典　従四位　園池實康
同　年同　六日　例祭　同　宗　重望
同　廿二年五月六日　合記祭　同　正七位　北郷久政
同　年十一月六日　例合記祭　同　同
同　廿三年五月六日　合記祭　同　正七位　宮地嚴夫
同　年十一月六日　例祭　同　正七位勲七等　藏田秋輔
同　廿四年十一月一日　合記祭同　同　荻原嚴雄

同	年同	六日	例祭同	正七位 北郷久政
明治卅五年十一月六日			例祭	掌典兼式部官正四位 九條道實
同	卅六年同	日	同	従六位 北郷久政
同	卅七年二月十五日		開戦奉告祭	同 勅正七位等 荻原嚴雄
同	年十一月六日		例合祀祭	同 男正五位爵 久我通保
同	卅八年五月三日		合祀祭	同 勅正三位子爵 竹屋光昭
同	年十一月六日		例祭	同 従六位 北郷久政
同	年十二月十一日		平和克復奉告祭	同 正七位 佐伯有義
同	卅九年五月二日		合祀祭	同 勅従四位等 園池實康
同	年十一月六日		例祭	同 正五位男爵 久我通保
同	四十年五月二日		合祀祭	同 雅樂部長勅正六位五等 宮地嚴夫
同	四十年十一月六日		例祭	同 勅正三位四等子爵 前田利嗣
明治四十一年五月五日			合祀祭	同 勅従六位五等 藏田秋輔
同	年十一月六日		例祭	同 正六位 北郷久政
同	四十二年五月五日		合祀祭	同 従六位 佐伯有義
同	年十一月六日		例祭	同 勅正三位四等子爵 前田利嗣
同	四十三年五月五日		合祀祭	同 勅従四位五等 園池實康

（明治二年六月二十三日御沙汰書）五辻彈正大弼
來二十九日招魂祭ニ付　勅使トシテ參向被仰付候事
〔編者云爾後勅使御差遣ノ度毎ニ御達アリ略之〕
（明治二年六月二十六日招魂祭順序達）招魂社祭事當日順序左之通一、七時　號砲
二聲　右ヨリ半字過キヲ　勅使宮中ヲ發ス九段ニ至ル頃奉迎スヘシ先假座ニ入
ル次ニ神殿ニ至ル次拜　勅使ヨリ少シク先キ奉幣使來ル（勅使乘ノ車ナリ）軍務官出張ノ人
是ヲ受取神殿ニ捧ケヲ　勅使拜スルノ砌祭事主宰ノ者之ヲ取リ　勅使ニ渡ス

勅使拝シ了ツヲ又幣ヲ祭事主宰ニ渡ス受取是ヲ神殿ニ納ム次ニ　勅使退出　右之通

（明治五年九月十五日太政官達）従来招魂社祭ノ節侍従ヲ以テ　勅使相勤メ候處以来式部寮官員被差遣候條此旨豫相達候也

（例祭式次第書抜萃）午前九時　勅使參向昇殿掌典補之ニ従フ此時陸海軍両大臣ハ拝殿ノ階上様側ニ掛官及宮司祠官ヲ率ヒ階段ノ下ニ奉迎ス次掌典補　御祭文ヲ　勅使ニ呈ス　次　勅使神前ニ進テ　御祭文ヲ奏ス　次　勅使神前ニ於テ御祭文ヲ宮司ニ付ス　次宮司御祭文ヲ内陣ニ納ム　次　勅使下向此時奉送奉迎ノ時ノ如シ（下略）

（明治五年九月二十日式部寮回輪）招魂社大祭ニツキ　勅使參向ノ節玉串料奉納云々御問合ノ趣承知致候此度ハ宣命ノミニテ玉串等奉納ノ義ハ無之候此段御報申入候也

（明治六年三月九日正院ヘ伺）一般祭日ノ儀ハ舊暦ノ月日ヲ捨ヒ新暦欄外ニ掲示有之候處招魂社大祭ノ儀モ右ニ準シ取計可申哉且又　勅使ノ儀ハ除神宮外不差立段御布令相成候然ル處招魂社是迄一年三度ノ大祭　勅使被差立候儀有之如何心得可申哉此段相伺候也（指令伺之通但　勅使ハ十一月祭ニ限リ被差立候條其他二度ハ兩省ニ於テ執行可致事

（明治六年三月十八日招魂社御用掛ヘ達）招魂社大祭之儀是迄正月三日五月十五日九月二十三日ト御定相成候處大陰暦被廃大陽暦頒行ニ付テハ舊暦之月日ニ比較シ自今ハ一月三十一日六月九日十一月十二日ト被定候條此旨相達候事　但　勅使ハ十一月祭ニ限リ被差立候事

東宮御使幷御奉納、附、内親王御奉納

東宮殿下亦本神社を尊崇あらせ給ひぬ、記錄の載する所によれば明治三十二年五月御使を遣はされし以來、現今に至るまで臨時大祭及春秋祭大祭毎に必ず侍從若くは武官を遣はされ、幣帛御奉納あらせらるゝこと年々絶ゆることなし、三十八年五月五日、〇臨時大祭の如きは親しく行啓御拜あらせられ、翌六日には更に御使を差

遣はされ、玉串料御奉納あり。是より先き三日にも御供物の御奉納ありき。〇東宮の未だ儲君に立ち給はざりし時御參拜あらせられしこと參照ある(ゆ謹んで附記す。)こと明治二十年五月六日、同年六月十八日、二十一年十一月六日の日記に見

内親王殿下亦皇上の大御心を承けさせ給ひ、仁慈にして淑德高く坐しますこと申すまでもなし、常宮、周宮兩殿下には日露戰役の際、痛く戰死者を哀悼し給ひて御殿内に齋場を設け親く其姓名を認め給ひ弔祭を擧げさせ給ひぬ。而して事平ぎし後、其の御染筆に係る戰死人名簿を、本神社に納めしめ給ひし御志の程こそ有難けれ。是より先き明治三十一年十一月六日及四十年五月四日の臨時大祭の節には兩殿下御成御拜の上御奉納あり。同三十九年五月四日の臨時大祭にも常宮、周宮、富美宮、泰宮、四内親王殿下御成ありて各

御奉納の事もあらせられき。竹の園生の限りなき御榮ゑと與に當社の光榮極まる所を知らず欽ず可き哉

東宮殿下御使及御奉納は左の如し。

明治卅二年五月六日　金拾五圓　東宮侍從

同　年十一月六日　同　同　武官

同　卅三年五月六日　同　同侍從　鍋島精次郎

同　年十一月六日　同　同　男爵　多久乾一郎

同　卅四年五月六日　金拾五圓　東宮武官　田内三吉

同　年十一月一日　同　同　平賀德太郎

同　年十一月六日　同　同　田内三吉

同　卅五年五月六日　同　同　中村靜嘉

同　年十一月六日　同　平賀德太郎
同　廿六年五月六日　同　伯爵清水谷實英
同　年十一月六日　同　中島資明
同　廿七年五月六日　同　黒水公三郎
同　年十一月六日　同　尾藤知勝
同　廿八年五月三日　同　田内三吉
同　廿八年五月三日　大鏡餅二臺清酒十樽
同　年十一月六日　金拾五圓　東宮武官　田内三吉
同　廿九年五月四日　東宮并妃殿下より鏡餅二臺清酒拾樽
同　年同月六日　金拾五圓　東宮武官　尾藤知勝
同　年十一月六日　同　黒水公三郎
同　四十年五月六日　同　秋澤芳馬
同　年同月同日　東宮并妃殿下より鏡餅二臺清酒拾樽
同　年十一月六日　金拾五圓　東宮侍從　本多正復
同　四十一年五月五日　東宮武官　田内三吉
同　年同月六日　同　千坂智次郎
同　年十一月六日　同　本城幹太郎
同　四十二年五月五日　同　千坂智次郎
同　年五月六日　同　子爵田村丕顯
同　年十一月六日　同　本城幹太郎
同　四十三年五月六日　同　子爵田村丕顯
内親王殿下の御奉納は左の如し

明治卅一年十一月六日　常宮　周宮　兩殿下金千正宛

同　卅九年五月四日　常宮周宮、富美宮、泰宮　四殿下各金三千正宛

同　四十年五月六日　常宮　周宮　兩殿下金三千正宛

（明治卅一年日記抜萃）十一月六日晴（上略）内親王常宮周宮兩殿下御參拜アラセラル、金各千疋　兩殿下ヨリ御奉納ニ相成ル社務所ニ御休息ノ上、御菓子ヲ宮司ヘ賜ハル（下略）

（三十九年日誌抜萃）五月四日好天氣（上略）内親王兩殿下御參拜アラセラレ、畢ヲ同時拜殿ニ參列セル將校遺族等ニ謁ヲ賜ヒ、御徒歩ニテ戰利品御遊覽アラセラレ、社務所ニ立寄ラセ給フ、

（四十年日記抜萃）四日晴天（上略）午前十一時、常宮周宮兩内親王殿下御參拜アラセラレ、御徒歩ニテ戰利品御遊覽被爲在、洋館ニ立寄ラセ給ヒテ、御休息ノ上饅頭ヲ賜ヒ、卽チ還啓シ給フ、

幣帛並祭資金

社格制定以來、例祭、祈年祭、新嘗祭等に定例の幣帛神饌料を供進せらるゝ外、〇定例の幣帛を獻られしこと、十二年以來九十餘同に及べり、本神社へ行幸又は行啓の時、或は臨時合祀の大祭に兩陛下より御幣物又は祭資料若くは、御供物料を賜はりしこと、明治七年一月二十七日行幸の際赤地青地錦各一匹を納め給ひしを始めとして、同四十三年五月五日臨時大祭執行の節御下賜金ありしまで、其數實に十三回に及べり。又例祭、祈年祭、新嘗祭等を除く外臨時に供進せられしこと八回あり。〇明治十三年五月十四日の近衛記念祭同月十七日の警視廳記念祭三十二年五月六日臨時合祀祭三十三年五月六日同上祭に金貳拾五圓づゝ二十二年二月十一日憲法發布奉告祭二十七年二月十五日の開戰奉告祭三十七年二月十日大婚二十五年祝祭三十八年十一月九日の平和克復奉告祭に金拾圓宛神饌幣帛料として納められたる之なり、

數々行幸行啓あらせられしが上に、御幣物又は御供物料をさへ供へさせられ祭資をも賜はるなど、畏しとも畏こき極なりげに天眷

の渥きこと斯の如し。所謂死して餘榮ありとは本神社祭神の謂にこそ。苟も生を皇土に稟くるもの誰か報國の志なからむ。益この聖慮に感奮して祭神の忠烈に私淑し奉らんことを念とすべきなり。

明治七年一月廿七日　●例大祭　赤地青地の倭錦各一匹
同　八年二月廿二日　●合祀大祭　御幣物料金百圓
同　十年十一月十四日　●同　上　幣帛金千圓
同　廿八年十二月十七日●臨時合祀大祭　幣帛料金貳千圓
同　廿九年五月六日　◦例大祭合祀祭　皇后陛下より御供物料金貳百圓
同　卅一年十一月六日　◦●合祀祭　兩陛下より祭資金貳千圓
同　卅四年五月卅一日　合祀祭　兩陛下より祭資金貳千圓
同　卅八年五月三日　▲臨時祭　兩陛下より祭資料金參千圓
同　卅九年五月二日　◦●合祀祭　兩陛下より祭資金貳千圓
同　四十年五月三日　◦●同　上　同　上
同　四十一年五月五日　同　上　同　上　祭資金貳千圓
同　四十二年五月五日　同　上　同　同　祭資金千五百圓
同　四十三年五月五日　同　上　同　同　祭資金五百圓

〔編者云、●ハ天皇陛下ノ行幸アラセラレシヲ示シ○ハ皇后陛下、△ハ御代拜ヲ示ス。

初メ定例幣帛神饌料ハ拾五圓ナリシカ明治三十六年ニ至リ貳拾圓トナリ、四十三年ニ至リ參給圓トナレリ。コレニ社ニ賜フノ格ナリ、御幣物或ハ御幣物料或ハ御供物料祭資料祭資金ノ稱本ニ從ヒテ妄リニ改メズ、而シテ此幣帛料ノ外宮中ヨリ青銅鳥居建立ニ壹萬五千圓、能樂堂移轉ニ壹千圓等賜ヒシ事ノ如キハ、本項ニ關セサルコトナレバ記サヽルコト勿論ナリ〕

皇族御奉納

至尊の當神社に深厚優渥なる殊遇を加へさせ給ふこと、此の如くなれば、皇族の御尊崇も亦至大なり。殊に故有栖川故小松兩宮は本神社には最縁由深く坐して、親しく祭主とならせ、神事に預り給ひしこと七回にも及ばせ給へば、祭時には供物又は供物料の御奉納も數多くあらせられき。記錄の載する所によれば、皇族の御奉納は實に明治二年八月八日、有栖川宮の金三百兩の御奉納ありしを以て嚆矢とし、以來例大祭、又は臨時大祭の際、御供物又は御供物料の御獻納年々絶えず、又屢々御參拜あり、而して四十年五月六日、大祭以降春秋例祭及臨時祭に各皇族より御供物料或は御供物奉納の光榮を荷ふこと自ら定例となれり。況して四十三年五月六日の如きは合祀祭、例祭同日なりしに、各宮よりは合祀祭に三千疋、例祭に二千疋宛の奉納さへあらせられき。夫れ陛下は天祐を享有し給ひて尊貴二なく坐しますを、本神社の爲めに叡慮を致させ給ひ金枝玉葉とます各宮殿下にも亦斯くの如く尊崇あらせらる。嗚呼、わが祭神は無比の尊位に立ち坐せりと謂ふも過言に非ざるべし。忠誠克く此尊位を贏ち得とせば、顯幽境を異にすとも何の恨むべき事かあらむ。○皇族の御參拜は大凡祭典毎に之れ有り、今之を記し奉らず、御奉納は記錄に存するものを掲載す、猶多くの脫漏あらんことを恐る。

明治二年八月八日		金參百兩	有栖川宮
同	年五月十五日大祭	金壹封	同
同	三年五月五日同	神酒壹樽	同
同	年同月同日同	柏餅二臺	東伏見宮

同　年九月廿三日　同　神酒壹樽　有栖川宮
同　年同月廿四日　同　柿　壹臺　東伏見宮
同　四年一月三日　同　大鯛二尾　有栖川宮
同　年五月十七日　同　金壹封　同
同　五年五月十五日　同　神酒料金五百疋　同
同　年九月廿三日　同　同　同
同　六年一月廿七日　同　金五百疋　同
同　年六月九日　同　同　東伏見宮
同　年同月同日　同　同　有栖川宮
同　年十一月六日　同　同　東伏見宮
同　年同月同日　同　同　有栖川宮
同　七年一月廿七日　同　同　東伏見宮
同　年同月同日　同　同　有栖川宮

同　年七月四日　同　同　有栖川宮
同　年同月同日　同　同　東伏見宮
同　年八月廿八日　臨時大祭　同　同
同　年十一月六日　大祭　同　同
同　年同月同日　同　同　東伏見宮
同　八年一月廿七日　同　同　有栖川宮
同　年同月同日　同　同　東伏見宮
同　年二月廿二日　臨時大祭　同　同
同　年七月四日　大祭　同　金壹封　有栖川宮
同　年同月同日　同　同　東伏見宮
同　年十一月六日　同　金五百疋　有栖川宮
同　年同月同日　同　同　東伏見宮
同　九年一月廿七日　同　同　同

同	年同月同日同	金壹封	有栖川宮
同	年七月四日同	同	同
同	年同月同日同	金五百正	東伏見宮
同	年十一月六日同	金壹封	有栖川宮
同	年同月同日同	金五百正	東伏見宮
同	十年一月廿七日同	金壹封	有栖川宮
同	年同月同日同	金五百正	東伏見宮
同	年七月四日大祭	金壹封	有栖川宮
同	年十一月十四日臨時大祭	饅頭二臺	同
同	年同月同日同	鰹節二臺	東伏見宮
同	年同月同日同	鰹節壹臺 清酒參樽	伏見宮
同	十一年一月廿七日大祭	金五百正	東伏見宮
同	年九月廿三日同	金六百正	有栖川宮

同	年同月同日同	金五百正	東伏見宮
同	十二年一月廿七日同	金壹封	同
同	年六月廿五日臨時大祭	金五百正	同
同	十三年五月六日大祭	同	同
同	年五月十四日近衞記念祭	同	同
同	年同月同日同	同	北白川宮
同	年同月同日同	大鏡餅一重	有栖川宮
同	年十一月六日大祭	金五百正	東伏見宮
同	十四年五月六日同	同	同
同	十九年五月六日大祭	金貳千正	有栖川宮
同	年同月同日同	金五百正	小松宮
同	廿年五月六日同	金貳千正	有栖川宮
同	年同月同日同	金五百正	小松宮

同　廿一年五月六日同　金貳千正　有栖川宮
同　年同月同日同　金五百正　小松宮
同　廿二年五月六日同　金貳千正　有栖川宮
同　年同月同日同　金五百正　小松宮
同　年十一月六日大祭　同　同
同　廿三年五月五日同　金貳千正　有栖川宮
同　年同月同日同　金五百正　小松宮
同　年十一月六日同　同　同
同　廿四年五月六日同　金貳千正　有栖川宮
同　年同月同日同　金壹千正　小松宮
同　年十一月六日同　同　同
同　廿五年五月五日同　同　同
同　廿六年五月六日同　金五百正　同

同　年十一月六日同　同　同
同　廿七年五月六日同　金貳千正　有栖川宮
同　年同月同日同　金五百正　小松宮
同　年十一月六日同　同　同
同　廿八年五月六日同　同　同
同　年十一月六日同　金五百正　同
同　廿年十一月六日同　同　同
同　廿一年十一月五日臨時大祭　金四萬正宛　有栖川宮
同　年同月同日同　金貳萬正宛　久邇宮

御鋏併及目錄
小松宮
閑院宮
伏見宮
閑院宮
小松大宮
華頂宮
小松若宮

同　卅二年五月六日例大祭

同　年十一月四日臨時祭

金五百正宛

北白川宮　山階宮　梨本宮

小松宮　華頂宮　山階宮

金貳千正宛

閑院宮　伏見宮　賀陽宮

久邇宮　山階宮　梨本宮

華頂宮　北白川宮　閑院宮

同　卅四年十一月一日臨時大祭

金壹萬貳千正宛

同　年同月同日同

金參萬正宛

同　年同月六日例大祭

同　卅六年十一月六日同

同　年同月同日同

御鋏餅玉串料

金貳千正宛

伏見宮　有栖川宮　小松宮

各皇族

金五百正宛

閑院宮　伏見宮

華頂宮　山階宮

同　卅七年五月六日同

金貳千正宛

同　年同月同日同

金五百正

同　年十一月六日同

金貳千正宛

同　年同月同日同

金五百正宛

有栖川宮　伏見宮　閑院宮

華頂宮　伏見宮　閑院宮

山階宮　華頂宮　山階宮

同　卅八年五月五日臨時大祭　銚子十臺　清酒五樽

同　年十一月六日同　金貳千正宛

同　卅九年五月五日臨時祭　清酒五樽　銚子十三重

同　年十一月六日例大祭　金貳千正宛

同　四十年五月五日臨時祭　紅白絹五疋　銚子十四重

各皇族

小松宮	皇族十三宮
伏見宮	皇族十三宮
閑院宮	皇族十四宮
東伏見宮	
華頂宮	
山階宮	
賀陽宮	
久邇宮	
梨本宮	
北白川宮	

この以後毎年例祭臨時祭に各宮より御奉納あらせらるゝこと定例となりて變ることなければ之を略す。

〔編者云、遂一調査ヲ加フト雖モ、其徴スベキ記錄ナキガタメニ記載スルコト能ハザルアリ、明治十五年ヨリ十八年マデノ如シ、其他二十九年、三十三年、三十五年ノ如キモ亦同ジ〕

特別寄附金

明治廿七八年、廿三年、廿七八年の事件は、東洋平和の爲め將た人道表明の爲め止むことを得ざるに起り、遂に國威宣揚の實を擧げたる未曾有の壯擧にして、其丕績洵に萬世不滅なりと云ふべし、されば其終局を告ぐるや、該事件に關して殞命せる盡忠殉國の士の合

祀仰出され、國庫より特別の寄附金ありて一大祭典を擧行せられぬ。此時に方りて皇室よりも祭資金を下し賜へるのみならず、恐くも天皇、皇后兩陛下の行幸、行啓を始め奉り、東宮殿下の行啓、各皇族の御成あらせられ、文武の大官參集して滿腔の熱誠を表せらる。維新已來幾多の事變なきに非らずと雖も、概して事、國内に起り正邪順逆の別こそは有れ。之を要するに同胞の鬩爭に外ならず。後の戰役の外國に對し、國家の興廢を賭して行はれしものとは大に異なり。素より何れも皆王事に勤め國難に殉ひしものなれば、祭神の勳功に至りては彼此逕庭あることなしと雖も、我國勢の發展と神社經濟の現狀とは、これが祭典を擧ぐるに當りて、特に祭資を仰がざるを得ず。是れ特別寄附金の交附ある所以なり。今や全國に亘りて遺族あらざる鄉村なく、翕然として國民人心の崇敬を一にし、本社は實に志氣涵養の中樞となれり。これ國家として重きを置くこと斯の如くなる所以なるべし。爾來臨時祭毎に特別寄附金の交附を受けしこと左の如し。

明治廿八年十二月	臨時大祭費	金壹萬圓
同　廿一年十一月	同	金壹萬五千圓
同　廿四年十一月	同	金壹萬五千圓
同　廿八年五月	同	金五萬圓
同　廿九年五月	同	金六萬五千圓
同　四十年五月	同	金拾五萬圓

但、コノ内三萬五千圓ハ祭典費ニ宛テ、殘額ハ戰時記念武器收容スル爲メ遊就館增築ノ資ニ宛テラル、

同四十一年五月　同祭典費　金壹萬圓

同四十二年五月　同　金八千圓

同四十三年五月　同　金參千五百圓

（明治三十九年四月十二日寺內陸軍大臣ヨリ宮司へ達）本年五月靖國神社　臨時合祀大祭施行ニ付特別寄附金六萬五千圓陸軍會計監督部ヨリ受領スベシ

（明治四十一年四月七日寺內陸軍大臣ヨリ宮司へ達）

一金壹萬圓

右ハ本年五月合祀可相成臨時祭典費宛別途受領スベシ

（編者云達文大凡斯ノ如クナレバ、其一二ヲ擧ゲテ悉ク之ヲ揭ゲズ）

（又云、明治十年合祀祭々費モ交附セラレシナリ、當時ノ書類ニ招魂社臨時大祭費之義ニ付伺　一金一萬五百七十七圓九十九錢九厘、右ハ西南ノ役戰死軍人軍屬招魂臨時大祭被爲行候ニ付諸費本行ノ通相成候條非常費ノ內ヨリ仕拂相成候樣致度此段相伺候也

明治十年十二月二十八日第五局長代理田中光顯

陸軍卿山縣有朋殿　（朱書伺ノ通十一年一月二十四日）

諸參拜　官員、軍隊、遺族、庶人

官員の參拜は、明治二年の達に依り以來例大祭、臨時祭に、禮服着用のものは參拜を許され、又諸局寮司臺等より、勅奏判各級に付き各一名の總代を出し不參者は秘史局に屆出でたり。嚴重なること斯の如し。以て最初より國家の待遇の異なることを推知すべし。而して例大祭、臨時祭には陸海軍武官參列拜禮し、臨時大祭に際しては時に廣く諸官員の參列拜禮あり。（服大祭には陸軍は正裝、海軍は正服とす。）○現今參集武官の服裝は、由官は淸祓及直會式に在りては陸軍は軍裝、海軍は通常禮

軍隊參拜は、明治二年六月廿九日大砲隊、遊軍隊第三、第四、第五各番大隊、松代、久留米、和歌山、土州各藩小銃隊の參拜に始まり。○當日は、これら參拜者

の爲に神酒を頒ちたり爾來例祭及臨時祭毎に必ず各兵を參拜せしめらる。同二年十一月廿三日には鹿兒島藩知事大隊大砲五門を引率して參拜し、五年五月十三日の大祭には兵隊參拜整列順序を達せられ、同年九月十九日にも同上の達あり。同六年十一月六日、同七年一月、同八年七月四日海兵の參拜のこと見ゆ。特に卅九年、四十年臨時大祭の如きは、横須賀在艦の海兵遠く來りて參列せり。斯くて十年十一月八日の伺に、十二月臨時招魂祭の節警衞として東京鎭臺歩兵一中隊出隊のこと、諸兵參拜の事等を案じ指令あり。以來例大祭臨時合祀祭には必ず、在京の兵隊を參拜せしめられ今に變ることなし。其服裝の如きも陸軍服裝規則を以て定められ、大祭日には單獨參拜する時は正裝、隊伍をなして參拜する時は軍裝を以てす。而して明治七年一月同八年二月同十年十二月陛下行幸あらせられし際、恐くも神殿にて暫く諸兵の拜式を天覽あらせられしは、蓋し異數なるべし。その光景や劍芒一揮の下に隊伍畫一、吹奏する所の國の鎭めの歌曲澄み渡る時萬衆肅然として自ら容を改め、俛首低回感慨措くこと能はざらしむるものあり。

遺族參拜は、本神社創立の時より之れ有り。國家擁護の神靈を待つに莊重なる、また遺族に對して悃篤を極むるは自然の數にして、厚薄あるべきにあらず。一は遺烈を永遠に保持し、一は慰安發奮の機を與ふ。故に例大祭、臨時祭に當りては、邊陬僻遠の地より來集參社するものをして、是の殊遇を目睹して祭神、遺族與に共に聖恩の辱なきに感泣し、因て以て慰安と崇敬の念とを湛へしむ。殊に合祀祭

執行に際しては該遺族に對し、管轄廳より特に鄭重なる訓達を下し、其參拜するや。先づ本殿に導き神酒神菓及記念品等を頒ち、且つ常人には容易く許されざる濱離宮御苑、東宮御所、御苑等拜觀の榮を與へられ、其他名園、陳列館、興行物等を觀覽せしめ、數十の掛員之れを指導して斡旋欵待至らざるなし。

庶人參拜は、諸官員參拜と同じく明治二年より差許さる。其祭時に方りてや。在京の陸海軍は勿論、其他官衙學校にも休暇を與へ參拜せしめらるゝを以て、賽客雲集して引きも切れず。赤十字社救護班警察署の出張、消防夫の派出あり。其雜沓名狀すべからず。學校團體の參拜としては學習院最も深き緣故を有す。これ華族は皇室の藩屏として特に本社を崇尊するに由るなるべし。

外人の參拜するもの亦甚多し。今一々記するに遑あらず。其一二を掲ぐれば、明治廿年九月廿三日暹羅皇弟テウワオンクモ親王社參あり。英人某は樹うるにセダルス樹を以てし、獨逸皇族カールアントン殿下は三十八年五月金五百圓を、韓國義親王は參拜の上金百圓を奉納せられたり。嗚呼國光の輝く所以を思ふもの、誰か祭神の遺烈を欽慕敬仰せざるものあらむ。

（明治二年六月二十三日達）來ル二十九日八字於招魂場祭奠被仰付候ニ付參議始メ六官諸官員參詣可爲勝手事　但シ諸人參拜被差許候事

（明治二年七月一日三條右大臣參拜ノ際奉讀祝詞）八十日々波雖有今日乃活日乃足日曩祭日止定豆令祭賜布去年今年　皇軍爾死禮留輩乃靈乃前爾白左久汝等波靈幸神乃御代從櫻木乃彌繼々爾天下知食奴留我　天皇大御代止共爾久志久言繼豆臣太留人乃鑒止而須押日命乃言立乃海行波水濱屍山行波草生屍大王乃上爾古賀死米乃其事業尊今乃現爾取行比豆所者變連乎毛心波一爾　皇軍爾役立志豆賊徒等

乎討牟留其戰爾痛手負豆命果豆奴留輩南禮波上毛下毛憐乃靈與傳乃靈止言比慕比思比哀美畏美祭留此祭乎受辱美千世萬世天翔豆不動不變　大御世乃御爲止爲爲眞武靈止賢思比慕布爾南武吾身其時志毛監察使乃　勅旨奉豆此吾妻仁來豆東北乃軍事哀母親志久閉其軍人乃難苦志趣哀毛知爾志事爾禮婆今其事共乎思出豆殊更爾哀志久殊更爾慕志久思比天今此祭乃場爾詣來豆拜美齋久事爾南武輔相從一位右大臣藤原朝臣實美　明治二年己巳七月朔日

〔同四年十二月二十七日達〕來ル正月三日招魂社大祭ニ付同日朝第六時諸官員無遲參參集可有之事

〔明治四年九月二十三日招魂社祭兵隊神拜式〕來ル二十三日招魂社祭ニ付諸兵隊同日朝第七時迄ニ九段坂ノ溝際ヨリ牛藏御門邊迄順次ニ整立シ同時官員神拜ノ後每隊順次ニ神前ヘ隊ヲ立テ拜禮可致候事但往來通行ノ妨ニ不相成樣整列スヘシ　隊長ハ捧劍　隊附士官ハ劍ヲ肩ニス步兵ハ捧銃騎兵ハ劍ヲ肩ニス神拜畢テ順序ニ歸營可致事　尙諸隊拜禮後砲隊モ第七字牛同所ヘ相揃拜禮可致事

〔明治四年十二月二十七日達〕來ル正月三日招魂社大祭ニツキ朝第六字諸官員無遲參參集可有之事

〔編者云、コノ達ハ新年拜賀式達書中ニ駢記ス、今割テ載ス〕

〔明治五年五月三日達〕來ル七日招魂社遷宮ニ付諸局寮司臺勅奏任官各一員判任官各一員爲總代夜十一時禮服着用參集可致事但シ其他官員參拜可爲勝手事

〔明治五年五月十三日達〕來ル十五日ヨリ招魂社大祭ニ付キ官員兵隊參拜順序左之通、一、十五日朝第六時判任以上禮服着用可致參集事但シ不參ノ向ハ秘史局ヘ屆出ッヘシ

一、同日朝第七時近衞諸隊並兵學寮附諸隊共同社競馬場並田安御門濠端ヨリ牛藏御門邊迄隊號ノ順序ヲ以テ往來通行ノ妨ニ不相成樣圖面之通整列之事　但隊順ハ步騎砲トス　一、十六日朝第七時東京鎭臺諸兵隊參拜ノ順序ハ前同斷　一、拜禮ノ式ハ正月大祭ノ節同樣タルヘキ事　一、拜禮相濟候隊ハ順序ニ引取可申候事

〔明治五年五月十四日達〕明十五日招魂社大祭ニツキ等外附屬等參拜可爲勝手次第事　但到任以上參拜之儀ハ昨日相達置通

〔明治五年九月十九日達〕來ル二十三日招魂社大祭ニ付諸官員同日朝第六時無遲參禮服着用同社ヘ參集可有之此段相達候事追テ不快ノ輩ハ秘史局ヘ可屆出等外以下ハ參拜勝手次第タルヘシ

〔明治五年九月十九日近衞局東京鎭臺兵學寮ヘ達〕來二十三日、二十四日兩日招魂社大祭ニ付キ諸兵隊參拜順序左ノ通二十三日朝第六時近衞諸隊幷兵學寮附諸隊

共同社競馬場ヨリ田安御門脇濠端ヨリ半藏御門邊迄隊號ノ順序ヲ以テ往來通行ノ妨ニ不相成樣整列ノ事但シ隊順ハ歩騎砲トス、拜禮ノ式ハ當正月、五月大祭ノ節同樣タルヘキ事、二十四日朝第六時東京鎭臺諸兵隊參拜ノ事、但整列參拜ノ順序共前同斷、拜禮相濟次第順序ニ引取可ク候事、右之趣相達候事

（明治十年十一月八日第一局伺）第九百五十八號 來ル十三日ヨリ十五日迄臨時招魂祭々式別冊ノ通取調候間御評議有之度且勅使參向並諸官員兵隊參拜等左ノ通御決定相成度此段相伺候也

別冊　一、十二日午後第六時招魂式ノ節本省各局並諸官廨ヨリ勅奏判官員各一人總代トシテ出頭ノ事　一、右同時警衛トシテ東京鎭臺歩兵一中隊出張ノ事　一、十三日午前第九時勅使參向並本省各局諸官廨ヨリ勅奏判官員各一人總代トシテ出張ノ事　一、十四日午前第九時諸官員並諸兵隊參拜ノ事　一、十五日午前第九時本省各局諸官廨ヨリ勅奏判官員各一人總代トシテ出頭ノ事　一、右十二日ヨリ十六日迄祭式ノ都度海陸軍樂隊奏樂ノ事　伺之通

（明治十二年十一月一日東京部内へ達）來ル十一月六日靖國神社例大祭ニ付同日午前第九時武官ハ正服文官ハ大禮服着用同社へ參集可致此旨相達候事但所勞等ニテ不參ノ輩ハ各所管長官へ届出所管ヨリ日報ヲ以テ報告スヘシ等外以下參拜可爲勝手候事

（明治十年十一月十二日坊城式部頭ヨリ達）來ル十四日招魂祭ニ付午前第十一時ヨリ午後第三時迄參拜勅奏任官幷廓香間祗候詰等、十五日正午十二時迄參拜、華族

（明治十七年十月二十七日達丙第廿九號東京陸軍一般へ）今般達乙第九十三號ヲ以テ相達候通來ル十一月五日午後第六時招魂式執行ニ付本省各局幷ニ諸官廨勅奏任官ノ内一名判任官一名宛總代トシテ正服着用同時靖國神社へ出場可致此旨相達候事

寶物

寶物ことしては明治七年一月廿七日行幸あらせられ大和錦及び宸筆の御製を賜はりしを始めとし、八年二月行幸の際御供へあらせられし金百圓を以て調製奉納したる銅燈籠壹對、同十年十一月行

幸の際の幣帛料金千圓を以て製したる楕圓形臺神鏡。○現今神殿正面に据う同

四十二年四月廿七日常宮、周宮兩殿下よりの奉納に係る御染筆戰死者名簿○此事は皇族奉納物の項に詳かなり等あり。これらは皇室の御寄附、若くは御寄附金を以て製造せる萬世記念の什物にて、皆尊重に格護せざるべからざるものなり。此外明治二年以來各宮家より、又は人民より寄獻奉納の刀劍、扁額、其他の什寶物、其數實に仟を以て數ふべし。これらの什寶物は陸海軍より交附の武器、及神社購入の物品と共に、總て附屬遊就館に收藏し、種類により部門を分ち公衆に觀覽せしむることゝなれり。同館陳列品に於ける其內容を詳記せむことは本誌の能く盡すべきにあらねば、別に編錄する所あるべし。

一赤地靑地大和錦各壹卷。明治七年一月廿七日行幸の際納めらるゝ御祭文六十五卷、明治二年九月以後例祭、臨時祭等に勅使の納められしもの。

一御製額面。竪一尺二寸橫一尺六寸三分　明治七年二月御宸筆御製一首を賜ふ、因て同年二月伺を經て扁額に製することを許され、之を製し正殿楣間に揭ぐ。

一金燈籠壹對。明治八年二月行幸の際幣帛料として御供の金百圓を以て、永世に記念せんとして、同年六月出願し、許可を得て之を製造す。

一橢圓形臺神鏡。明治十年十一月行幸の時幣帛料として下賜せられし金千圓を以て製造し、十一年十月二十六日之を神前に据う。

一戰死者名簿四帖。明治三十七八年役に戰歿せし士卒の姓名、戰死

地、同月日等を常宮周宮兩殿下の御自筆あらせられしものにて、
四十二年四月二十七日奉納せらる。

（明治七年二月九日陸軍省通牒）御宸筆之額面製造ノ義申出同日ヨリ後十日ニ出
來相成候事

（明治四十二年四月二十七日常宮周宮御養育主任佐々木伯爵ヨリノ宮司ヘノ書面）
一日露戰死者名簿四帖裝幀編
右ハ常宮周宮兩殿下ヨリ御社ヘ御納被爲遊候條此段申進候也

（御靈簿由緒記）コレノ名簿ハシモ、云巻モ文ニカシコキ珍ノ内親王常宮、周宮二柱
ノ御前ノミ、ヅカラ書カセ給ヒテ、納メサセ給ヒシモノニナム、イデ後ノ爲メニ其
由一言コヽニカキツケテム。
抑モ〳〵、兩柱内親王ハシモ、雙槻ノ相並ヒマシテ令德高ク聞エ給ヒ、蒼生ヲ惠ミ給
フ御心深ク大坐シマスマニ〳〵、往シ明治三十七八年ノ戰役起レリシ時ニ、其戰場
ニ身罷ル人々ノ多カリケレバ、甚ク憐ミ給ヒテ相謀リテ思ホシメサクハ、氏早キ時
ニ君ノ御爲國ノ爲メニ身ヲモ家ヲモ顧ミナクテ、水濱屍草生屍ト仕奉ルコトハ日
本ノ倭國ノ益良雄ノ道ニテ、ヤガテ其身罷リシ人々ノ魂ハ靖國神社ニ齋祀ラシメ

給フ御制ニハ有レドモ、暫時ノ間ダモ其魂ヲ放ラシオカムハ、イブセクハシタナキ
ワザナリケリト思ホシメシテ、御自ラ靈璽ニトテ書キ認メサセ、大殿ノ奥床ヲ假宮
ト定メテ朝夕ニ菅ノ根ノネモゴロニ齋ヒ祭ラセ給ヒケルヲ、サテ後ニ、戰勝チテ天
下平ラギ御制ノマニ〳〵伊蘇シキ御魂ヲバ此ノ神社ニ合祀ラシメ給ヒヌ。カヽルル
間ニ兩柱ノ内親王ニハメデタクモ所繼セ給ヒテ、高輪ノ御殿ヲモ閉ヂサセ給ヒヌ、
ルヲ以テ、此名簿四帖ニ假宮ニ用キ給ヒシ紫ノ御幕ヲモソヘヲ、今歳四月二十七日
ニ奉納シメ給ヒシニナム、阿波禮ゴレノ名簿ハヤ、萬世ニ傳ヘ行クベキ甘シ御寶底
寶ト、神殿ノ内ニ深ク納メ奉リツルヲ、神靈タチモイカニ忝ナミ喜ヒ給ヒナムヤ、穴
賢、穴畏明治四十二年八月一日宮司賀茂百樹

祭主

初め招魂社と稱せし時は別に神官を置かず、例祭の御祭文に、武官
の人等に命せて種々の物を備へ奉りて、齋奉らせ給ふと宣らせ給

へるが如く、陸海兩省より官員參向して祭主を奉仕し、祝詞を申し○或は祝詞師を置き、傍より之を讀ましめしことあり、祭儀を擧げたりしなり。例大祭及臨時大祭には、卿若くは將官以上のもの參向し、招魂式には將官若くは佐官、清祓直會祭及中祭には佐尉官、月並祭には、始めは出張の少錄をして奉仕せしめしが、明治六年六月以後は主として佐尉官を以て之に充てらるゝ等の事ありき。而して大祭、及臨時合祀祭招魂祭の祭主は明治八年以後、陸海兩省隔番に仰付らるゝ事となりて、清祓直會祭等も其當番官省より相當の官員を派して、祭主たらしめられき。斯くて明治十二年六月十四日社格制定せらるゝや、官員の祭主たる事は止められ、祭典は總て神官の長官をして奉仕せしむる事に定められたり。されど祭典の當日には兩省より掛官出張して式

場に參列し、拜禮等凡て變動なかりしを、同二十三年五月一日より中小祭に限り其參列を中止せられぬ。○祭典掛員の項參照かくて祭儀は宮司の專掌する所となりたれども、尚故儀を存して陸海兩大臣○始は卿は春秋例祭又は臨時祭に當りては玉串を奉奠する事となりて、明治十二年以來今日に至る迄變ることなし。但し春の例祭に於て海軍大臣先づ玉串を奉る時は、秋の例祭には陸軍大臣先づ奉るを例とす。これ招魂社當時隔番に祭主を勤めし慣例に因りたるなり。其祭主名は左の如し。

大祭祭主

明治二年六月廿九日大祭

軍務官知官事　仁和寺嘉彰親王

軍務官副知官事　大村益次郎

同　年九月廿二日大祭○廿二日天長節に付一日繰上廿一日に行はる　兵部卿　仁和寺嘉彰親王
明治三年正月三日大祭　兵部卿　嘉彰親王
同　年五月十五日大祭　兵部卿二品　有栖川熾仁親王
同　年九月廿三日大祭　兵部卿二品　熾仁親王
明治四年五月十五日大祭　兵部卿　熾仁親王
同　年九月廿三日大祭　兵部大輔　山縣有朋
明治五年正月三日大祭　兵部大輔　山縣有朋
同　年五月七日正遷宮　陸軍大輔　山縣有朋
同　年五月十五日大祭　陸軍大輔從四位　山縣有朋
同　年九月廿三日大祭　陸軍大輔從四位　山縣有朋
明治六年一月卅一日大祭　陸軍大輔從四位　山縣有朋

同　年六月九日大祭　陸軍少輔正五位　西鄉從道
同　年十一月六日大祭　陸軍大輔正五位　西鄉從道
明治七年一月廿七日大祭　陸軍中將參議陸軍卿正四位　山縣有朋
同　年七月四日大祭　陸軍中將參議陸軍卿正四位　山縣有朋
同　年八月廿八日臨時大祭　陸軍少將正五位　野津鎭雄
同　年十一月六日臨時大祭　陸軍中將參議陸軍卿正四位　山縣有朋
明治八年一月廿七日大祭　海軍少將兵學頭正五位　中牟田倉之助
同　年二月廿二日臨時大祭　海軍中將海軍大輔從四位　川村純義
同　年七月四日臨時大祭　陸軍中將參議陸軍卿正四位　山縣有朋
同　年十一月六日大祭　海軍中將海軍大輔從四位　川村純義
同　九年一月廿七日臨時大祭　陸軍少將參議陸軍少輔正五位　大山巖

明治十二年一月廿七日大祭

〔編者云、明治四年一月三日大祭ノ祭文人名ハ記錄逸スルヲ以テ暫ク之ヲ缺ク〕

（招魂祭、清祓、直會祭、月並祭及臨時諸祭々主人名）

明治五年五月六日	新殿祭	陸軍少將　小澤武雄
同　年五月八日	饗宴祭	陸軍中佐　小澤武雄
同　年九月廿二日	天長節及清祓	同　〃　同
同　年十二月一日	煤掃祭	同　同　同
明治六年一月卅日	清祓	海軍少將　眞木長義
同　年二月一日	直會	海軍大佐　林　清康
同　年六月八日	清祓	陸軍中佐　小澤武雄
同　年六月十日	直會祭	陸軍少佐　滋野清彦
同　年六月卅日	月次祭及大祓	同　同　同
同　年七月九日、十二日、廿一日、八月九日、十二日	月並祭	同　同　同
同　年八月廿一日、九月六日	同　同	陸軍少佐　葛岡信綱
同　年九月六日	祭日推歩改正奉告祭	同　同
同　年七月四日大祭		海軍中將　川村純義
明治十年一月廿五日臨時大祭		海軍大輔從四位　川村純義
同　年一月廿七日大祭		陸軍少將從四位　三浦梧樓
同　年七月四日大祭		海軍少將正五位　中牟田倉之助
同　年十一月六日大祭		陸軍少將正五位　井田讓
同　年十一月十三日臨時大祭		海軍少將正五位　中牟田倉之助
同　年十一月十四日同		陸軍中將參議陸軍卿正四位勳一等　山縣有朋
同　年十一月十五日同		陸軍大將參議定官大勳位　熾仁親王
明治十一年一月廿七日大祭		海軍中將參議海軍大輔　川村純義
同　年七月四日		陸軍中將參議陸軍卿正四位勳一等　山縣有朋
同　年九月廿四日大祭		海軍中將參議海軍卿正四位勳一等　川村純義
同　年十一月六日大祭		陸軍少將正五位勳二等　野津鎭雄
		海軍中將參議海軍卿正四位勳一等　川村純義

同	年九月十七日	新嘗祭遙拜式
同	年九月廿、七日、十月四日、六日、廿七日	月並祭
同	年十一月三日	天長節
同	年十一月五日	清祓
同	年十一月七日	直會祭
同	年十一月廿三日	新嘗祭
同	年十一月廿七日	月並祭
同	年十二月六日	同
同	年十二月廿五日	煤播祭
同	年十二月廿七日	月並祭
同	年十二月卅一日	大祓
同	七年一月一日	新年祭
同	年一月三日	元始祭
同	年一月四日	月並祭
同	年一月六日	清祓
同	年一月廿六日	直會祭
同	年一月廿八日	

同	同	
同	同	
同	同	
海軍少將 眞木長義		
海軍大佐 林 清康		
陸軍少佐 葛岡信綱		
同	同	
陸軍中尉 谷田義直		
同	同	
同	同	
陸軍少佐 葛岡信綱		
陸軍中尉 谷田義直		
同	同	
同	同	

同	年一月卅日	孝明天皇遙拜式
同	年二月四日	月並祭
同	年二月十一日	紀元節遙拜式
同	年二月廿七日、三月四日、六日、廿七日	月並祭
同	年四月三日	神武天皇遙拜式
同	年四月四日、六日、廿七日、五月四日、六日、廿七日、六月四日	月並祭
同	年六月六日	同
同	年六月廿七日	同
同	年六月卅日	御製額奉揭奉告祭
同	年	大祓
同	年七月三日	清祓
同	年七月五日	直會
同	年七月六日、廿七日、八月四日、六日、廿七日	月並祭
同	年八月廿七日	清祓
同	年同夜	招魂祭
同	年八月廿九日	直會

同	同	
同	同	
陸軍少佐 葛岡信綱		
陸軍中尉 谷田義直		
同	同	
陸軍少佐 葛岡信綱		
陸軍中尉 谷田義直		
同	同	
陸軍大佐 吉澤直行		
陸軍少佐 葛岡信綱		
陸軍中尉 谷田義直		
同	同	
陸軍少將 野津鎮雄		
陸軍少佐 葛岡信綱		

同	年九月六日	月並祭	陸軍大尉　谷田義直
同	年九月十七日	神嘗祭遙拜式	同　同
同	年十一月廿七日、十月四日、六日、廿七日	月並祭	同　同
同	年十一月三日	天長節	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年十一月四日	月並祭	陸軍大尉　谷田義直
同	年十一月五日	清祓	同　同
同	年同夜	招魂祭	陸軍大佐　小澤武雄
同	年十一月七日	直會	陸軍大尉　谷田義直
同	年十一月廿三日	新嘗祭	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年十一月廿七日、十二月四日、六日、廿七日	月並祭	陸軍大尉　谷田義直
同	年十二月廿五日	煤掃祭	同　同
同	年十二月卅一日	大祓	同　同
同	八年一月一日	新年祭	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年一月三日	元始祭	陸軍大尉　谷田義直
同	年一月四日	月並祭	同　同
同	年一月廿六日	清祓	海軍少將　直木長義
同	年一月廿八日	直會	海軍大佐　林清康
同	年一月卅日	孝明天皇遙拜式	陸軍大尉　谷田義直
同	年二月四日、六日	月並祭	同　同
同	年二月十一日	紀元節遙拜式	同　同
同	年二月廿一日	清祓	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年同夜	招魂祭	陸軍少將　谷　干城
同	年二月廿三日	直會	陸軍大尉　谷田義直
同	年三月四日、六日、廿七日、廿七日、廿七日	月並祭	同　同
同	年四月三日	神武天皇遙拜式	同　同
同	年四月四日、六日、廿七日、五月四日	月並祭	同　同
同	年五月六日、廿七日	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年六月四日、六日、廿七日	同	陸軍大尉　谷田義直
同	年六月卅日	大祓	同　同
同	年七月三日	清祓	同　同
同	年同夜	招魂祭	陸軍大佐　小澤武雄
同	年七月五日	直會	陸軍大尉　谷田義直

同	年七月六日、廿七日	月並祭	
同	年八月四日、六日、廿七日、九月四日、六日	同	
同	年九月十七日	神嘗祭遙拜式	
同	年九月廿七日	月並祭	
同	年十月四日	同	
同	年十月六日、廿七日	同	
同	年十一月三日	天長節	
同	年十一月四日	月並祭	
同	年十一月五日	清祓	
同	年十一月七日	直會	
同	年十一月廿三日	新嘗祭	
同	年十一月廿七日、十二月四日、六日、廿七日	月並祭	
同	年十二月廿五日	煤拂祭	
同	年十二月卅一日	大祓	
閏	九年一月一日	新年祭	
同	年一月三日	元始祭	
同	年一月四日	月並祭	
同	年一月六日	清祓	
同	年一月廿六日	招魂祭	
同	年同夜	直會	
同	年一月廿八日	孝明天皇遙拜式	
同	年一月卅日	月並祭	
同	年二月四日、六日、廿七日、三月四日、六日、廿七日	紀元節	
同	年二月十一日	神武天皇遙拜式	
同	年四月三日	月並祭	
同	年四月四日	同	
同	年四月六日	同	
同	年四月廿七日、五月四日、六日	同	
同	年五月廿七日	同	
同	年六月四日、六日、廿七日	同	
同	年六月卅日	大祓	
同	年七月三日	清祓	
同	年七月五日	直會	

陸軍少佐	葛岡信綱		
陸軍大尉	谷田義直	同	同
同	同	同	同
陸軍少佐	葛岡信綱		
陸軍大尉	谷田義直		
陸海少佐	葛岡信綱		
陸軍大尉	谷田義直		
海軍少將	赤松則良		
海軍大佐	林 清康		
陸軍少佐	葛岡信綱		
陸軍大尉	谷田義直	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同

同	年一月四日六日	月並祭	
同	年一月廿六日	清祓	
同	年同夜	招魂祭	
同	年一月廿八日	直會	
同	年一月卅日	孝明天皇遙拜式	
同	年二月四日、六日、廿七日、三月四日、六日、廿七日	月並祭	
同	年二月十一日	紀元節	
同	年四月三日	神武天皇遙拜式	
同	年四月四日	月並祭	
同	年四月六日	同	
同	年四月廿七日、五月四日、六日	同	
同	年五月廿七日	同	
同	年六月四日、六日、廿七日	同	
同	年六月卅日	大祓	
同	年七月三日	清祓	
同	年七月五日	直會	

同	同	陸軍少佐	葛岡信綱
同	同	海軍少將	伊東祐麿
同	同	陸軍少佐	葛岡信綱
同	同	陸軍大尉	谷田義直
同	同	同	同
同	同	陸軍少佐	葛岡信綱
同	同	陸軍大尉	谷田義直
同	同	陸軍少佐	葛岡信綱
同	同	陸軍大尉	谷田義直
同	同	陸軍大尉	谷田義直
同	同	海軍少將	中牟田 倉之助
同	同	海軍大佐	仁禮景範

同	年七月六日	月並祭
同	年七月廿七日、八月四日、六日、廿七日、九月四日、六日、廿七日	同
同	年九月十七日	神嘗祭遙拜式
同	年九月廿七日、十月四日、六日、	月並祭
同	年十月廿七日	同
同	年十一月三日	天長節
同	年十一月四日	月並祭
同	年十一月五日	清祓
同	年十一月七日	直會
同	年十一月廿七日	月並祭
同	年十二月四日	同
同	年十二月廿五日	煤拂祭
同	年十二月廿七日	月並祭
同	年十二月卅日	大祓
同	年十一月一日	新年祭
同	年一月三日	元始祭

陸軍少佐	葛岡信綱
陸軍大尉	谷田義直
陸軍少佐	葛岡信綱
陸軍大尉	谷田義直
陸軍少佐	葛岡信綱
陸軍大尉	谷田義直
同	同
陸軍少佐	葛岡信綱
同	同
陸軍大尉	谷田義直
同	同
陸軍少佐	葛岡信綱
陸軍大尉	谷田義直
同	同
同	同

同	年一月四日、六日	月並祭
同	年一月廿四日	清祓
同	年同夜	招魂祭
同	年一月廿六日	直會
同	年同	清祓
同	年一月廿八日	直會
同	年一月卅日	孝明天皇遙拜式
同	年二月四日	月並祭
同	年二月十一日	紀元節遙拜式
同	年二月廿七日、三月四日、六日、廿七日	月並祭
同	年四月三日	神武天皇遙拜式
同	年四月四日、六日、廿七日、五月四日、六日、廿七日、六月四日、六日、廿七日、	月並祭
同	年六月卅日	大祓
同	年七月三日	清祓
同	年七月五日	直會
同	年七月廿七日、八月四日、六日、廿七日、九月四日、六日、廿七日、十月四日、六日、廿七日、	月並祭

同	同
同	同
陸軍大佐	小澤武雄
陸軍大尉	谷田義直
海軍中秘書	賀茂水穗
同	同
陸軍大尉	谷田義直
同	同
同	同
同	同
同	同
同	同
同	同
同	同
同	同
同	同

同	年九月十七日	神嘗祭遙拜式
同	年十月廿四日	修繕奉告祭
同	年十一月三日	天長節
同	年十一月四日	月並祭
同	年十一月五日	清祓
同	年十一月七日	直會
同	年十一月十二日	清祓
同	年同夜	招魂祭
同	年十一月十六日	直會
同	年十一月廿三日	新嘗祭遙拜式
同	年十一月廿七日、十二月四日、六日、廿四日	月並祭
同	年十二月五日	煤拂祭
同	年十二月七日	月並祭
同	年十二月卅一日	大祓
同	年十一年一月一日	新年祭
同	年一月三日	元始祭

同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	海軍中秘書	賀茂水穗
同	同	
同	陸軍少佐	葛岡信綱
同	陸軍大佐	小澤武雄
同	海軍中秘書	賀茂水穗
同	陸軍大尉	谷田義直
同	同	
同	同	
同	同	
同	同	
同	同	
同	同	
同	同	

同	年一月四日	月並祭
同	年一月六日	同
同	年一月廿四日	同
同	年一月廿六日	清祓
同	年一月廿八日	直會
同	年一月廿九日	臨時祓
同	年二月四日	孝明天皇遙拜式
同	年二月十一日	月並祭
同	年二月廿四日	紀元節遙拜式
同	年二月廿七日、三月四日、六日、廿四日	月並祭
同	年三月廿七日	同
同	年四月三日	清祓
同	年四月四日	神武天皇遙拜式
同	年四月六日	月並祭
同	年四月廿四日、廿七日	同

同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	
同	同	
同	同	
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直

同	年五月四日	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年五月六日、廿四日	陸軍大尉　谷田義直
同	年五月廿七日、六月四日	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年六月六日、廿四日、廿七日	陸軍大尉　谷田義直
同	年六月卅日	大祓
同	年七月三日	清祓
同	年同夜	海軍中秘書　賀茂水穗
同	年七月五日	招魂祭
同	年七月六日、八月四日	陸軍大尉　谷田義直
同	年七月廿七日、八月四日	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年八月六日、廿四日	陸軍大尉　谷田義直
同	年八月廿七日	陸軍少佐　葛田信綱
同	年九月四日、六日	陸軍大尉　谷田義直
同	年九月十七日	神嘗祭遙拜式
同	年九月廿三日	秋季皇靈祭遙拜式
同	年同	清祓

同	年九月廿五日	直會
同	年九月廿七日、十月四日、六日、廿四日	陸軍少佐　葛岡信綱
同	年十月廿六日	月並祭
同	年十月廿七日	臨時祓（神前の鏡出來に付）
同	年十一月三日	月並祭
同	年十一月四日	天長節
同	年十一月五日	月並祭
同	年同夜	清祓
同	年十一月七日	招魂祭
同	年十一月廿三日	直會
同	年十一月廿七日、十二月四日	新嘗祭遙拜式
同	年十二月六日	月並祭
同	年十二月廿四日、廿七日	同
同	年十二月一日	新年祭
同	年一月三日	元始祭
同	年一月四日、六日	月並祭

同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	同
同	同	海軍中秘書　賀茂水穗
同	同	陸軍大佐　小澤武雄
同	同	海軍中秘書　賀茂水穗
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	陸軍少佐　葛岡信綱
同	同	陸軍大尉　谷田義直
同	同	同
同	同	同
同	同	同

同　年一月廿六日　清祓
同　年一月廿八日　直會
同　年一月卅日　孝明天皇遙拜式
同　年二月四日、六日　月並祭
同　年二月十一日　紀元節遙拜式
同　年二月廿四日、廿七日、三月四日、六日　月並祭
同　年三月廿四日　同
同　年三月廿七日、四月四日、六日　同
同　年四月二十四日　同
同　年四月廿七日、五月四日、六日、廿四日、廿七日、六月四日　同
同　年六月六日　同

〔編者云、本月社格ヲ附セラレ、祭主ハ宮司ノ掌ル所トナレリ〕

〔招魂社當時ノ官命〕（前略）年毎乃此月乃今日乃祭爾武官乃人等爾命世旦種々乃物乎備奉旦齋祭夏世給布（下略）

〔編者云、前項全文ヲ掲ゲタレバコヽニハ節略シテ掲ゲツ〕

〔沿革記抜萃〕明治三年正月三日招魂社大祭ニツキ奉迎役清祓直會等兵部權少錄

同　陸軍少佐　葛岡信綱
同　陸軍大尉　谷田義直
同　陸軍少佐　葛岡信綱
同　陸軍大尉　谷田義直
同　陸軍少佐　葛岡信綱

以下夫々申付ラレ候事

（明治六年六月青山清ヨリ伺）勅使ヲ以テ執行被仰付大祭之節ハ祭主御參向相成來候然處例月小祭之儀ハ彙而私出張被仰付祭庭出勤仕來候今般第一局第四課祭典御職掌ト相成候得ハ課長御出張相成祭主代トナリテ御神拜候樣仕度此段奉窺候也

（明治八年十月陸軍大佐小澤武雄ヨリ海軍省ヘ照會）來ル十一月六日招魂社例祭ニ付右祭式並祝詞等先例ノ通取調御廻シ申候尤自今祭主之儀ハ清祓及本日トモ隔番ト相定メ且祭式等其都度々々御掛合ニ不及申候間此旨御承知有之度就テハ此度ノ祭主ハ御省ニ於テ御勤有之候儀致度此段及御掛合候也

追テ奏樂之儀ハ兩省樂隊ヲ以テ爲相勤可申候間先般御打合申置候通乃テ此度ハ初テノ事故實地ニ於テ彼是御打チ合ニ及置度候間掛ノ者一名先以同社ヘ御差出有之度此段申添候也

（明治十二年六月廿一日第一局伺）去ル十年西南ノ役負傷之末終ニ死亡致候者並舊米澤藩士堀尾啓助外一名來ル廿四日招魂式被爲行候處其節祭主ノ儀先規ニヨリ時々將官ノ內ヨリ相勤候例ニ有之候得共今般靖國神社御改革ノ後祭典之節ハ總テ神官ノ長官奉仕之事ニ相成候儀ニ付右招魂式之節モ神官ノ長官相勤候樣御

委員長 附委員

合祀祭に臨時大祭と臨時祭との別あり。明治二十八、三十一、三十四、三十八、三十九、四十年に於ける臨時大祭の如きは特に執行せられたる、稀有の盛典にして其長きは六日間引續き行はれ、而して之に清祓式と、直會祭とを加ふる時は約八日に亘れり。隨つてこの間に於ける諸般の施設は容易ならず。先づ大祭典實施に關する規程を定め、陸海軍高等官中より數十名の委員を置き、大祭事務所を開き庶務、式場、接待、餘興等の各掛に分ち、且兩省屬若干名を之に分屬せしめ、近衞及第一師團より將校下士卒を出して助手たらしむ。其員數實に數百名を算す。而して之を總裁するものを委員長となす。委員長は勅裁にて仰付られ、委員若干名は陸海軍兩省より命ぜらる。然るに臨時祭にありては別に委員長並に委員を命ぜられず。單に委員又は掛員と稱して兩省より出張して事務を處理するに止まりて、彼の大祭に比すれば聊か徑庭あるなり。その委員長を仰付けられたる人々は左の如し。

明治廿八年十二月十六、十七、十八日　陸軍中將子爵　川上操六
同　廿一年十一月四五日　海軍大將子爵　伊東祐亨
同　廿四年十一月一二、三四日　陸軍大將伯爵　野津道貫
同　廿八年五月三、四五日　海軍大將子爵　伊東祐亨
同　廿九年五月二、三四、五日　元帥陸軍大將伯爵　野津道貫

同　四十年五月二、三、四、五日　海軍大將大勳位伯爵　東郷平八郎

〔編者云、臨時大祭委員長ノ外ニ委員長ヲ命ゼラレタルハ、拜殿造營ニ於ケル陸軍少將大藏平三及神社幷ニ遊就館增築ニ於ケル陸軍少將本郷房太郎ナリトス〕

〔明治二十八年十二月臨時大祭委員長及委員〕委員長參謀次長陸軍中將子爵川上操六　委員陸軍省副官陸軍步兵大佐山內長人　經理局第二課長陸軍二等監督平澤道次　軍務局附陸軍步兵中佐谷田文衞　陸軍省副官陸軍步兵少佐渡邊忠三郎　經理局課員陸軍三等監督青柳忠次　軍務局課員陸軍砲兵少佐川谷致秀　同陸軍工兵少佐加藤政義　同陸軍騎兵大尉宮崎兼文　同陸軍步兵大尉丹羽剛　同陸軍步兵大尉山中光保　陸軍中央金櫃部計算官陸軍三等軍吏田邊金三郎　第一師團副官陸軍步兵少佐龜岡泰辰　近衞步兵第二聯隊附陸軍步兵少佐都築直基　憲兵補充部長陸軍憲兵少佐稻垣才三郎　海軍大佐伊東義五郎　海軍少佐岩崎達人　海軍大尉岸榮太郎　海軍大尉三上兵吉　委員附以下略之

〔明治三十一年十一月臨時大祭委員長及委員〕委員長海軍大將子爵伊東祐亨　委員海軍大佐安原金次　海軍中佐高橋助一郎　同加藤定吉　海軍機關中監山崎鶴之助　海軍主計中監志佐勝　海軍造兵中監澤鑑之丞　海軍少佐大澤喜七郎　同高島萬太郎　同稻葉宗太郎　海軍主計少監佐久間毅一　海軍大尉子爵小笠原長生　同小栗孝三郎　陸軍步兵大佐岡部政藏　陸軍一等監督平澤道次　陸軍二等監督青柳忠次　陸軍步兵少佐新山良知　同本郷房太郎　同青柳敏吉　同大井菊太郎　陸軍工兵少佐二宮五十槻　陸軍一等軍吏島田節義　陸軍工兵大尉大谷深造　陸軍憲兵少佐小山三己　陸軍步兵大尉落合偉平　陸軍騎兵大尉隈部末龍　委員附以下略之

〔明治三十四年十一月臨時大祭委員長及委員〕委員長陸軍大將伯爵野津道貫　委員陸軍步兵大佐岡部政藏　陸軍步兵中佐梅地庸之丞　陸軍步兵少佐塚田清市　陸軍砲兵少佐宇治田虎之助　陸軍三等監督湯本善太郎　陸軍步兵大尉有吉雅一　同山岡金藏　同大多和新補　陸軍一等軍吏島田節義　陸軍步兵大尉口羽清之助　海軍中佐石橋市　同土屋光金　海軍少佐眞田鶴松　同川原袈裟太郎　海軍大尉飯田久恒　附屬略之

〔明治三十八年五月臨時大祭委員長及委員〕靖國神社臨時大祭委員長海軍大將子爵伊東祐亨　同委員陸軍步兵大佐本郷房太郎　同陸軍步兵大佐井口五郎　同一等軍醫正三浦得一郎　同步兵中佐飯田左門　同二等主計正小暮滿太郎　同步兵

少佐森督之　同陸軍歩兵少佐伊藤祐武　同砲兵少佐伊森重夫　同三等主計正廣瀬正德　同陸軍歩兵少佐柳生俊久　同陸軍歩兵少佐永田十寸穗　同陸軍騎兵少佐石橋正人　同陸軍憲兵少佐山崎形閑　同陸軍三等主計正島田節義　同陸軍歩兵大尉石浦謙二郎　同陸軍一等主計大津留重　同海軍大佐野間口象雄　同海軍々醫大監矢部辰三郎　同海軍中佐森越太郎　同海軍主計中監宇都宮鼎　同海軍少佐德田道寮　同海軍少佐千葉恭二郎、同海軍少佐伯爵佐野常羽　同海軍機關少監鶴內實太郎　委員附海軍兵曹長森延之助外四名　委員附陸軍屬石原久敏外十一名　同海軍上等兵曹谷口德三郎外十四名

（明治三十九年臨時大祭委員長及委員）委員長元帥陸軍大將伯爵野津道貫　海軍少將小倉鉁一郎　陸軍少將本鄉房太郎　海軍造兵大監澤鑑之丞　陸軍砲兵大佐星野金吾　陸軍砲兵大佐重見熊雄　海軍大佐村上格一　海軍中佐森越太郎　陸軍歩兵中佐菊地愼之助　海軍中佐船越楫四郎　海軍々醫中監鈴木裕三　海軍主計中監宇都宮鼎　陸軍二等軍醫正守屋甫一郎　陸軍歩兵少佐白川義則　陸軍歩兵少佐伊藤祐武　海軍少佐松村豐記　海軍機關少佐鶴內實太郎　陸軍歩兵少佐隈部親信　陸軍歩兵少佐男爵黑田善治　海軍少佐小林研藏

陸軍工兵少佐芝生佐市　陸軍砲兵少佐橫道復生　陸軍歩兵少佐千田嘉平　陸軍歩兵少佐梅田岩松　陸軍憲兵少佐藥師川常義　陸軍歩兵大尉津久居平吉　陸軍歩兵大尉福田彥助　陸軍歩兵大尉鳥谷章　海軍大尉土屋道太郎　陸軍一等主計近藤勇　陸軍一等主計員森房治　陸軍一等主計大津留重　陸軍砲兵大尉木村介雄　陸軍教授橫山雅男

（明治四十年五月靖國神社臨時大祭委員長及委員）委員長海軍大將伯爵東鄉平八郎　委員陸軍ノ部　歩兵大佐立花小一郎　二等主計正加藤貞次郎　砲兵中佐光井香　歩兵少佐隈部親信　同杉村勇次郎　同河內信彥　砲兵少佐伊森重夫　輜重兵少佐大鈴弘武　三等主計正廣瀨正德　歩兵少佐男爵黑田善治　工兵少佐芝生佐市郎　砲兵少佐橫道復生　歩兵少佐細野辰雄　砲兵少佐尾貫徹　歩兵少佐千田嘉平　三等軍醫正村山有　歩兵少佐梅田岩松　憲兵少佐藥師川常義　歩兵大尉津久居平吉　同高須俊次　騎兵大尉村上正　同吉田信暉　歩兵大尉松崎新太郎　同林彌三吉　同太田喜伊一　一等主計員森房治　同大津留重　陸軍教授橫山雅男　海軍ノ部　大佐村上格一　中佐町田駒次郎　同船越楫次郎　同九橋彥三郎　同田中耕太郎　同大野仁助　少佐吉田孟子　同田中治平　同福地嘉太

郎　同東條明次　同古屋道太郎　機關大尉水谷光太郎　大軍醫雨宮量七郎　主計小監深水貞吉附屬助手ノ姓名略之）

參列官員

初めは中小祭其他臨時の諸祭に至るまで、祭典毎に祭主の派遣ありて祝詞を奏し、祭儀を擧行せしめしが、明治十二年六月社格を定め神職を置かれし以來、祭典は凡て神職之を奉仕することゝなりて、兩省より祭典掛又は掛官の名稱にて數名（○佐尉官又出張し、○但陸軍省は本神社所轄の局員出張し、海軍省は祭典係ありて平素は社務を掌り祭時には出張して祭事に與るなり。）祭儀に參列する事となれり。尤十二年より十八年に至るまでは大祭にのみ參列ありしが、十九年二月より二十三年四月に至るまでは、中祭小祭にも陸軍省より出張參列のことありき。然るに同年五月、副官より中小祭には當分官員の出張を止むる旨通牒ありて、再び、例大祭、臨時大祭、及、其前後の清祓式、直會祭にのみ兩省より本官各一名屬員數名出張參列することゝなりて現今に至れり。（○但、臨時に勅使の差遣又は特別なる祭典を行ふ時は兩省より參列あり）參列官員は陸海軍を代表して式典に參列するものにして、正殿右列の椅子に着き、宮司祝詞奉奏の後、拜禮するを例とす。

（明治十二年以後參列官員姓名）

明治十二年六月二十四日清祓

同　年六月二十五日大祭二十六日直會式

同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會

同十三年五月五日清祓及六日例大祭七日直會

同十四年五月五日清祓及六日例大祭七日直會

同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會

陸軍歩兵大尉	陸軍歩兵少佐	陸軍歩兵中佐	陸軍中秘書	海軍中秘書	海軍大秘書
賀茂水直	葛岡信綱	葛岡信綱	賀茂水直	葛岡信綱	賀茂水直
谷田義穂	岡茂信穂	岡茂信穂	谷田義穂	岡茂信穂	谷田義穂
陸軍歩兵大尉	陸軍歩兵少佐	陸軍歩兵中佐	海軍中秘書	陸軍中秘書	陸軍歩兵中佐
賀茂水直	葛岡信綱	葛岡信綱	賀茂水直	葛岡信綱	賀茂水直
谷田義穂	岡茂信穂	岡茂信穂	谷田義穂	岡茂信穂	谷田義穂
同	同	同	同	同	陸軍歩兵中佐（外一名）
					葛岡信綱

同十五年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓及六日例大祓七日直會
同十六年五月五日清祓及六日例大祓七日直會
同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會
同十七年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會
同十八年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓
同　年十一月六日例大祭七日直會
同　十九年二月十七日祈年祭
同　年四月一日神事
同　年四月六日月並祭
同　年五月一日神事
同　年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年六月一日神事
同　年同七日月並祭

陸軍中尉水山海軍大秘書賀茂水穗
同　同
陸軍歩兵大尉大生定孝外一名
同　同
同　同
陸軍歩兵大尉大生定孝海軍大尉福島定孝
陸軍歩兵大尉西川政成海軍中尉野口信綱
陸軍歩兵中尉葛岡佐海軍中尉野口信綱
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍十二等出仕日野潤輔
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成海軍大尉植村永孚

同　年七月一日神事
同　年七月六日月並祭
同　年八月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年九月六日月並祭
同　年十月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年十一月一日神事
同　年同五日清祓及同六日例大祭七日直會
同　年同二十三日新嘗祭十二月一日神事
同　年十二月六日月並祭
同　年三十一日大祓及同除夜神事
同二十年一月一日神事
同　年同三日元始祭及六日月並祭
同　年二月一日神事及六日月並祭十一日紀元節
同　年同十七日祈年祭

陸軍一等屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成
同　同
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成
陸軍一等屬工藤雅節
海軍大尉植村永孚陸軍歩兵大尉西川政成
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成
陸軍一等屬工藤雅節
陸軍屬工藤雅節
陸軍歩兵大尉西川政成　同　同
陸軍屬工藤雅節

同　年三月一日神事及六日月並祭
同　年四月一日神事及六日月並祭五月一日神事
同　年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年六月一日神事及三十日大祓
同　年七月一日神事
同　年七月六日月並祭
同　年八月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年九月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年十月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年十一月一日神事
同　年同五日清祓
同　年同六日例大祭及七日直會
同　年同廿三日新嘗祭及十二月一日神事

陸軍歩兵中佐　沖原光孚
陸軍歩兵大尉　西川政成
陸軍歩兵大尉　西川政成
〔海軍大尉　植村永孚
陸軍歩兵大尉　西川政成〕
陸　軍　屬　郡山軍介
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
同　梅地庸之丞
同　吉村貞白
同　梅地庸之丞
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　梅地庸之丞
同　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
〔陸軍歩兵少佐　植村永孚
海軍少佐　清水俊〕
陸軍歩兵大尉　吉村貞白

同　年十二月六日月並祭
同　年同卅一日大華表新築ニ付祭典
同　年同日大祭及除夜神事
同　廿一年一月一日神事
同　年同三日元始祭
同　年同六日月並祭
同　年二月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年同十一日紀元節
同　年二月十七日祈年祭
同　年三月一日神事
同　年同月六日月並祭
同　年四月一日神事
同　年同月六日月並祭
同　年五月一日神事
同　年同月五日清祓

陸軍歩兵少佐　清水俊
〔同　海軍少佐　植村永孚
海軍少佐　植村永孚〕
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
同　梅地庸之丞
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　梅地庸之丞
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　梅地庸之丞
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
同　梅地庸之丞
陸軍歩兵少佐　清水俊
〔陸軍歩兵大尉　吉村貞白
海軍大主計　賀茂水穗

同　年同月同夜招魂祭及六日例大祭七日直會
同　年六月一日神事
同　年同月六日月並祭
同　年七月一日神事
同　年九月一日神事及六日月並祭
同　年十月一日神事
同　年同月六日月神祭
同　年十一月一日神事
同　年同月三日天長節
同　年同月五日清祓
同　年同月同日招魂祭及六日例大祭七日直會
同　年同月廿三日新嘗祭
同　年十二月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年同三十一日除夜神事
同二十二年一月一日神事

陸軍歩兵少佐　清水俊
海軍大主計　賀茂水穗
陸軍歩兵大尉　石島壽平
同　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
同　石島壽平
同　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
陸軍少佐　梅地庸之丞
海軍歩兵少佐　植村永孚
陸軍歩兵大尉　梅地庸之丞
同　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
同　吉村貞白

同　年同六日月並祭
同　年二月六日月並祭
同　年同十一日紀元節
同　年同月同日憲法發布並皇室典範御治定ニ付奉告
同　海軍大尉　同　中村貞邦
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
同　石島壽平
同　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
陸軍歩兵大尉　吉村貞白
海軍大主計　賀茂水穗
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　石島壽平
同　吉村貞白
陸軍歩兵少佐　清水俊
陸軍歩兵大尉　石島壽平
同　吉村貞白

同　年同五日清祓
同　年同日招魂祭及六日例大祭七日直會
同　年六月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年七月一日神事
同　年同六日月並祭及八月一日神事
同　年九月一日神事及六日月並祭

同　年十月一日神事
同　年同六日月並祭
同　年十一月一日神事
同　年同五日清祓
同　年同日招魂祭及六日例大祭
同　年同七日直會
同　年同二十三日新嘗祭
同　年十二月一日神事
同　年同六日月並祭及三十一日大祓除夜神事
同二十三年一月一日神事及三日元始祭六日月並祭二月十一日紀元節
同　年二月十七日祈年祭及三月六日月並祭
同　年四月六日月並祭
同　年五月五日清祓及六月例大祭
同　年同七日直會
同　年十一月五日清祓及六月例大祭

同	石島壽平	陸軍歩兵大尉
同	吉村貞白	同
同	石島壽平	陸軍歩兵少佐
同	吉村貞白	海軍少佐
同	植村永孚	陸軍歩兵中佐
同	志水直	海軍大尉
同	迫田	陸軍歩兵中佐
同	野津親章	陸軍歩兵中佐
同	志水直	海軍大尉
同	迫田	陸軍歩兵中佐
同	志水直	海軍大尉
同	植村永孚	陸軍歩兵中佐
同	志水直	海軍大尉
同	植村永孚	陸軍歩兵中佐
同	石島壽平	陸軍歩兵大尉
同	吉村貞白	同
同	石島壽平	陸軍歩兵少佐
同	植村永孚	海軍少佐
同	志水直	陸軍歩兵中佐
同	吉村貞白	海軍少佐
同	石島壽平	陸軍歩兵大尉

同　年同七日直會
同二十四年二月十七日祈年祭
同　年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會
同二十五年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年同七日直會
同二十六年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓及六日例大祭七日直會
同二十七年三月九日兩陛下銀婚式祝典
同　年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　年十一月五日清祓
同　年同六日例大祭及七日直會
同二十八年五月五日清祓
同　年同六日例大祭
同　年同七日直會

海軍少佐	植村永孚	
陸軍歩兵中佐	志水直	代
陸軍省副官	橋本安定	陸軍歩兵中佐
陸軍大尉	福原重業	陸軍省副官
陸軍省副官	三木雅美	陸軍少佐
海軍大尉	島村速雄	陸軍省副官
同		
陸軍省副官	木村雅美	陸軍少佐
陸軍少佐	小倉鉁一郎	陸軍省副官
海軍少佐	倉橋安定	陸軍省副官
陸軍歩兵中佐	山田保永	陸軍大尉
陸軍省副官	岩崎達人	陸軍省副官
陸軍大尉	村治美	陸軍省副官
陸軍省副官	川倫雅	陸軍大尉
陸軍大尉	浪安定	陸軍省副官
陸軍將校	福家	陸軍省副官
陸軍省副官	山内長人	陸軍少佐
陸軍少佐	伊東祐亨	海軍大將
海軍省副官	迫田	陸軍少佐
陸軍少佐	内長人	海軍省副官
海軍少佐	迫田	陸軍省副官
陸軍省副官	山内長人	陸軍少佐
陸軍省副官	山内大佐代大尉	陸軍省副官
陸軍省副官	神谷	陸軍少佐
陸軍中尉	邊長人	後備海軍少佐
後備海軍少佐	古賀喜三郎	陸軍省副官
陸軍省副官	山内長人	陸軍中尉
陸軍中尉	邊長人	後備海軍少佐
後備海軍少佐	古賀喜三郎	陸軍省副官
陸軍省副官	山内長人	陸軍中尉
陸軍中尉	邊	後備海軍少佐
後備海軍少佐	古賀喜三郎	陸軍省副官
陸軍中尉	田	陸軍中尉

同　年十一月五日清祓
同　年同六日例大祭
同　年同七日直會
同　年十二月十五日臨時大祭清祓
同　年同十六日臨時大祭
同　年同十七日同上
同　年同十八日同上
同　年同十九日直會
同二十九年五月五日清祓及六日例大祭
同　年十一月五日清祓及六日例大祭
同　年同七日直會
同三十年一月九日新築社務所新室祝
同　年五月五日清祓
同　年同六日例大祭
同　年同七日直會

海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍
軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐
中村	大島	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫	中牟田	大迫
中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將
男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵	男爵	子爵
樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六	樺山資紀	川上操六

海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍
軍中佐	軍砲兵少佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐
伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山
中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將
子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵
伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖

海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍
軍中佐	軍砲兵少佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐
伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山
中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將
子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵
伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖

同　十二月十五日臨時大祭清祓
同　同十六日臨時大祭
同　同十七日同上
同　同十八日同上
同　同十九日直會
同二十九年五月五日清祓及六日例大祭七日直會
同　十一月五日清祓及六日例大祭
同　同七日直會
同三十年一月九日社務所新室祝
同　五月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同　十一月五日清祓及七日直會
同　同六日例大祭
同三十一年五月五日清祓及七日直會

海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍	海軍	陸軍
軍中佐	軍砲兵少佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐	軍大佐	軍砲兵大佐	軍少佐	軍砲兵少佐
伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山	伊東	大山
中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將	中將	中將	少將	少將
子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵	子爵	伯爵
伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖	伊東祐亨	大山巖

同	同六日例大祭	陸軍步兵少佐	梅地庸之丞
		同	大井菊太郎
		海軍中佐	橋本助一郎
同	十一月三日天長節及清祓	陸軍省副官	岡部政藏
		陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍少佐	
同	同四日臨時大祭	陸軍省副官	岡部政藏
		海軍中佐	
同	同五日臨時大祭六日例大祭	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		陸軍省副官	岡部政藏
		海軍中佐	
同	同七日直會	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍大尉	
同三十二年	五月五日清祓	陸軍省副官	岡部政藏
		海軍少佐	伊藤乙次郎
同	同六日例大祭	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍中佐	橋本助一郎
同	同七日直會	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍少佐	伊藤乙次郎
同	十一月五日清祓及七日直會	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍中佐	名和又八郎
同	同六日例大祭	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍大佐	寺垣猪三
同三十三年	五月清祓	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍中佐	名和又八郎
同	同六日例大祭	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		海軍大佐	寺垣猪三
同	同七日直會	陸軍步兵少佐	大井菊太郎
		同大尉	山岡金藏
		海軍中佐	名和又八郎

同	十一月五日清祓及六日例大祭七日直會	陸軍省庶務課長	岡部大佐
		陸軍步兵大尉	山岡金藏
		海軍大佐	寺垣猪三
同三十四年	五月五日清祓及六日例大祭七日直會	陸軍步兵大尉	山岡金藏
		海軍大佐	齋藤孝至
同	十月六日拜殿竣功奉告祭	陸軍省庶務課長	岡部大佐
		陸軍步兵大尉	山岡金藏
		海軍大佐	齋藤孝至
同	同三十一日臨時大祭清祓	陸軍三等監督	小菅濟太郎
		陸軍步兵大尉	山岡金藏
		海軍少佐	眞田鶴松
同	十一月一日大祭	陸軍步兵大佐	岡部政藏
		海軍中佐	石橋甫
同	同二日同上	陸軍砲兵少佐	宇治田虎之助
		海軍中佐	土屋保
同	同四日同上	陸軍步兵少佐	塚田
		海軍少佐	眞田鶴松
同	同五日清祓	陸軍步兵大尉	大多和
		海軍大尉	飯田
同	同六日例大祭	陸軍省庶務課長	岡部政藏
		海軍大佐	齋藤孝至
同	同七日直會	陸軍步兵大尉	口羽
		海軍大尉	飯田
同三十五年	五月五日清祓及六日例大祭七日直會	陸軍步兵大尉	山岡金藏
		海軍大佐	齋藤孝至
同	十一月五日清祓及七日直會	陸軍省庶務課長	村山邦彥
		海軍大尉	木村甚三郎
同	同六日例大祭	陸軍省庶務課長	村山邦彥
		海軍大佐	齋藤孝至
同三十六年	五月五日清祓及七日直會	陸軍省副官	村山邦彥
		海軍大尉	木村甚三郎

同　同六日例大祭
同　十月十五日能樂堂竣功式
同　十一月五日清祓六日例大祭七日直
同三十七年二月十五日宣戰奉告祭
同　五月五日清祓
同　同六日合祀祭及例大祭七日直會
同　十一月五日清祓及七日直會
同　同六日例大祭
同三十八年五月二日清祓及三日大祭
（編者云、四日五日臨時大祭六日例大
同　十一月五日清祓及六日例大祭七日
同　十二月十一日平和克復奉告祭
（編者云、三十九年五月、臨時大祭、例大
同三十九年十月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同四十年五月一日臨時大祭清祓
（編者云、五月ノ臨時祭及例大祭、及十一月ノ
同　十一月六日例大祭
同　同七日直會
同四十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同四十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭

同四十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同四十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同四十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同四十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同四十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同四十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同四十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同四十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同五十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同五十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同五十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同五十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同六十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同六十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同六十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同六十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同六十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同六十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同六十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同六十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同六十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同六十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同七十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同七十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同七十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同七十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同八十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同八十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同八十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同八十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同九十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同九十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同九十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同九十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同九十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同九十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同九十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同九十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同九十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同九十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百二十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百二十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百二十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百二十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百二十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百二十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百二十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百二十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百二十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百二十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百三十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百三十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百三十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百三十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百四十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百四十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百四十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百四十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百五十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百五十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百五十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百五十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百五十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百五十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百五十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百五十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百五十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百五十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百六十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百六十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百六十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百六十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百七十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百七十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百七十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百七十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百八十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百八十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百八十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百八十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百八十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百八十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百八十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百八十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百八十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百八十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百九十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百九十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同百九十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同百九十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百二十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百二十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百二十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百二十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百三十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百三十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百三十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百三十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百四十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百四十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百四十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百四十三年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百四十四年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百四十五年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百四十六年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百四十七年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百四十八年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百四十九年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百五十年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會
同二百五十一年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清祓
同　同六日例大祭
同　同七日直會

同二百五十二年五月四日臨時祭清祓
同　同五日臨時祭及七日直會
同　同六日例大祭
同　十一月五日清

同　同七日直會
同四十三年五月五日清祓
同　同月同日招魂祭
同　同六日例大祭並臨時祭
同　七日直會

職員

初め招魂社と稱せし時は、社司、社掌又は雇員を置きて之を祝部と稱し別に神官、神職を置かず。○これ招魂社は法令の定むる所の神社にあらざりしを以てなり社司、社掌等は神饌、奏樂、鋪設等の雜務を執り、兼ねて宿直、警衛及境内の取締を爲し、兵部省○明治五年兵部省を陸軍省と改めらるの出仕中に御用係○又は祭事係とも云ふを置き、之を指揮監督せしめしなり。社司は明治二年十一月初めて之を置き

陸軍歩兵少佐　高須俊次
海軍少佐　中村正奇
陸軍砲兵中佐　吉田豐直
海軍大中佐　中村正奇
海軍中佐　大野直枝
陸軍歩兵大佐　伊藤一隆
陸軍歩兵大佐　山田喜之
海軍中佐　井出謙治
海軍大佐　田中綱常
陸軍砲兵中佐　吉田豐直

○これより以前は祝部とのみ稱して別に職名なく、創立鎭祭の時にも赤心、報國兩隊の人を用ゐて祭事に預らしめたりき、二年七月八日に至りて招魂社御番人三人を採用せんことを申出で、而して十一月に至りて社司の名稱を置きて、辭令を發するに至りしなるべし赤心隊、報國隊のものにして駿遠二州より移住せし六十餘人の中にて、六十二人を採用し、同年十二月社司取締一員を置き、翌三年四月に至り祭典取調所を開きて學科を定め、學則によりて皇典を研究せしめたり。社司は大祭の際には獻供方、樂方、取締方、社務方に分課し、各社務に執掌したりしも、四年七月四日に至り諸事改正と共に彼の六十餘名を免じ、更に三十九名に社司を命じ、官祿として六人口を給せられぬ。然れども、漸次辭職するものあり、且本殿の建營も略整頓せれば、その翌五年二月總て之を解職し、更に同年二月十二日五員の社司を置き、同年五月別に社掌二員を命じ、社務に預からしむることゝなり。同七年二

月に至り社司中二員のものを十四等出仕に、三員を十五等出仕に、社掌を等外一等に命じ、各第一局分課とし、十四等出仕は官國幣社の禰宜に、十五等出仕は主典に同等と定めらる。かくて九年一月十二日出仕及び等外を廢し、更に五名のものに、屬を命じ社務を執らしめしが同十二年六月社格制定せらるゝや又之を廢し、法令の定むる所に從ひ宮司一員、禰宜一員、主典四員を置き、内務、陸軍、海軍三省の管轄となし、○管轄廳の條參照神官の進退黜陟は内務省之を專にし、其增員增給は三省の協議によりて決する事となりたり。二十年三月十七日にいたり閣令第四號により、神官を廢して更に神職を置き、陸海軍兩省に於て補任する事となり、同二十四年五月定員四員の主典を二員に減じ、同三十五年勅令第二十七號によ

り、再び職制を改められ、宮司は内閣の奏請によりて仰付らる。而して同四十三年四月處務規定を改定せられ、定員二員の主典を四員に復舊せられぬ。初め神職の教導職を兼務せし當時は、社殿にて說教會を開きて人心を敎化し、葬儀に預りて士卒の終禮を修めたりしが、十五年一月敎導職兼補を廢せられて其事止み、遺族と神社との間自ら隔離するに至れるが如し。神職の外に經理事務囑託○明治三十六年七月初めて之を置く社丁○同二十八年三月等あり。て社掌四員を置き、事務を補助せしむることゝなれり。

本社は他の神社の如く社入金に干預することを許さず。俸給の外何等の所得なければ特に十二年六月太政大臣の許可を得て、宮司以下に增給として若干金を給與せられしが、三十年九月俸給規定

を定められ爾來一二回の改正を經て現今に至れり。

《明治二年七月八日沿革記抜萃》杉浦大學宮田重郎左工門辻村駿河（以上三人共報國隊ノ内）

右三人へ招魂社御番被仰付候樣仕度奉存候已上

《明治二年大村益次郎ヨリ議定へ建議書寫》駿遠兩國ノ神職赤心報國ト相唱候兩隊ノ儀ハ昨春來大總督ノ宮ニ隨從致シ東京へ擊入候處同十一月宮御凱陣ニ付兩隊共歸國申付候處本國旣ニ德川氏領地ト相成候ニ付歸國甚難澁ノ趣ニ候へ共厚キ御沙汰ノ程モ有之一同覺悟ノ上一先歸國致候然ルニ歸國間モナク數々暗殺ノ暴行差シ起リ方今實以難凌形勢ニ至リ候趣急使ヲ以連署及難訴候其情實熟察仕リ候處甚以不便ノ至自然軍務官ニ於テ御處分無之而ハ凌方相付申間敷其儀ハ移住爲致候外策有之間敷ト奉存候右ニ付忽考仕候處ハ右神職共本祿ノ義ハ德川氏へ引渡シ便宜ノ地ニテ替地頂戴致サセ上野山内へ昨年來戰死ノ靈祠ヲ相設右神職共ヲ移住セシメ春秋ノ祭典ヲ掌ラセ候ハヽ兩全ノ策ニモ相成ヘキカト奉存候尤本國ニ在住候得者何程薄祿ニテモ在來ノ活計可有之一朝移住候テハ活計相付申間敷者モ多分可有之右等ノ手當トシテ上野寺領元高ヲ以テ靈祠へ御寄附相成候ハヽ、其高ヲ以テ夫々配當爲致可申然ル上ハ是又不都合ノ儀ハ有之間敷カト奉存候

右ノ件々實以テ差迫リ候儀故篤ト御高評ノ上速ニ否ヤ御沙汰有之度候依之條々奉伺候以上

初發ノ儀ハ右之次第ニ候得共朝議御決シノ上ニ招魂所モ九段坂上ニ假祠造立致申候又赤心報國兩隊之者共奮來奉仕社ノ儀ハ去辰ノ春出兵ノ砌ヨリ親子兄弟之內國ニ止マリ若シ子弟幼ナル者ハ下社家之レヲ補シ一日モ神務差支無之樣致置候由ニ付往々ノ處置ハ未タ決シ不申候得共當今扶持手當差遣置候事　總テ八拾八人內參拾貳人移住遠江國報國隊總テ四拾人內參拾貳人移住駿河國赤心隊右無據情實ニ付移住願出候

《記錄抄出明治二年十一月兵部省ヨリ招魂社々司共へノ達》右今般移住ノ者へ招魂社境內長屋御貸渡相成候條御用掛へ申談夫々可請取事

《明治二年十一月二十三日兵部省ヨリ兩隊へ辭令》●印ハ報國隊○印ハ赤心隊

●富士亦八郎　○森美次郎　○三浦一衛

○菅原眞清　○堀江提一郎　○磐田東稻

●東流保之助　●鈴木楯雄　●森眞魚尾

●富士宮次郎　●富士匠三郎　●廐守直四郎

●先光五十連　○淺羽義樹　○小國眞直

●幡隼幸雄　●植松眞一郎　●宮崎芳雄
●新宮榮作　●小杉眞次郎　●豐積勝
●鎭是九十郎　●山宮鎭次郎　●内藤浪江
○平尾八束　●錦織孝一郎　○西尾貞俊
●鎭是雄三　●鎭是茂一郎　○木野理三郎
○佐藤信　○木部端　●井出鶏三
●山田嘉藤次　●井出鎌大郎　●鈴木源榮
○前島平一郎　○長谷川巖　●内藤内匠
○山崎一郎　○近藤一馬　●新谷鐵太郎
●原宇作　○池田祥瑞民　○鷹森茂
○宮田重男　○辻誠一郎　○山崎豐
○賀茂八郎　○鷹森章　○松浦亮
○鷹森謙三　●藤林共吉　●堀龍太
○海瀨光太郎　○足立靜次郎　○植村新之助
○渡邊清　○山田旬作　●前島數三郎
●坂口伊三郎　○中山廣太郎

今般招魂社司申付候事　十一月　兵部省

〔編者云、陸軍省ノ書類ニハ池田祥瑞民中山廣太郎、植村新之助、長谷川巖ノ四名ナク土岐尙正ト云フモノアリ、暫附テ後考ヲ俟ツ〕

《明治二年十一月二十三日達》今般招魂社司申付ニ付其身一代六人扶持被下候

十一月　兵部省（八名同上）

《明治二年十二月兵部省ヨリ平尾八束へ辭令》招魂社祭事係申付候事

《明治二年十二月十二日兵部省ヨリ桑原眞清へ辭令》招魂社御用地取締申付候事

《明治三年四月沿革記拔萃》招魂社々司　飯田町中坂舊江原邸其社祭典取調所ト相定候條此段相達候事

《明治三年四月四日沿革記拔萃》今般招魂社祭典取調所御設置相成候ニ付テハ別紙學體ニ法リ學科ノ通リ社司一統ニ學術研究爲致度候此段御許可相成度樣奉願候也大久保忠尙宮士亦八郎桑原眞清　兵部省御中

「別紙」願之趣聞屆候事

學體

是乃日出留本津御國乃大道波、天地止久敷常志磐遷變易倍可良邪留大道遷志氐現世界遷五大洲及百萬之島嶼在登在由留事物之義理波、凡旦此大道遷已曾包藏賢多禮曾我大

道乎習比學布倍支次第波、言卷毛恐氣禮杼母上津代還、
資祚之隆當與天壤無窮矣登、詔給比、仰給倍留大御詔乃由緣乎、神世乃御典還讀明
之考倍究賣旦、先神習布還始牟倍志然者雖有八百萬千萬歲乎經志今乃世止成還多禮
婆、打細還神代乃御典乎耳讀旦也波止奴倍伎風乃音乃遠皇祖乃大御世還奉頁世留
唐土乃戎乃書籍波更也繼々今乃御世還至留麻泥、月還日還考競布四方八方乃御奴
國與利、奉里捧持來留百乃技藝萬之規則乃八千種毛、彼乃大道乃大御規則還符比叶
比奴倍伎咏志所業波貶黜布事无久捨弃留事无久取學比考倍盡志天愈益圖土翁神
乃幸乎請廣牟留還在奴倍志然禮婆此招魂社乃學校毛專此大道乎修學牟倍伎設還
之在禮婆其教乃次第還隨賀比、愈益學婆邪良免哉勉賣邪良免哉

學科

一本 數 一文 章 一歷 史

（明治三年四月沿革記抜萃）鈴木眞年

候事

（同上）同人招魂社祭典取調所詰申付候事 兵部省

（明治七年二月）一、十四等出仕二名 但シ其掌神殿ニ奉仕シ祀事ヲ修メ庶務ヲ檢ス乃チ官國幣社ニ在テハ禰宜ノ職ニ同シ 一、十五等出仕三名 但シ其掌禰宜ニ次ク即チ官國幣社ニ在リテハ權禰宜ノ職ニ同シ 一、等外一等二名 但シ其掌祀事ヲ助ケ庶務ヲ修ム即チ官國幣社ニ在テハ主典ノ職ニ同シ

（明治十二年七月十二日神職增俸ニ付西郷陸軍卿ヨリ第五局ヘノ達）靖國神社神官俸給之儀ニ付別紙寫之通太政官ヘ及具申候增俸支給可致此旨相達候事

「別 紙」

今般東京招魂社ヲ靖國神社ト改稱別格官幣社ニ被列候處同社神官ノ儀ハ從來支給方之振合モ有之御定則ノ俸給ニテハ實際差支候條該社費ノ內ヲ以テ本俸ノ外左之通增給可致存候此段及具申候也

明治十二年六月 海軍卿川村純義、陸軍卿西鄉從道、內務卿伊藤博文、 太政大臣三條實美殿 神官增俸宮司員本俸金拾圓外三十圓增給、禰宜員本俸金八圓外十七圓增給、主典四員本俸金六圓外六圓增給

（明治十二年七月陸軍省定社務所規則抜萃）第四、 陸海軍兵隊ノ中死亡アリテ葬儀ヲ賴ミ出ツル時ハ之ニ應スヘシ

（明治十一年十月十九日第一局長代理小澤大佐ヨリ西鄉陸軍卿ヘ伺）招魂社之儀ハ是迄一定ノ神官無之既ニ現今雇之者若干名ヲ掛ケ社務爲取扱居候處該社ノ儀ハ永世不朽之一大社ニ候得者更ニ左之通神官ヲ被置候樣致度仍而別紙太政官付

案相添此段相伺候也（別紙案略）

（明治十一年十二月九日小澤第一局長ヨリ西郷陸軍卿ヘ伺）招魂社々務爲取扱神官被置候段相伺候處去ル二十七日伺之趣難聞屆旨御指令之趣謹承仕候然ル處該社ノ義社名ニ就テ見ルトキハ其時々在天ノ靈魂ヲ招キ神饌ヲ享ケシムル所謂招魂場ニ過キサルカ如シ若シ然ラハ唯一ノ監護人ヲ置キ別ニ神官ヲ要セスト雖同然ラス社ノ事タル決シテ右樣ノ譯ニ無之戊辰以來國家ノ爲メ忠奮戰死セシ靈ヲ鎭座被爲在乃チ永世不朽ノ一大社ニシテ年ニ四回ノ大祭月ニ四回ノ小祭アリテ其忠魂ヲ慰セラルヽノ聖旨至ラサル所ナク盡サヽル所ナシト雖モ唯其神官ヲ置レサルヲ以テ一社ノ體裁ヲ爲サヽル樣相考申候抑モ神社ニシテ神官ナキ佛閣ニシテ住職ナキハ原野ノ小祠市街ノ辻堂ト何ソ異ラン仍テ神慮ノ程且御厚遇之道ニ於テモ如何ヤト深ク遺憾ニ存候而シテ今現ニ同社ニ屆ノ者若干名ヲ置キ社務ヲ取扱ハシム其務タル固ヨリ神官ニ異ナラサルモ直チニ神官ト稱スヘカラスハ大小祭典及平素細大之儀ニ付不都合不少且又本社設立之際舊神官之者ヲ撰ミ社司社掌ノ名稱ニテ奉仕セシメ其後名稱ハ種々變換致候得共今ニ至ル迄引續キ當省軍人死亡之節葬儀祭式等ヲモ兼テ取扱ハセ來リ候儀モ有之是迄モ甚不都合之次第ニ付旁以先伺伺書差出候義ニ有之候尤モ本社ノ儀一般神社ニ對スル社格有之儀ニ候得者其格ニ應シ宮司或禰宜等各相當ノ神官ヲ被置勿論ニ候得共畢竟特別之神社ニ候間社官ニ於ケルモ亦隨テ別稱ナラサルヲ得サル儀ト相考本文之通伺出候譯ニ付猶篤ト御詮議相成度將又先伺御指令難聞屆トノ御詮議振ノ在ル處ハ如何哉難被察候ヘ共自然社格無之ヨリ御聞屆難相成義候ヘ者宜敷更ニ相當之社格御定相成上伺之通御許可相成候樣致度此段再應相伺候也

	判任等外
月給	五十圓已下四十圓以上 / 三十五圓已下二十五圓以上 / 貳拾五圓已下十圓以上
官員	社司 / 副社司 / 社等
人員	一人 / 二人 / 三、、人

（神職履歷書綴拔萃）○宮司靑山淸明治四年八月兵部省十一等出仕招魂社祭事掛ニ補セラレ同十年一月招魂社雇被申付同十二年六月宮司ニ任セラレ同二十年三月職制改正ニ依リ更ニ宮司ニ補セラレ同二十四年二月六日卒（七十七歳）○賀茂百樹明穗明治二十四年二月宮司ニ補セラレ同四十二年三月一日卒（七十歳）○禰宜黑神直臣明治十二年六月禰宜ニ

任ゼラレ、同十五年八月一日病死(四十八歳)。○石井懿、明治五年六月招魂社々掌ヲ命ゼラレ、同十年招魂社雇トナリ、同十二年六月主典ニ、同十五年十月禰宜ニ任ゼラル、同二十年三月職制改正ニヨリ更ニ禰宜ニ補セラレ、同四十一年十二月辭職。○大槻朗明、明治四十年二月主典ニ、同四十一年十二月禰宜ニ補セラル。○主典、東流直昌、明治二年十月招魂社々司ヲ、同五年五月社掌ヲ命ゼラレ、同十年雇トナリ、同十二年六月主典ニ任ゼラレ、同十九年三月辭職。○井田孫一郎、明治十一年九月招魂社雇ヲ命ゼラレ、同十二年六月主典ニ任ゼラル、同十六年八月辭職。○植田有年、明治十二年六月主典ニ任ゼラレ、同十九年三月辭職。○安部熊雄、明治十五年十一月主典ニ任ゼラレ、同二十年三月職制改正ニ依リ更ニ主典ニ補セラレ、同二十四年五月辭職。○鈴木寒之助、明治十六年九月主典ニ任ゼラレ、同二十年三月職制改正ニ依リ更ニ主典ニ補セラレ、同四十年二月辭職。○島川竹助、明治十九年四月主典ニ任セラレ、同二十年三月職制改正ニ依リ更ニ主典ニ補セラレ、同二十三年五月辭職。○長沼顧介、明治二十年七月主典ニ補セラレ、同二十四年五月辭職。○重見兵輔、明治二十三年五月主典ニ補セラレ、同四十二年九月辭職。○井上頼数、明治四十一年十二月主典ニ補セラル。○新海肇、明治四十二年十月主典ニ補セラル。○日比典三郎、明治四十三年四月二日主典ニ補セラル。

經理

本社の經理は社格制定に至るまでは勿論陸軍省に於て管掌し其の以後と雖も明治二十三年十一月までは同省に於て處理し、神職は更に關與せざりき。奉納金賽物等ある時は纏めて之を陸軍省に納附し、神饌、祭器、燈油、其他の諸費は申請して交附を受く。始めは第五局第九課の事務に屬せしが後には會計局專ら其任に當れり。二十三年十二月に至り神職の掌る所となり、經理局○後には官房主計に屬して嚴正なる監督を受け、更に經理事務囑託一員を置き神社の經理に從事せしめられしが、四十三年四月之を廢して爾來全然神職の掌理する所となりぬ。而して其經費取扱手續は二十三年十一月二十

一日に定められ、其後二十八年七月二十八日、三十一年二月四日、及三十七年四月十五日の改正を經て、三十九年四月十三日經理規定と改稱し、四十三年四月二日又更に處務規定と與に改正せられ以て現今に至れり。一品を購入するにも尚且傳票を要し、壹錢を支出するにも必ず小切手を以てす。嚴正明確最初よりして然り。物品會計も亦上に述ぶるが如し。三十六年一月該規定を達せられし已來、主典一員專ら之れに當り物品の配置と員數とを正確にす。

臨時大祭又は臨時祭に關する會計は該委員又は掛官之を處理し、事後本社に引繼を受くるの例なり。

寄附金の內を以て年々積立金をなすことは明治十二年七月二十一日修繕金蓄積方法を定められ、一ケ年金千圓を積立することゝ

なり、後三十一年二月四日之を改めて維持資金として五百圓宛積立つることに定め、三十七年四月十五日に至り更に七百五十五圓に改められしも再五百圓に復せられ、以來規則の改正は一再これ有りしかども其積立金額に於ては變る事なし。

（招魂社入用物品申立及買上等規則明治七年四月）一、炭油蠟ハ某月ノ定額ニ應シ每月末ニ翌月ノ分ヲ現品ニテ第五局ヨリ一局四課ヘ受取リ社司ヘ相渡スベシ但物品請取渡ニハ必ズ渡シ帳ニ記シ社司ノ請取印ヲ取置ク可シ。一、大祭用荒妙和妙ノ兩品及五十膳ノ覆巾紅白ノ絹ハ第五局ヨリ受取ヲ之ヲ社司ニ相渡ス可シ。一大中小祭及平常鎭末ノ物品ハ社司ヨリ都度物品買上檢印帳ニ記載シ一局第四課ヘ持參課長ノ檢印ヲ經テ然ル後社司之ヲ買上ベシ但之ガ爲第四課ニテ物品買上檢印帳ヲ製シ社司ヘ相渡シ置クベシ。一、獻供ノ物品モ都テ課長ノ檢印ヲ受ケ然ル後之ヲ買上グベキ事。一、物品ヲ買上タレバ必ズ商人ヨリ代金受取證書ヲ取リ置キ月末ニ至リ明細勘定書ニ添ヘテ一局課長ニ差出シ課長ノ點檢ヲ經テ後第五局ヘ申出金子可受取事。一、大祭ノ節獻供及其他ノ物品買上代價ハ其都度々々可

相渡事。一、大祭等調度ノ爲メ人夫ヲ要スル時ハ是亦第一局四課長ヘ申出ベシ。
一、番人ノ詰所用炭油等ハ社司受取ノ内ヨリ定額之通分配可致事。一、諸營繕及物品取替等ハ其都度々々社司ヨリ第一局四課長ヘ可申出事。一、大祭ノ節ハ勿論平常タリトモ第一局四課ヨリ時々交番ヲ以テ社頭ヘ監視ノ爲メ出頭スベシ此時萬事ヲ協議シ且監査ヲ受クベキ事
（明治十九年一月十八日大山陸軍大臣ヨリ會計局ヘノ達）遊就館收入金ノ儀自今其局ニ於テ靖國神社費ニ組込ミ管理可致此旨相達候事

警衛

本神社には特に警衛を附せらる。明治二年十二月以前にありては第二遊軍隊をして、本神社御用地取締に宛てられしが五年二月更に守兵を置かれぬ。而して十一年五月に至りて夜間には四方の門扉を鎖ち、通行を止めしめ、禁制の高札を建てたりき。然れどもなほ境内廣くして取締の不備を感じ、同年八月鳥居の下に詰所を設置し巡査を出張せしめしが、十四年十月に至り警視廳に通牒して之を止め、東京憲兵隊をして守衛に當らしむることゝなりぬ。然るに三十六年十月に至り、再び境内巡査派出所を設け巡査二名を出張せしめ、四十年六月また之を改めて憲兵派出所を建設し、該本部より憲兵を派出し、晝間は一名、夜間は二名宛交番警衛に當る事となりて現今に至れり。これ警衛沿革の大略なり。

例大祭及臨時祭又は招魂式等には臨時兵士を派遣せられて警衛せしむること最初より變動なし。

變災時に於ける社殿及附屬建物等の保護警衛の爲には、三十六年十二月を以て衛戍條例により近衛歩兵第二聯隊の一小隊を派遣

せらるゝことに定めらる。

（明治二年七月二十二日附）遊軍隊中村栫藏外十二名招魂社御用地當分取締申附候事

（明治二年十二月十一日第二遊軍隊へ達）招魂社御用地取締差免更ニ當省邸内取締申付候事但當省邸中へ引移可申事

（明治五年五月三日東京鎭臺へ達）來七日招魂社遷宮ニ付路次警衛トシテ其臺兵二小隊差出可申事但夜十一時同所へ著之事

（明治六年一月二十七日築造局へ達）招魂社大祭ニ付來ル三十一日二月一日二日凡三日ノ間取締トシ邸内取締組ノ内ヨリ十名宛同社へ差出可申此旨相達候事追テ雨天順延ノ事

（明治七年十一月四日東京鎭臺へ達）明五日招魂式執行候條警衛トシテ其臺歩兵一中隊可指出候此旨相達候事但同夜第十一時招魂場へ到著可致事

（明治十一年八月十六日達）招魂社境内手廣ニシテ取締向不行屆ニ付鳥居ノ下へ箱番取設巡査出張相成度段工兵第一方面ヨリ申出ニ付閉扉候事

（明治十一年五月六日招魂社木戸夜中閉扉ニツキ工兵第一方面提理今井中佐ヨリ山縣陸軍卿へ伺）九段招魂社内樹木兎角竊盜之者有之取締向行屆兼候就テハ以來該社通行木戸ハ午前第六時開扉午後第九時閉扉夜中往來差止メ候樣致度尤該近邊之住者不便ノ苦情モ無之哉一應東京府へモ及協議候處聊不都合無之旨回答有之候間御許可相成度此段相伺候也　追テ該社内乘馬散行或ハ通過候者儘有之地面相荒候ニ付祭日或ハ平日參詣等社前迄往來ノ外該庭内散行及通過ノ儀平生一切禁止相成度右ハ海軍省へモ御打合置相成候樣此段副テ相伺候也

追テ御許可ノ上ハ右木戸開閉ノ儀ハ該社事取扱候樣致度此段尙伺候也　伺之通　但門扉ハ毎日々出ニ開キ日沒ニ鎖シ車馬ハ通行不相成樣別紙圖面ノ通本社正面通路ヲ除クノ外裏門等支路へ車馬止可取設事（圖面略）

（明治十一年五月八日達）招魂社門扉夜中閉扉且境内車馬止劃札立設致度段工兵第一方面ヨリ申出ニ付聞屆相成門扉ハ日出ニ開キ日沒ニ閉扉車馬止ノ劃札ハ適宜之場所へ立設候樣相成候事